都城市文化財調査報告書第31集

丸谷地区遺跡群

KAMIDAIGOROU

上大五郎遺跡

丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

1995.3

都城市教育委員会

上大五郎遺跡　館跡

上大五郎遺跡　館跡入口部と掘立柱建物群

序　　文

この報告書は平成５年度に宮崎県北諸県農林振興局が計画した丸谷地区県営ほ場整備事業に伴い、国・県の補助を受け都城市教育委員会が実施した上大五郎遺跡の正式な発掘調査報告です。

特筆すべき調査成果としては、昨年度に刊行した概要報告書の中で簡単に紹介しましたように南九州で始めて中世館跡の全貌が明らかになったことなどがあげられます。

これらの発掘した資料が歴史教材として生かされるとともに、今後の学術研究や市史解明の一助となることを願っています。

本事業の推進と本書の刊行にあたり発掘調査に参加された皆様、宮崎県北諸県農林振興局、丸谷地区土地改良区関係者のご協力に対し深甚の謝意を表しますとともに、発掘調査と報告書作成に日夜ご尽力をいただきました宮崎県文化課の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成７年３月30日

都城市教育長

隈　元　幸　美

例　　言

1．本書は、丸谷地区県営ほ場整備事業に伴い都城市教育委員会が実施した上大五郎遺跡の発掘調査報告書である。

2．平成４年度に調査し、都城市文化財調査報告書第22集『丸谷地区遺跡群上大五郎遺跡』として報告された遺跡は、字図を再確認したところ小字が本池であったため「本池遺跡」と改称する。

3．発掘調査は平成５(1993)年11月23日から平成６(1994)年２月16日まで行った。

4．発掘調査は県文化課主事東憲章、同長友郁子が担当し、図面の作成については調査員のほか県文化課職員、補助員の援助を得、一部を業者に委託した。

5．遺物、図面の整理は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測、拓本、製図等は東のほか整理補助員の協力を得た。

6．本書に使用した位置図は、国土地理院発行の５万分の１図をもとに作成し、周辺地形図は宮崎県土地改良事業団体連合会作成の千分の１図をもとに作成した。

7．本書に使用した方位は、遺構分布図については座標北、個別の遺構実測図は磁北である。レベルは海抜絶対高である。

8．本書に使用した記号は以下の通りである。

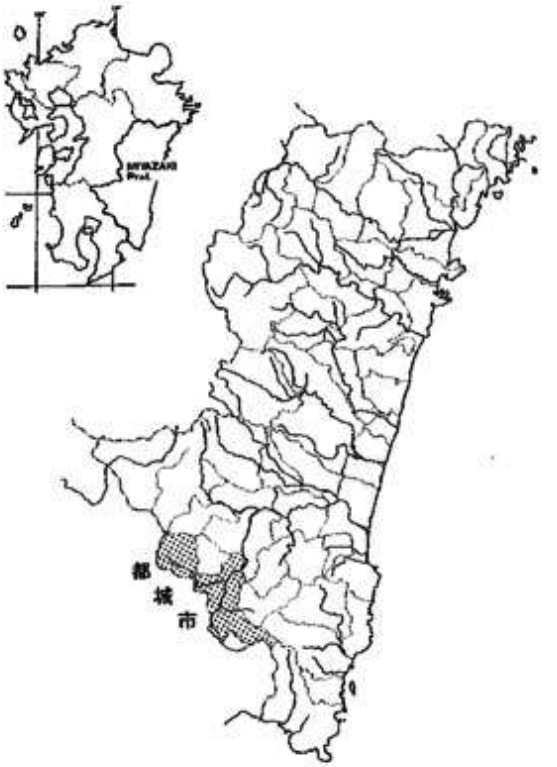
SA－竪穴住居　SB－掘立柱建物　SC－土坑　SD－土壙墓　SE－溝状遺構

9．本書に使用した写真は、東、長友、石川悦雄が撮影し、空中写真については業者に委託したものである。

10．火山灰分析を㈱古環境研究所に委託し、成果報告を第Ⅴ章として掲載した。

11．本書は第Ⅰ章を都城市教育委員会が、第Ⅴ章を㈱古環境研究所が、その他を東が執筆し、編集は東が行った。

12．調査にあたっては、宮崎県北諸県農林振興局、大五郎土地改良区等の多大な協力を得た。



本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至る経緯
　第2節　調査の組織

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の概要 …… 6
　第1節　調査の経過
　第2節　層序

第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物 …… 9
　第1節　竪穴住居と出土遺物
　第2節　中世館跡と出土遺物
　第3節　その他の遺構と遺物

第Ⅴ章　自然科学分析（火山灰分析） …… 41

第Ⅵ章　おわりに …… 48

挿 図 目 次

第1図　位置図 …… 4
第2図　遺跡周辺地形図 …… 5
第3図　基本土層柱状図 …… 6
第4図　上大五郎遺跡調査区全体図 …… 7～8
第5図　ＳＡ１遺構・遺物実測図 …… 10
第6図　ＳＡ２遺構・遺物実測図 …… 11
第7図　ＳＡ３実測図 …… 12
第8図　ＳＡ３遺物実測図 …… 13
第9図　館跡遺構分布図 …… 15～16
第10図　館跡入口部実測図 …… 17
第11図　ＳＥ１土層断面図 …… 18
第12図　ＳＥ１・２土層断面図 …… 19

第13図　ＳＥ１出土遺物実測図 …… 20
第14図　ＳＢ５実測図 …… 21
第15図　ＳＢ６・７・８実測図 …… 22
第16図　ＳＢ９・10実測図 …… 23
第17図　ＳＢ11・12・13実測図 …… 24
第18図　ＳＢ14・15・16実測図 …… 25
第19図　ＳＢ17・18実測図 …… 26
第20図　ＳＢ19・20実測図 …… 27
第21図　ＳＢ21・22実測図 …… 28
第22図　ＳＢ24実測図 …… 29
第23図　ＳＢ23・25実測図 …… 30
第24図　ＳＢ26実測図 …… 31
第25図　ＳＢ27・28実測図 …… 32
第26図　ＳＢ29・30実測図 …… 33
第27図　ＳＢ１・２実測図 …… 35
第28図　ＳＢ３・４実測図 …… 36
第29図　ＳＢ31・32・33・34実測図 …… 37
第30図　ピット出土遺物実測図 …… 38
第31図　上大五郎遺跡第１地点中世溝の土層柱状図 …… 46
第32図　上大五郎遺跡第１地点近世溝覆土の土層柱状図 …… 47
第33図　上大五郎遺跡柱穴（パターンⅠ）覆土の土層柱状図 …… 47
第34図　上大五郎遺跡柱穴（パターンⅡ）覆土の土層柱状図 …… 47
第35図　館跡建物の変遷(1) …… 50
第36図　館跡建物の変遷(2) …… 51
第37図　建物棟方位分布図 …… 51

表　目　次

第１表　上大五郎遺跡掘立柱建物一覧表 …… 39
第２表　上大五郎遺跡出土土器観察表 …… 40
第３表　上大五郎遺跡出土石器計測表 …… 40
第４表　上大五郎遺跡のテフラ検出分析結果 …… 45

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

宮崎県都城市丸谷地区では丸谷川の河川改修と県営ほ場整備事業が平成2年度から同時並行で進められている。

それらに伴って数次にわたる発掘調査が実施され、ほ場整備事業（面工事関係）に伴うものについては平成3～5年度に合計5遺跡の発掘調査が行われた。

①平成3年度　中大五郎第1遺跡［調査面積：3,000㎡］
　　中大五郎第2遺跡［調査面積：6,000㎡］
②平成4年度　本池遺跡　［調査面積：10,000㎡］
③平成5年度　上大五郎遺跡　［調査面積：18,000㎡］
　　前畑遺跡　［調査面積：4,000㎡］

さて、平成5年度事業区域に所在する上大五郎地区は、平成4年度に調査を実施した本池遺跡の西側に隣接しており、遺跡の存在は当初から予想されていた。

そういった状況の中で、平成5年7月19日に宮崎県北諸県農林振興局、宮崎県文化課、都城市耕地課、同市文化課の4者で埋蔵文化財の取扱いに関する協議がもたれた。その中で、7月中に出される実施設計決定後に、現状保存が困難な部分については都城市教育委員会が主体となって記録保存のための発掘調査を実施することとなり、9月末までに農林振興局と市文化課が発掘調査の契約を締結し、10月中旬ごろの稲刈りを待って発掘調査に着手することとなった。さらに、その前に遺跡の範囲を明確にするための試掘調査を行うことも確認された。

これを受け、平成5年8月19日から同月20日にかけて宮崎県文化課が当該地区の試掘調査を実施したところ、遺物の密度は低いものの御池軽石層上面において若干の柱穴が確認され、造成工事によって70cm以上削平される18,000㎡の範囲については地下の遺物・遺構に影響を及ぼすおそれがあり、記録保存のための発掘調査が必要であると指摘された。その結果をもとに市教育委員会が発掘調査費用の見積りを行い、農林振興局からの委託金と国・県補助を受け、9月補正予算で発掘調査費用を計上した。

現場における発掘調査は宮崎県文化課職員が担当し、平成5年11月23日から平成6年3月2日まで行われた。また、出土品や図面整理等は平成5年度から平成6年度にかけて引き続き行われ、平成6年度末に正式報告書刊行の運びとなった。なお、他の遺跡については平成7年度に報告書を作成する予定である。

第2節　調査の組織

調査の主体は都城市教育委員会であり、経費の運用も同市文化課が行った。ただし、現場における調査および出土遺物の整理・報告書作成は宮崎県文化課が担当した。なお、現場における発掘調査が平成5年度で、報告書作成が平成6年度である。

調査責任者	都城市教育長	隈元幸美	(平成5・6年度)
調査総括	都城市文化課長	松山　充	(平成5・6年度)
調査事務局	同文化課長補佐	遠矢昭夫	(平成5・6年度)
	同　文化財係長	海田　茂	(平成5年度)
	同　文化財係長	永野元保	(平成6年度)
	同　主事	横山寿代	(平成5年度)
	同　主事	児島咲子	(平成6年度)
	同　主事	矢部喜多夫	(平成5年度)
	同　主事	桑畑光博	(平成6年度)
	同　臨時職員	竹下愛子	(平成5年度)
調査指導	宮崎県教育庁文化課	石川悦雄	(平成5年度)
	同　主査	永友良典	(平成6年度)
調査員	同　主事	東　憲章	(平成5・6年度)
	同　主事	長友郁子	(平成5年度)

発掘作業員

荒ヶ田エダ　有水　トミ　有吉ナツエ　有村ツギエ　井之上クミ　榎木　ミエ
榎木　ツネ　榎木　ハナ　大盛　祐子　柿木チエ子　柿木スミ子　釘崎トミ子
樋牟礼エイ子　是枝ユキエ　児玉　スエ　児玉トシ子　児玉　ワイ　坂元トミ子
下田代清海　新田ハル子　茶園フミ子　茶園　国春　徳満　章子　徳満　和子
徳満めぐみ　徳満　ミツ　徳満　ヨリ　野口　虎男　西　ナツエ　繁昌　悦子
繁昌ミサト　浜田　寛　広村　ミキ　吹上　ナル　吹上　マサ　吹上　ツユ
福留　春夫　福盛　信子　福盛ヤエ子　堀之内ミツ子　坊地　トミ　皆元紀里子
皆吉昭一郎　皆吉ハツミ　南崎　ミツ　盛田　ユミ　森山キミエ　山下フクエ
吉原　オル　吉村　則子

整理作業員

雁野あつ子　押川　保子　久木田知代子

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

上大五郎遺跡は、宮崎県都城市丸谷町大字上大五郎に所在する。都城市は宮崎県の南西部に位置し、東・西・南の三方を山に囲まれた盆地の中央部である。北西には標高1,574mの秀峰高千穂の峰を仰ぎ、南西は鹿児島県に境を接する。

上大五郎遺跡は、市内北東部を東流する大淀川水系丸谷川の右岸、標高約142mの低位段丘上に立地する。遺跡周辺の歴史像は、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査を初めとして、平成２年度から行われた丸谷川河川改修事業、ほ場整備事業等に伴う一連の丸谷地区遺跡群の発掘調査によりその一端が明らかにされつつある（第１図）。上大五郎遺跡に隣接する本池遺跡では、平安時代から中世にかけての掘立柱建物群、竪穴状遺構、土壙墓が検出され、墨書土器を含む大量の土師器、須恵器、布痕土器、越州窯系の輸入陶磁器などが出土している。中大五郎遺跡、下大五郎遺跡、前畑遺跡、山ノ田第１遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が調査されている。これらの遺跡群はいずれも丸谷川を望む低位段丘上に営まれている。検出された竪穴住居跡の多くは方形、円形を貴重とし間仕切り突出壁を持ついわゆる花弁状住居であり、この地域の特色のひとつと考えられる。谷ノ口遺跡、下川原遺跡は丸谷川により開析された低地部に立地する。中世以降の水田跡が検出されている。

11世紀に入ると荘園開発が活発になり、後に日向、大隅、薩摩に亘る巨大荘園となる「島津荘」の開発も開始されている。新田開発の進展と同時に、荘官層を中心に地名を名字とする開発領主の成立も相次いだと考えられる。後に都城盆地の政治的統一を達成する北郷氏の居館および北郷300町は市北東部、山田町、高崎町付近に存在した可能性が高い。15世紀初頭から16世紀中頃まで断続的に続く島津氏、伊東氏の抗争は、現実にはそれぞれの自立性を保持した大小の地元の領主層を主体とする。椎山氏、北郷氏など島津氏の一族に出自を持つものも含め領主達は、一族を各地に分出しながら、居館を構え、山上や台地、独立丘陵上に築いた城郭を保持していた自立性の高い支配者層である。16世紀中頃、北郷氏による都城盆地の政治的統一の達成後は、地元領主層の居館や山城による支配体制の再編成が行われたと思われ、都之城を中心とする求心的な支城の展開と地域支配が行われた。

〈参考文献〉

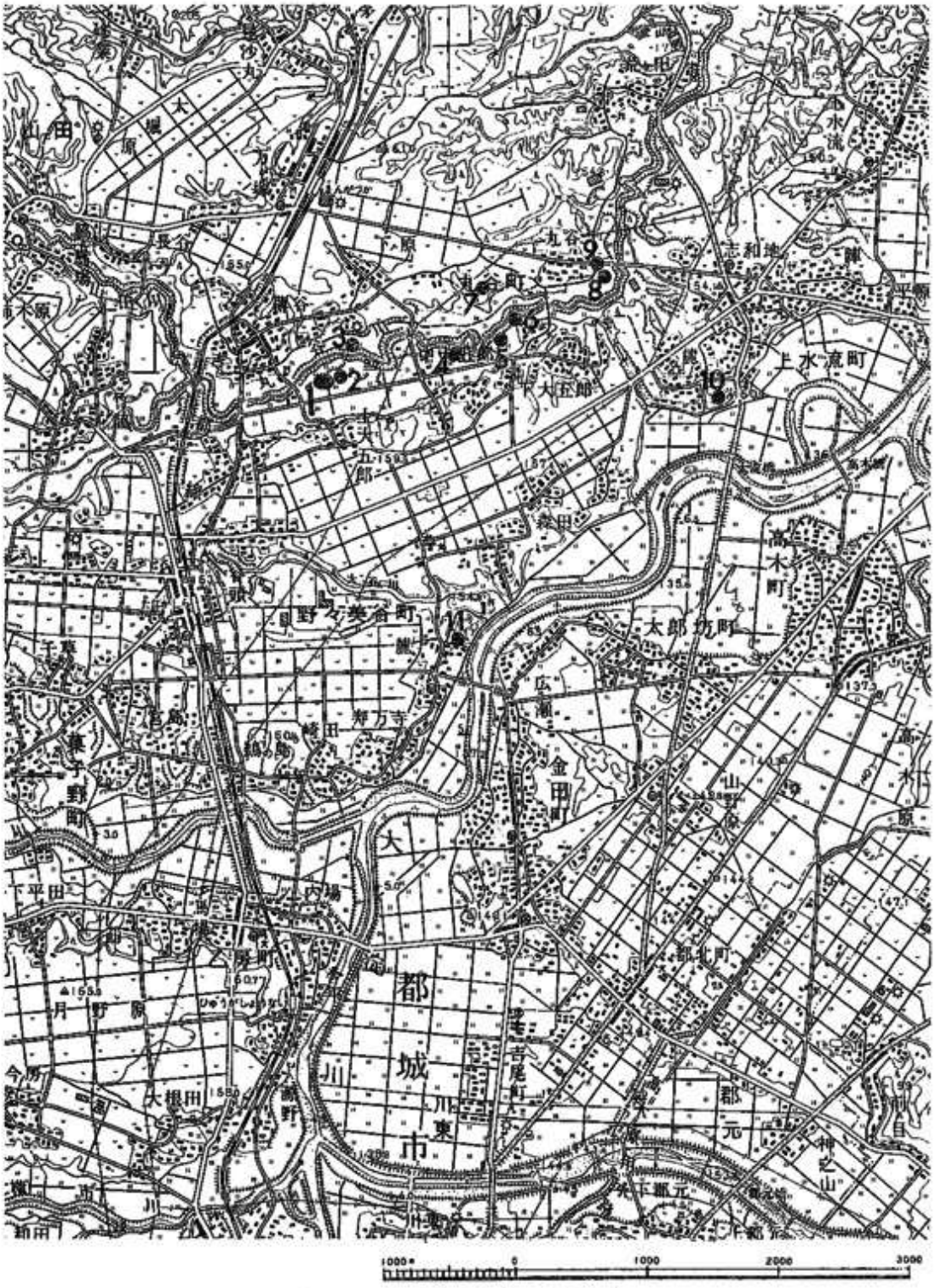
山田　渉　「都城市域の歴史的環境の概要」『都城市遺跡詳細分布調査報告書－市内南部－』都城市文化財調査報告書第６集　1987

都城市教育委員会

『中大五郎第１遺跡・中大五郎第２遺跡』都城市文化財調査報告書第20集　1992

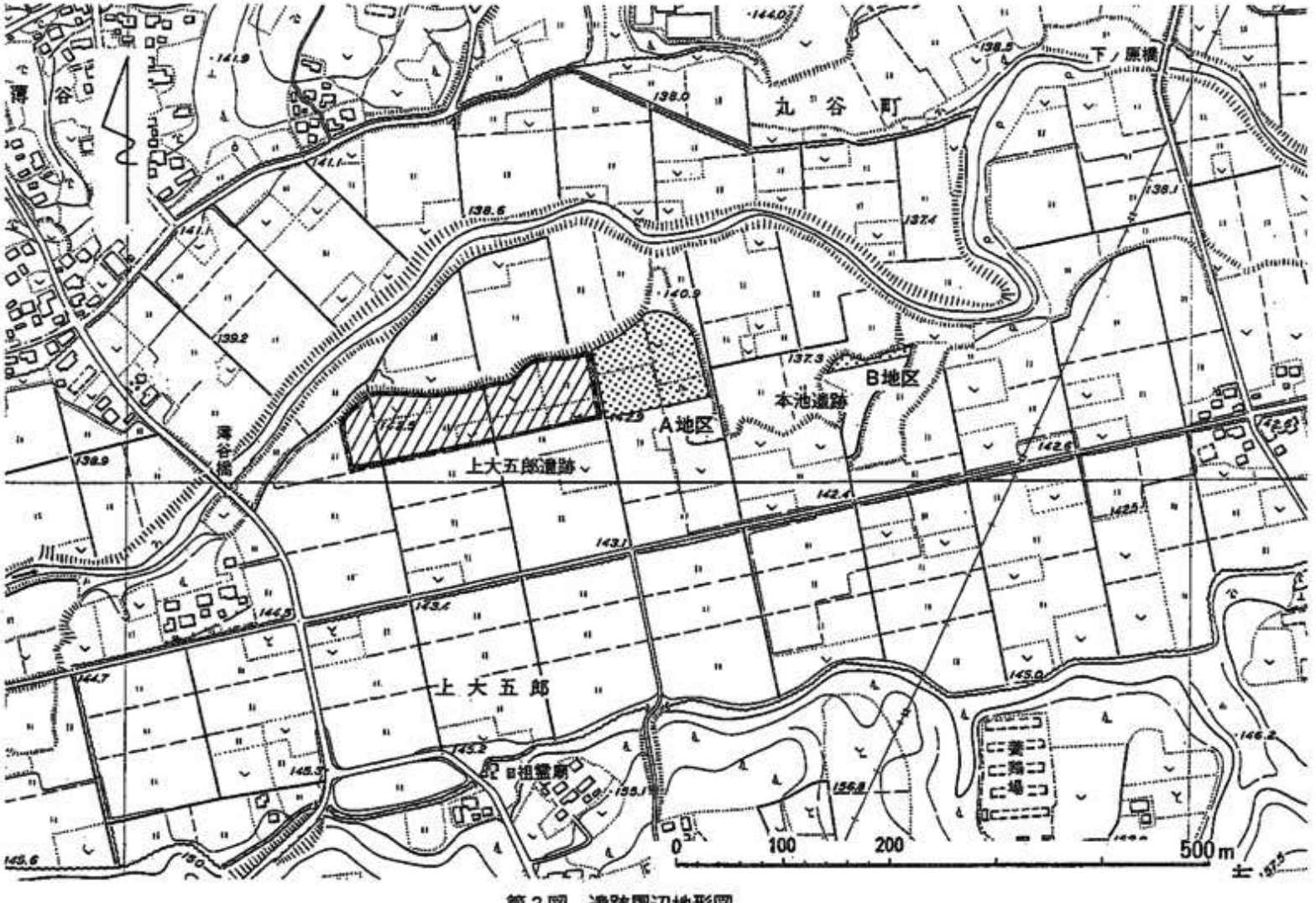
『丸谷地区遺跡群　上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第22集　1993

『上大五郎遺跡・前畑遺跡』都城市文化財調査報告書第26集　1994



第1図　位　置　図（1／50,000）

1．上大五郎遺跡　2．本池遺跡　3．谷ノ口遺跡　4．中大五郎遺跡
5．下大五郎遺跡　6．下川原遺跡　7．丸谷第1遺跡　8．前畑遺跡
9．山ノ田第1遺跡　10．志和池遺跡　11．野々美谷城跡



第2図　遺跡周辺地形図

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　調査の経過

調査にあたり、国土座標に合わせた10mグリッドを設定した。重機により表土の除去作業を行ったが、調査面積が広範囲にわたり、また黒色土中での遺構検出が困難であると判断されたため、水田耕作土（表土）下の黒色土までを除去し、霧島御池火山灰（御池ボラ）の混入する層より精査を開始した。実掘面積は12,500㎡である。精査の結果、竪穴住居跡３軒、溝状遺構４条、ピット約1000基、土坑数基を検出した。溝状遺構の内２条は、集中するピット群を長方形状に取り囲んでおり館跡と推定された。

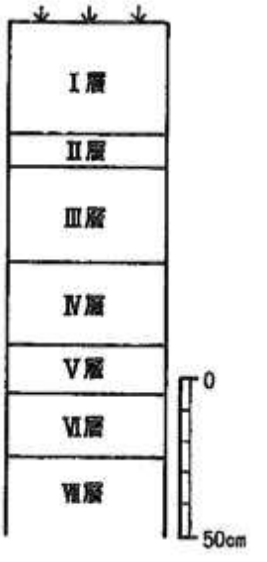
３軒の竪穴住居跡の調査（掘り上げ・実測）に並行し、ピット群の分布図をコンピュータシステムにより作成した。その際、ピット平面形（円形、方形）と埋土（黒色土、御池ボラ混黒褐色土、灰白色土混褐色土）の組合せにより６種類に分類した。ピット群については現場において掘立柱建物の認定を行い、完掘後個別に実測を行った。調査終了時には館跡部（調査区東半部）のみ写真測量を行った。

調査の結果、弥生時代中～後期の竪穴住居跡２軒、古墳時代初頭の竪穴住居跡１軒、中世の館跡１区画（２条の溝状遺構、門状遺構、掘立柱建物24棟他）、掘立柱建物10棟（館跡に含まれない）、土壙墓１基、近世の溝状遺構２条他を検出した。遺物は、弥生土器、土師器、陶磁器、石器、銭貨等が出土した。

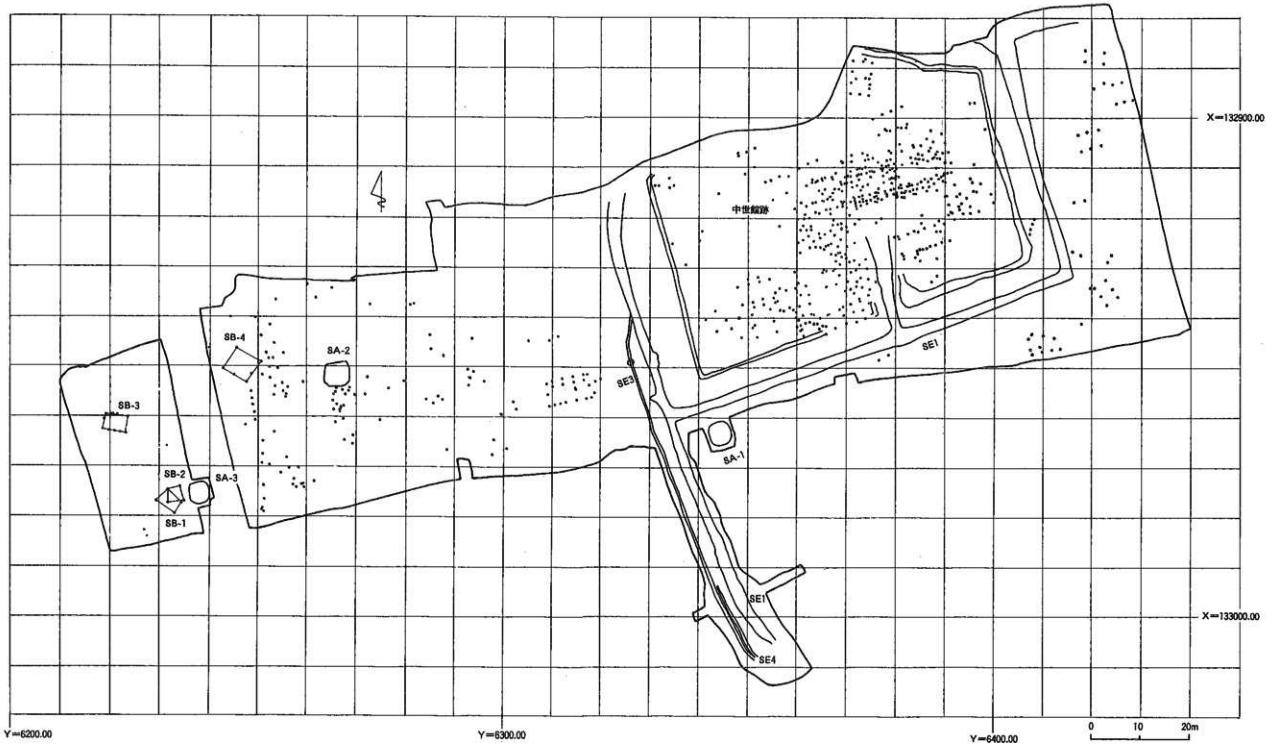
第2節　層　序

上大五郎遺跡は現況が水田であり、耕作土・床土層下には、軟質の黒色土が30～50cmの厚みで堆積している。地表下約1.5mには霧島御池噴出降下軽石（御池ボラ）が２～３mの堆積を見せる。これは縄文中期後半から後期前半（約3,000年前）に噴出したものと考えられる。黒色土と御池ボラの中間層（約50cm）は漸移的に御池ボラの混入の度合いが高くなる。調査では、Ⅵ層上面で遺構検出を行った。

Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：水田基盤層、鉄分を多く含む
Ⅲ層：漆黒色土層
Ⅳ層：漆黒色土に霧島御池火山灰を少量含む層
Ⅴ層：漆黒色土に霧島御池火山灰を多量含む層
Ⅵ層：霧島御池火山灰に黒褐色土を含む層
Ⅶ層：霧島御池火山灰層



第３図　基本土層柱状図



第4図　上大五郎遺跡調査区全体図

第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物

第１節　竪穴住居と出土遺物

３軒の竪穴住居を検出した。検出面からの深さが非常に浅く、平面プランも不明瞭な部分が多い。遺物量も少ないが、図化した土器・石器については観察表・計測表を作成した。参照されたい。

ＳＡ１（第５図）

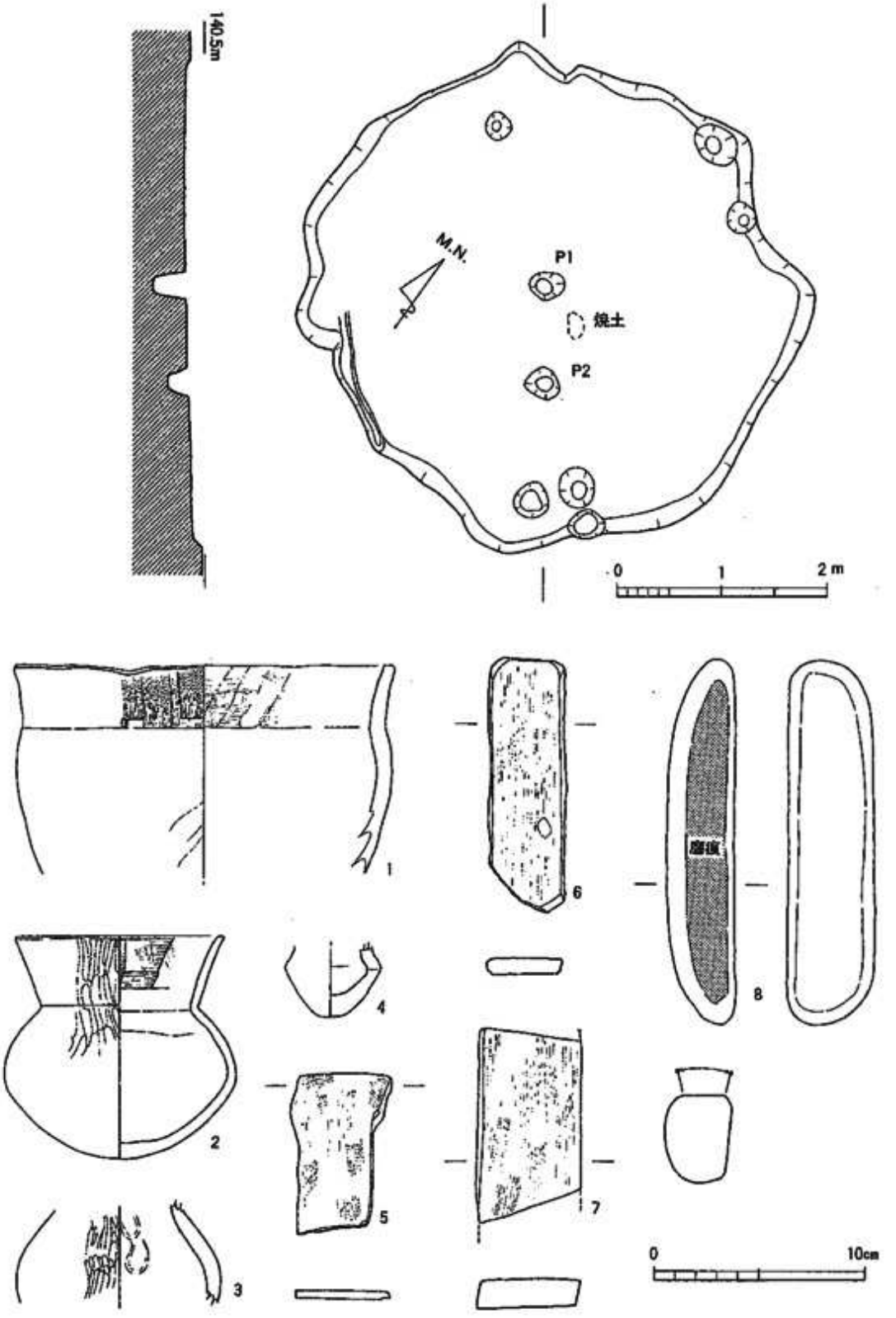
調査区の南端に検出された。検出面からの深さが５～10cmと浅く、壁の立ち上がりも不明瞭で、プランは不整形である。主柱穴はP1・P2である。南壁際に壁帯溝の一部と思われる浅い落ち込みが見られる。P1・P2間のやや東寄りの部分の床面が若干焼けていた。出土遺物は甕形土器、壺形土器、砥石である。１は頸部のくびれが鈍く、口径と胴部最大径（胴上部）がほぼ等しい。器面は風化気味であるが、外面にタテ、ナナメのハケ目が見られる。口縁部内面は指でなで上げた後にハケ目調整が見られる。口唇部は指押さえで整えている。２、３は小型丸底壺で、外器面は丁寧にミガキが行われている。２は胎土精良で器壁も薄い。３は胎土に若干の小礫を含むが器面のミガキは緻密で、光沢をもつ黒塗様のものが見られる。４はミニチュア壺であるが、内外面ともにナデ調整が見られ、胴屈曲部で接合痕が観察される。５～８は砂岩製の砥石で研磨痕が顕著である。出土土器よりＳＡ１の時期は古墳時代初頭と思われる。前述のとおり不整形のプランであるが、古墳時代初頭の時期、主柱穴の位置、南壁の壁帯溝等を考慮すると、主軸が北から約45°西に振られた方形プランの住居であった可能性が高い。あるいは、都城地域では古墳時代初頭まで間仕切り住居が残ることが知られ、このＳＡ１も間仕切り住居であった可能性も否定できない。そのように想定すれば方形基調の不整形プランであろうか。

ＳＡ２（第６図）

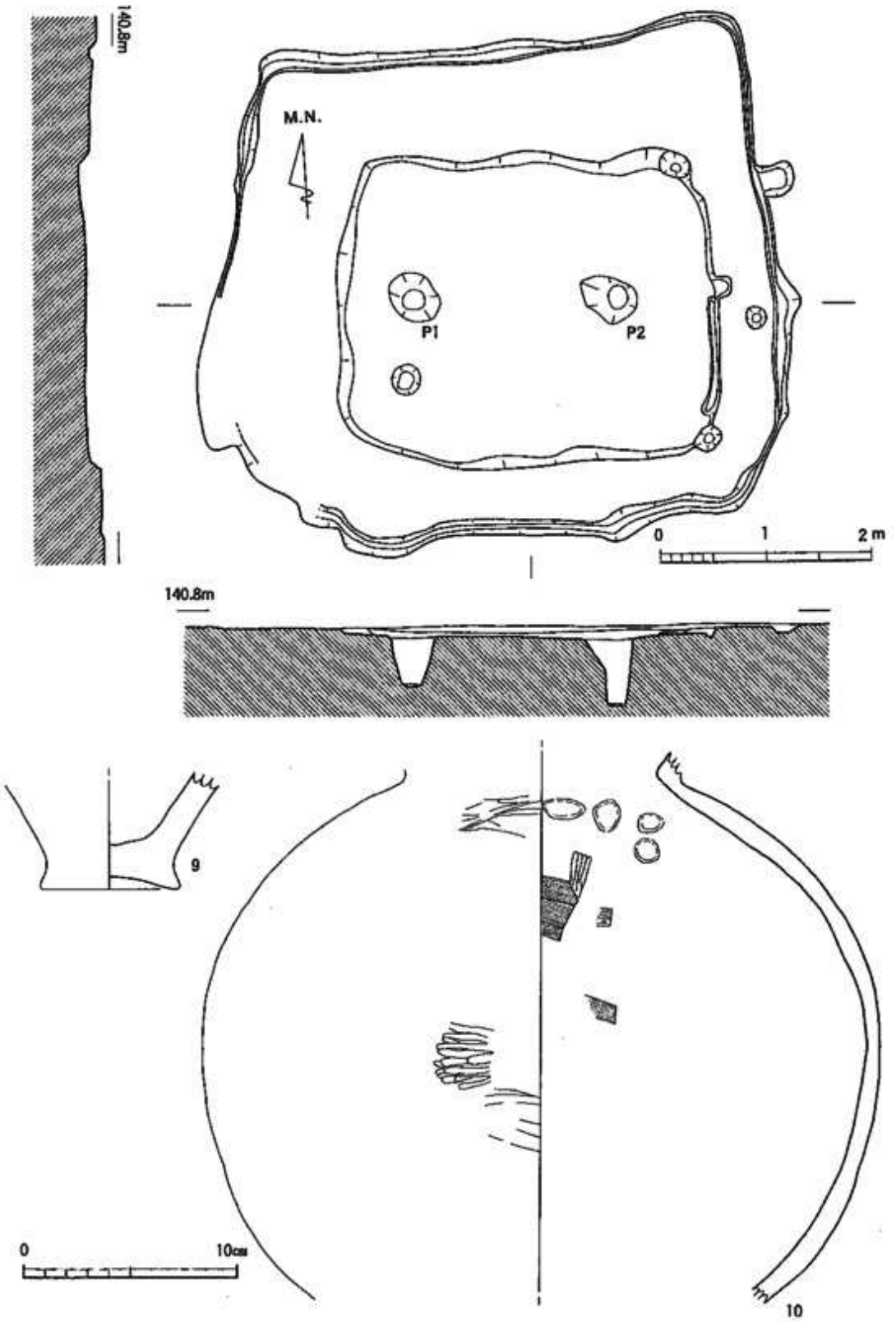
調査区の西半部に検出した。長軸約5.3m、短軸約4.7mの略方形プランである。床面中央部は長方形状に約10cm下がり、四周がベッド状となる。主柱穴はP1・P2で、主軸はほぼ東西方位に一致する。壁帯溝がほぼ一周するが、南西隅でプランの乱れが認められ壁帯溝もその部分では検出できていない。南壁の中央約２mが内側に10～20cmほど入り込んでおり、出入口となる可能性が高い。焼土等は見られなかった。住居、柱穴の埋土は黒色土に御池ボラを含んでおり、柱痕は確認できなかった。出土遺物は土器細片が多く、図示できるものは少ない。９は甕形土器で、上げ底の底部は外に張り出す。底部内面には炭化物が付着し、外面は円周状のナデ調整である。10は壺形土器で、球状の胴部外器面は風化気味であるが一部に丁寧なミガキが残る。頸部は明瞭に屈曲し、口縁は外反すると思われる。弥生時代後期初頭に位置付けられよう。

ＳＡ３（第７～８図）

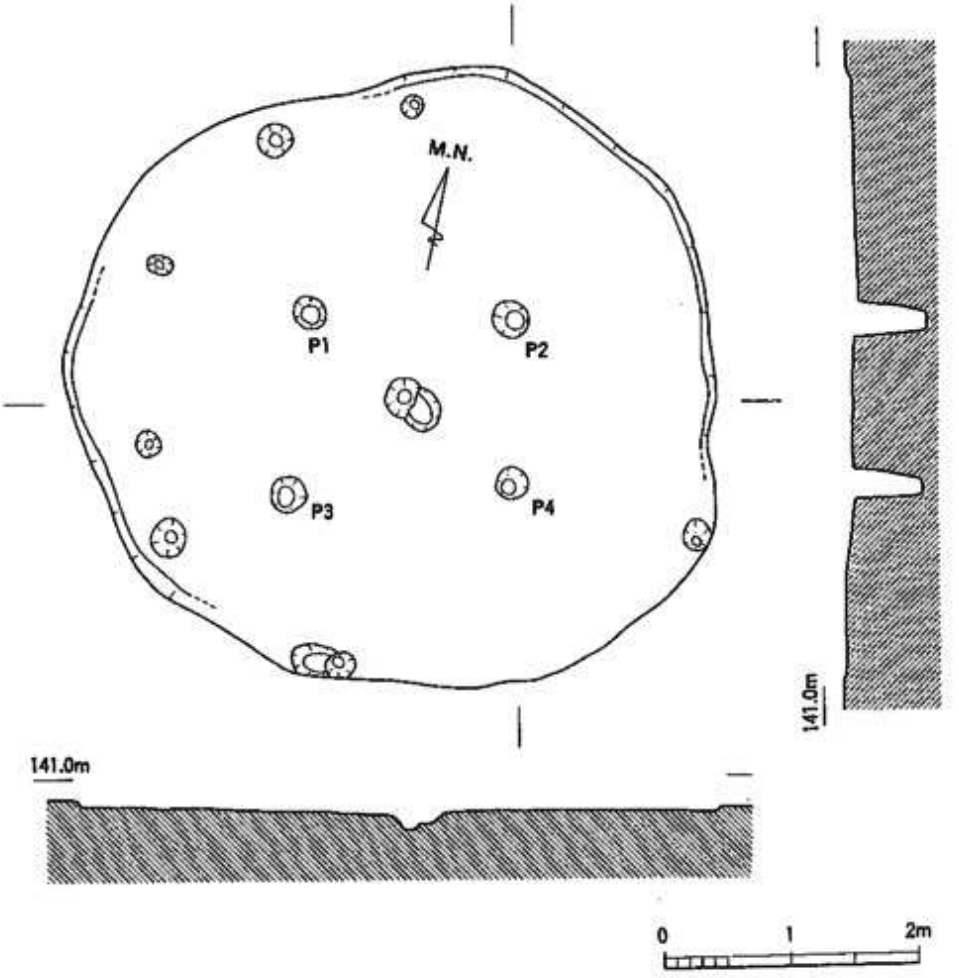
調査区の西半部に検出した。ＳＡ２から約35m離れている。長径5.2m、短径4.7mの円形プランで主柱穴はP1～P4の４本柱である。検出面からの深さが浅く、北西側、南東側では下端が不明瞭である。中央部にピットをもち、また西半の壁寄りにも浅いピットが円形の配置を見せる。東壁際にも１基のピットが見られることから、１m前後の間隔で全周していたものと推定され



第5図 SA-1遺構・遺物実測図（1／60,1／3）

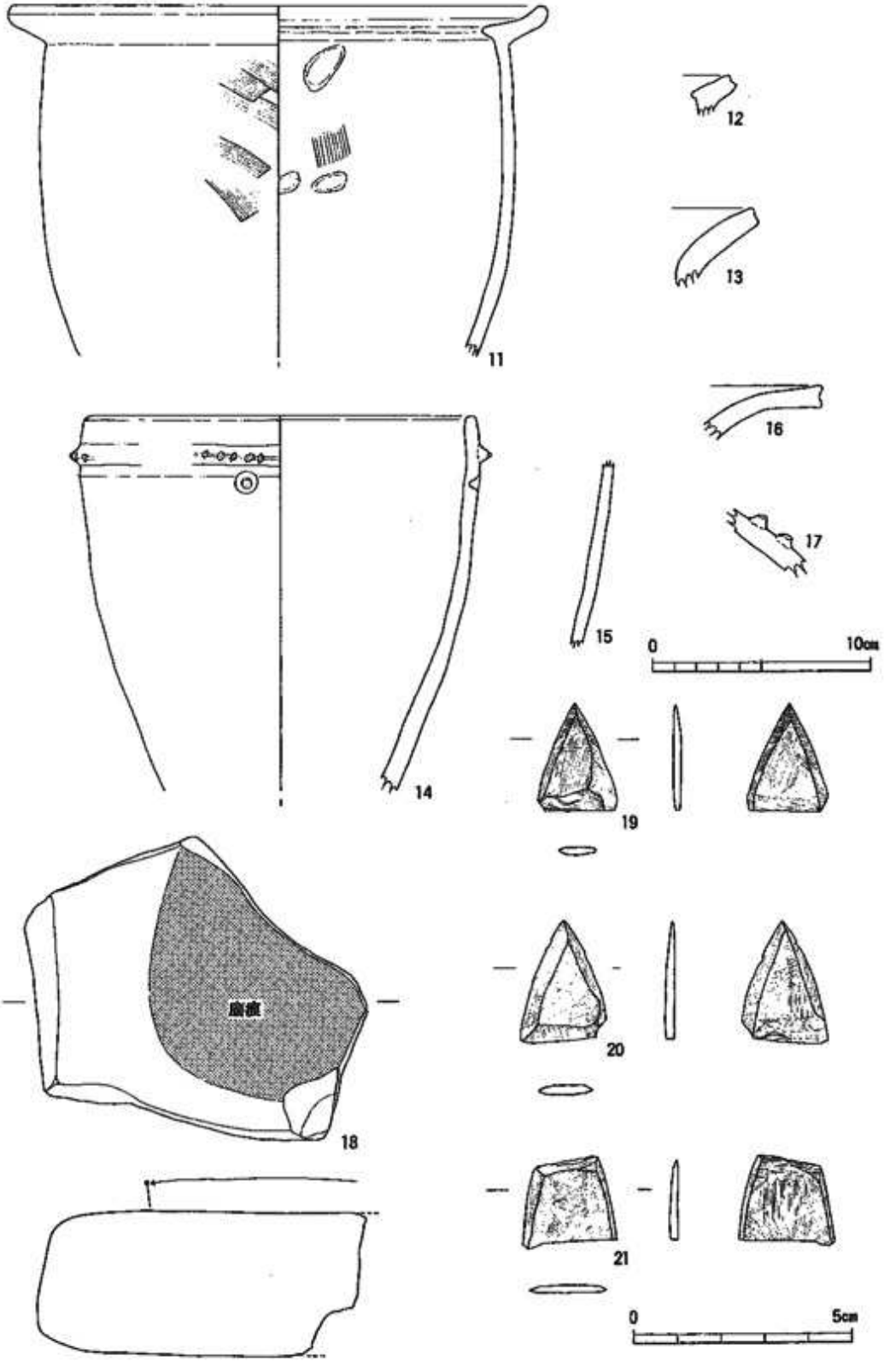


第6図 SA-2遺構・遺物実測図（1／60,1／3）



第7図　SA-3実測図（1／60）

る。補助的な柱穴であろうか。出土遺物は甕形土器、壺形土器、石皿、磨製石鏃がある。11は口縁内面が内側に張り出し、やや受けるような形状の口縁は端部を丸く仕上げる。胴部はあまり張らず、器面にはナナメのハケ目が見られる。12は口縁内面が内側に張り出し、口唇部には凹線が施される。13も口唇部に凹線を持ち、頸部内面に若干のミガキが見られる。14はいわゆる下城系の断面三角形の刻目突帯を持つ甕である。突帯下に未貫通穿孔が見られる。調整は胴下半部は縦のナデ、突帯の上下は横のナデである。15は薄手の器壁に縦のハケ目が顕著で、内外面に炭化物の付着が見られる。16は大きく外反する壺の口縁で、口唇部に凹線を持つ。器壁は風化が著しく調整不明である。17は壺の肩部で2状の刻目突帯を持つ。18は砂岩の石皿である。19、20は緑色凝灰岩製、21は頁岩製の磨製石鏃である。出土土器より弥生時代中期末～後期初頭の時期に位置付けられる。



第８図　SA-３遺物実測図（11～18→1／3,19～21→2／3）

第２節　中世館跡と出土遺物（第９～13図）

ＳＥ１、ＳＥ２の２条の溝状遺構、ＳＢ５、ＳＢ８～30の24棟の掘立柱建物群からなる。ＳＥ１によって区画される面積は約5,000㎡である。

ＳＥ１・ＳＥ２

ＳＥ１は東、南、西の三方をコ字形に区画し、北は段丘縁で切れている。東側は約50ｍ。溝底レベルは南東角から北（段丘縁、丸谷川）に向けての下り傾斜となっている。溝底には硬化面が続き、区画とともに通路としても使用されている。南東でほぼ90°西に曲がり約88ｍ延びる。溝底レベルはほぼ水平である。南東角から約38ｍの地点で北に向けＴ字状に枝分かれしており、約20ｍの上りスロープで館内に入る（第10図）。硬化面も約13ｍ延びている。約８ｍ入った地点から、1.5ｍ間隔で左右対称の大小のピットが３対並んでおり、さらに７ｍ進むと１対のピットが見られる。門状の施設が存在したと思われる。入口部には長方形の土坑が２基見られ、さらに奥にも１基の土坑と東壁際に溝が見られる。土層の観察では、ＳＥ１掘削当初から土坑、溝ともに設けられたようであるが、早い時期に埋まっている。排水を意図して掘削されたものと思われる。ＳＥ１は南西角でＴ字状に南北に分かれる。南には約50ｍ、硬化面を伴いながら延びる。北には約45ｍ延び段丘縁で切れている。硬化面は、南西角から約５ｍの地点で西に曲がり溝外に向かう。それより北側は断面がＶ字状となり、硬化面は見られない。溝底レベルは北に向け下がっている。

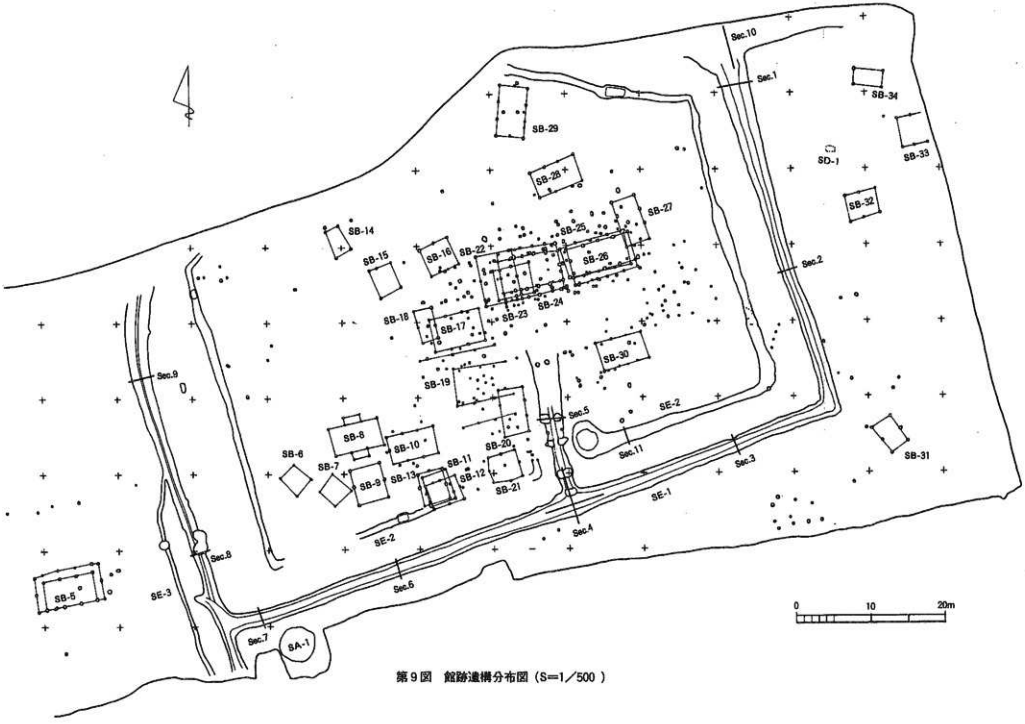
ＳＥ２はＳＥ１の内側に平行して見られる。両者の間隔は、東面と南面で約５ｍ、西面では７～９ｍである。両者間にはほとんど遺構が存在しない。ＳＥ２の深さは平均して10～20㎝と浅く、硬化面は見られない。ＳＥ１が北面の段丘縁に切られるのに対し、ＳＥ２は北東部で約110°西に折れ20ｍほど延びている。北西部では約120°東に折れ３ｍほど延びている。ＳＥ２は４ヶ所で長方形、円形の土坑状の落ち込みを持つ。埋土の観察より切り合いではなく、ＳＥ２に伴うことが確認された。特に入口部東側の円形の落ち込みは径３ｍ、深さ約1.8ｍの大きなものである。

ＳＥ１、ＳＥ２の埋土は第11、12図のとおりである。それぞれに桜島噴出の白色軽石（文明ボラ、1471（文明３）年降下）の堆積が見られる。ＳＥ１の溝底に見られる硬化面は、館西面を除き全体に続いている。また、一部では文明ボラの上位でも硬化面が見られ、文明ボラ降下の前後の時期に使用されたことが窺える。

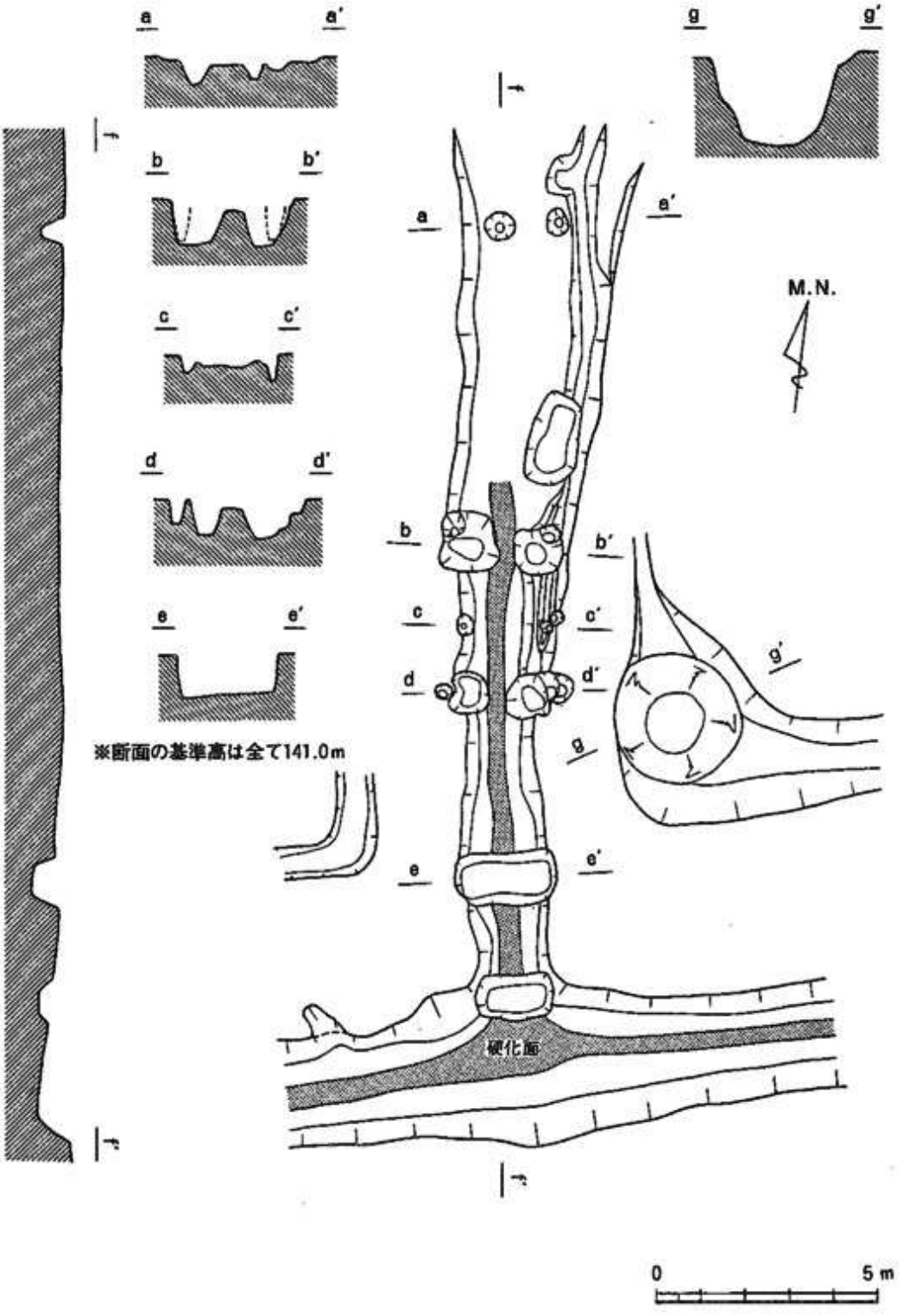
遺物はＳＥ１から土師器、須恵器、陶磁器等が出土している（第13図）。22は土師器の高台付碗である。ヘラで切り離した後に高台を張り付けている。23、24は東播系須恵器の捏鉢である。25、26は青磁碗で、25にはヘラ描連弁文が見られる。27は白磁碗で見込みは蛇の目釉剥ぎ、外面は体部下半、高台が露胎である。28、29は白磁の皿で、28は見込みにハマ痕が見られる。外面は高台内が露胎である。29は見込みに蛇の目釉剥ぎ、外面は体部下半が露胎である。30は陶器の碗で内面は無釉である。

掘立柱建物群（ＳＢ５、ＳＢ８～30）（第14～26図）

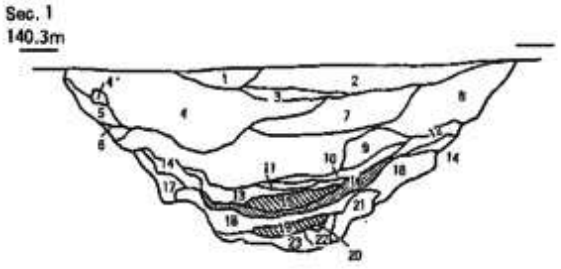
34棟検出された掘立柱建物のうちＳＥ１に区画されるものは25棟であるが、ＳＢ６、７は棟



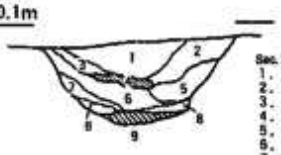
第９図　館跡遺構分布図（S=1／500）



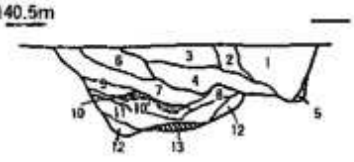
第10図　館跡入口部実測図（1／150）



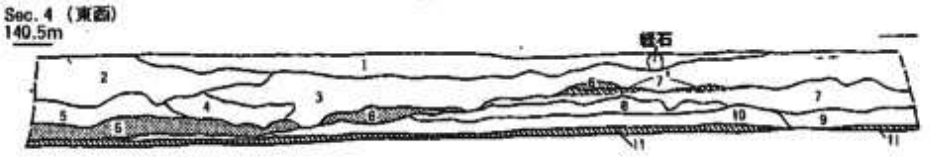
Sec. 1
1. 灰褐色砂質土　白色パミス（御岳・新期パミス）を含む　硬
2. 紫褐色土　白色パミス（霧島・新期パミス）を含む　硬
3. 茶褐色土　御池ボラを含む　やや硬
4. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を含む　やや軟
4' 御池ボラブロック
5. 黒色土　御池ボラを少量含む　軟
6. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　軟
7. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を含む　やや軟
8. 黒色土　御池ボラを少量含む　軟
9. 暗褐色土　御池ボラを多く含む　軟
10. 黒褐色土　文明ボラを多く含む　やや軟
11. 淡黒色土　粘質　軟
12. 黒褐色土　文明ボラを少量含む　軟
13. 暗灰色土　文明ボラを多く、御池ボラを少量含む　軟
14. 暗褐色土　御池ボラを多く含む　軟
15. 暗褐色土　硬化面　文明ボラ・御池ボラ・小礫を多く含む
16. 文明ボラ
17. 御池ボラ　転落ブロックで黒褐色土を少量含む
18. 暗褐色土　御池ボラ・小礫を多く含む　やや軟
19. 褐色土　硬化層（SE1全体に続く）　御池ボラ・小礫を含む
20. 黒褐色土　御池ボラを含む　やや硬
21. 御池ボラ　転落ブロックで淡褐色土を少量含む
22. 暗茶褐色土　御池ボラを多く含む　やや硬
23. 黒色土　御池ボラを少量含む　湧り有　軟



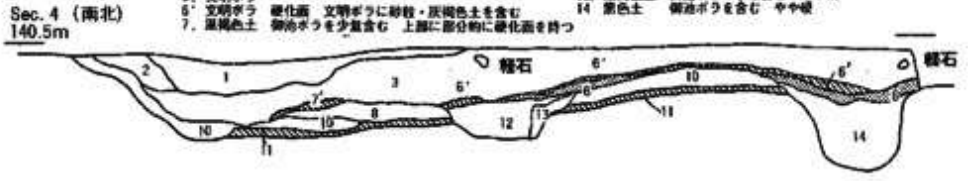
Sec. 2
1. 黒色土　御池ボラを少量含む　軟
2. 茶褐色土　文明ボラを多く、御池ボラを少量含む　やや硬
3. 黒色土　文明ボラを多く含む　やや軟
4. 文明ボラ
5. 黒色土　文明ボラ・御池ボラを少量含む　やや硬
6. 黒色土　御池ボラを少々含む　やや軟
7. 黒褐色土　御池ボラ細粒を含む　やや軟
8. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を含む　やや軟
9. 黒褐色土　硬化面　御池ボラ・小礫を含む

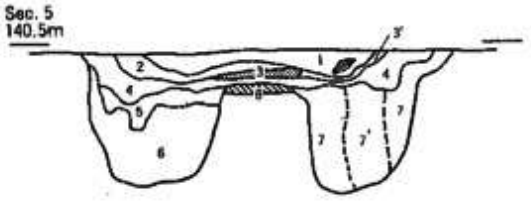


Sec. 3
1. 黒色土　御池ボラ含まず　軟
2. 黒色土　御池ボラを少量含む　軟
3. 茶褐色土　御池ボラ含む　やや軟
4. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや軟
5. 黒褐色土　4に近似するが御池ボラをより多く含む　やや軟
6. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや軟
7. 黒褐色土　御池ボラ細粒・文明ボラを少量含む　やや軟
8. 黒褐色土　7に近似するがより黒みが強い　軟
9. 黒褐色土　御池ボラを含む　軟
10. 文明ボラ
11. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を含む　やや軟
12. 黒褐色土　11に近似するが御池ボラが多い　やや硬
13. 黒褐色土　硬化面　御池ボラ・小礫を含む



Sec. 4
1. 黒色土　御池ボラを少量含む　軟
2. 黒褐色土　御ボラを少量含む　砂粒を含む　軟
3. 黒褐色土　御池ボラを少量含む　小礫を含む　やや軟
4. 黒褐色土　文明ボラ・御池ボラ・小礫を少量含む　やや軟
5. 黒褐色土　文明ボラ・御池ボラを少量含む　やや軟
6. 文明ボラ
6' 文明ボラ　硬化面　文明ボラに砂粒・灰褐色土を含む
7. 黒褐色土　御池ボラを少量含む　上部に部分的に硬化面を持つ
8. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　硬
9. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや硬
10. 黒褐色土　御池ボラを含む　やや硬
11. 黒褐色土　硬化面　御池ボラ・小礫を含む
12. 黒褐色土　御池ボラを含む　やや硬
13. 黒褐色土　御池ボラ・小礫含む　やや硬
14 黒色土　御池ボラを含む　やや硬



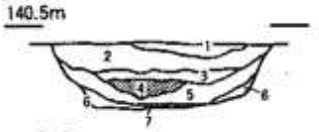


Sec. 5
1. 黒褐色土　文明ボラ・御池ボラ・小礫を少量含む　やや軟
2. 黒褐色土　文明ボラを含む　やや軟
3. 文明ボラ
3' 文明ボラ　黒褐色土を含む　硬くしまる
4. 黒褐色土　御池ボラを少量含む　やや軟
5. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや軟
6. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を多く含む　柱痕不明瞭　やや軟
7. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや軟
7' 黒褐色土　7に近似　黒みが強い　柱痕か　やや軟
8. 黒褐色土　硬化面　御池ボラ・小礫を含む

0　1　2m

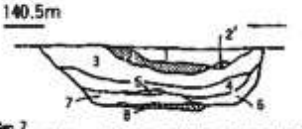
第11図 SE-1　土層断面図（1／60）

Sec. 6
140.5m



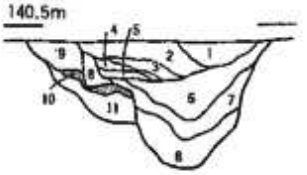
Sec. 6
1. 黒褐色土　御池ボラを含む　やや軟
2. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや軟
3. 暗灰褐色土　文明ボラ多く含む　やや硬
4. 文明ボラ
5. 黒褐色土　御池ボラを含む　軟
6. 暗褐色土　御池ボラ・小礫を多く含む　軟
7. 黒褐色土　硬化面　御池ボラ・小礫を含む

Sec. 7
140.5m



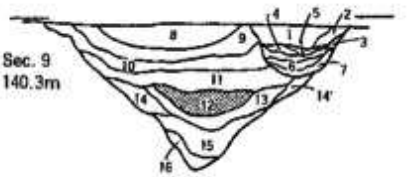
Sec. 7
1. 黒褐色土　文明ボラ・御池ボラ・小礫を少量含む　やや軟
2. 文明ボラ
2' 暗灰褐色土　文明ボラを多く含む　やや軟
3. 黒褐色土　御池ボラを含む　軟
4. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を含む　軟
5. 黒褐色土　御池ボラを含む　硬くしまる
6. 黒褐色土　御池ボラ・小礫を多く含む　やや軟
7. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　硬くしまる
8. 黒褐色土　硬化面　御池ボラ・小礫を含む

Sec. 8
140.5m



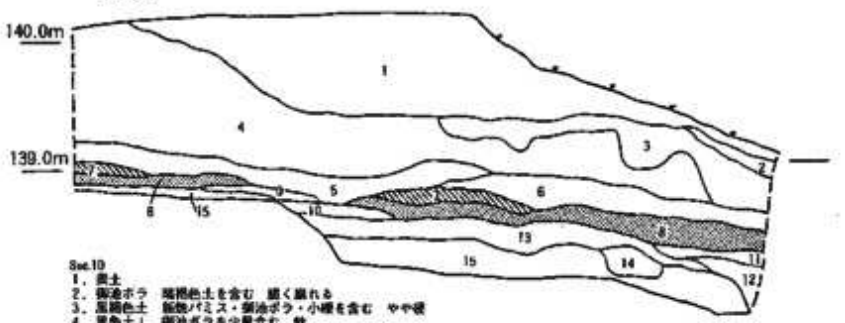
Sec. 8
1. 黒褐色土　御池ボラを含む　やや軟
2. 暗褐色土　御池ボラを非常に多く含む　やや軟
3. 黒褐色土　御池ボラを含む　軟
4. 黒褐色土　3より混入が強く、御池ボラの粒が大きい　軟
5. 暗褐色土　御池ボラを非常に多く含む　軟
6. 黒褐色土　御池ボラを含む　軟
7. 黒褐色土　御池ボラの細粒を含む　やや硬
8. 黒褐色土　御池ボラを少量含む　軟
9. 暗灰褐色土　文明ボラ・御池ボラを含む　やや硬
10. 文明ボラ
11. 暗褐色土　御池ボラを多く含む　やや軟

Sec. 9
140.3m



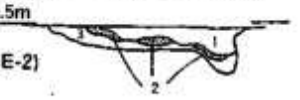
Sec. 9
1. 極暗灰色土　灰白色シルト・新期パミス・御池ボラを含む　鉄分多　やや硬
2. 暗灰褐色土　新期パミス・御池ボラを含む　やや硬
3. 極暗灰色土　砂粒・灰白色シルトを含む　やや軟
4. 黒褐色土　砂粒・新期パミスを含む　れやや軟
5. 黒褐色土　砂粒・灰白色シルトを多く含む　やや軟
6. 暗灰色土　砂粒を多く含み、新期パミス・御池ボラを含む　やや軟
7. 暗灰色土　灰白色シルト・砂粒・新期パミス・御池ボラを含む　鉄分多　やや軟
8. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや硬
9. 黒褐色土　御池ボラを少量含む　やや軟
10. 黒褐色土　御池ボラの細粒を少量含む　やや軟
11. 暗灰褐色土　文明ボラ・御池ボラを多く含む　やや硬
12. 文明ボラ
13. 黒色土　御池ボラ・小礫を含む　やや硬
14. 暗褐色土　御池ボラの細粒を多く含む　やや硬
14' 暗褐色土　14に酷似するが、御池ボラがより多い　やや硬
15. 暗褐色土　御池ボラを非常に多く含む　やや硬
16. 暗褐色土　大粒の御池ボラを非常に多く含む　やや硬

Sec.10
140.0m
139.0m



Sec.10
1. 表土
2. 御池ボラ　暗褐色土を含む　崩れる
3. 黒褐色土　新期パミス・御池ボラ・小礫を含む　やや硬
4. 黒色土　御池ボラを少量含む　軟
5. 黒褐色土　御池ボラを多く含む　やや硬
6. 黒褐色土　文明ボラ・御池ボラを多く含む　やや硬
7. 黒褐色土　硬化面　文明ボラ・御池ボラを多く含む
8. 文明ボラ
9. 黒褐色土　文明ボラを多く含む　やや硬
10. 黒色土　文明ボラ・御池ボラを少量含む　やや軟
11. 黒褐色土　御池ボラ細粒を多く含む　やや軟
12. 暗褐色土　御池ボラ非常に多く含む　やや硬
13. 黒褐色土　御池ボラを含む　黒みが強い　やや軟
14. 御池ボラブロック
15. 黒色土　御池ボラを少量含む　やや軟

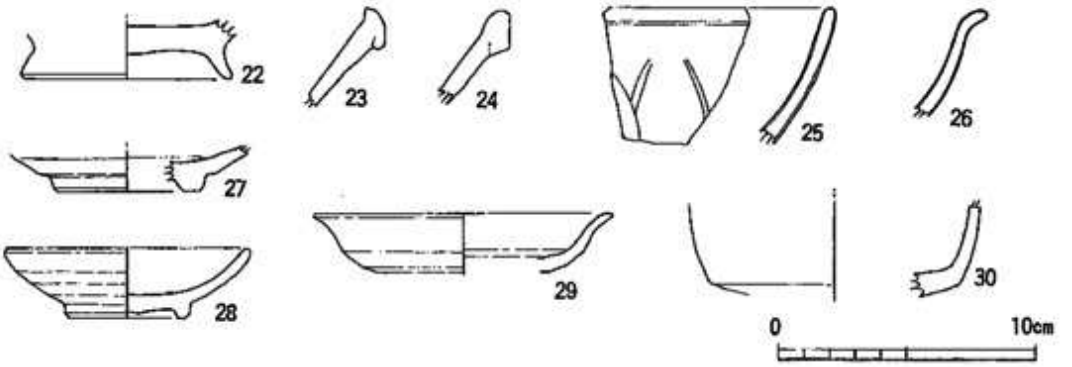
140.5m
Sec.11 (SE-2)



Sec.11
1. 黒褐色土　文明ボラ・御池ボラを少量含む　軟
2. 文明ボラ　灰褐色土を含む
3. 黒色土　御池ボラ細粒を少量含む　軟

0　1　2m

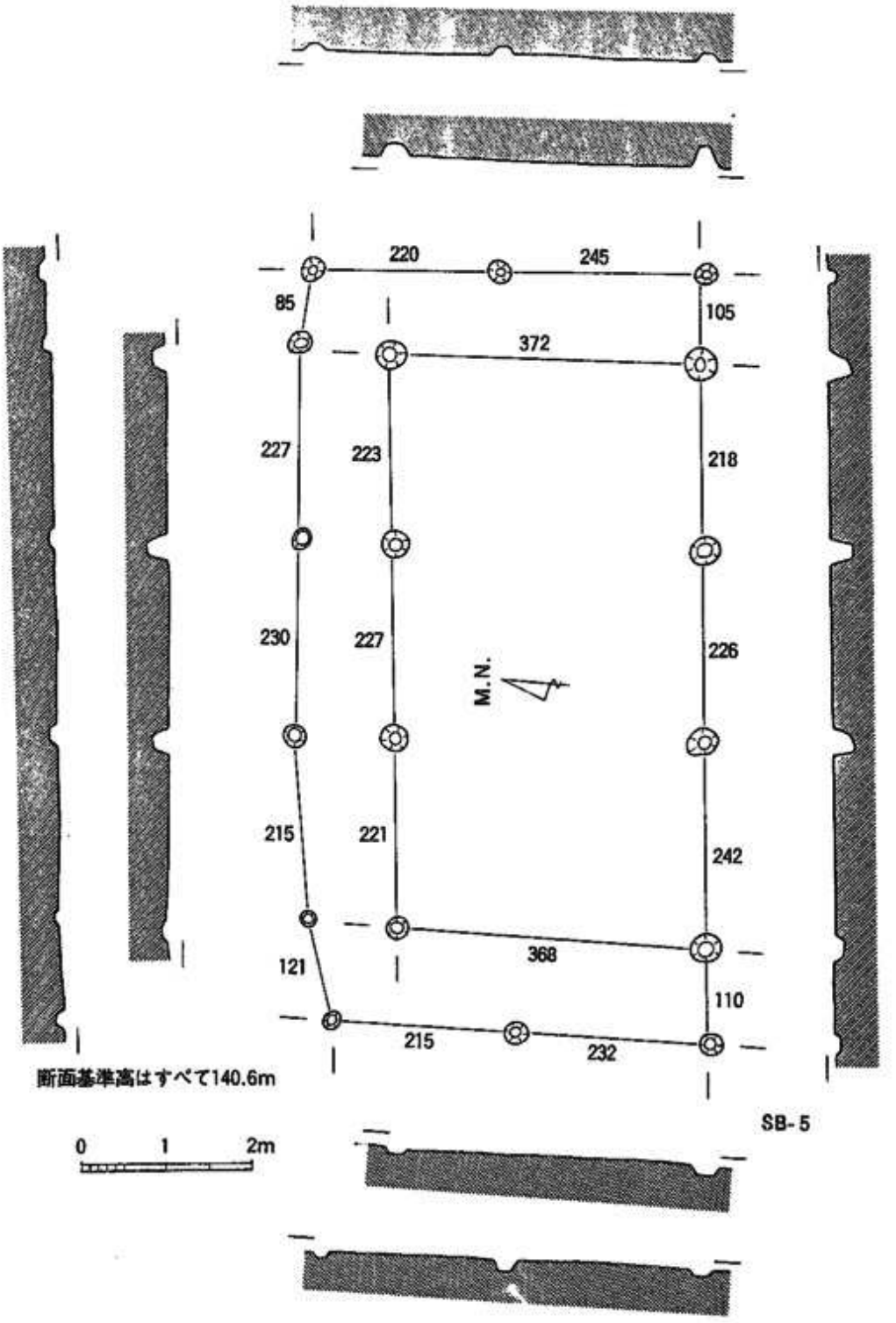
第12図　SE-1・2土層断面図（1／60）



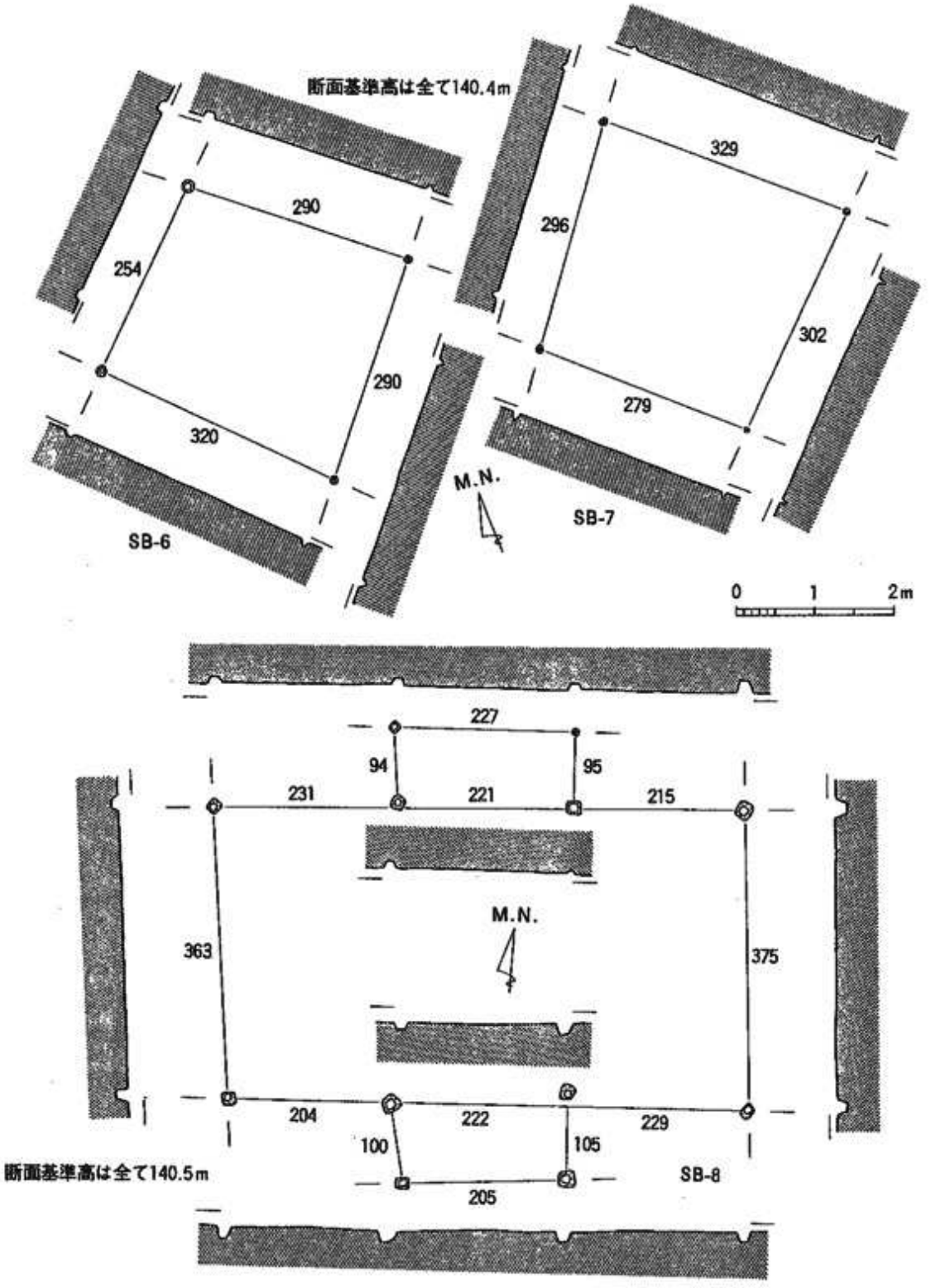
第13図　SE-1 出土遺物実測図（1／3）

方向が明らかに異なり、柱穴状態の観察からも他からは区別される。また、ＳＢ５はＳＥ１の西約10mに位置し区画外ではあるが、棟方向、柱穴状態の観察から館跡に伴うものと判断された。よってＳＢ５、ＳＢ８～30の24棟をＳＥ１、２に伴う館跡の掘立柱建物と認識した。

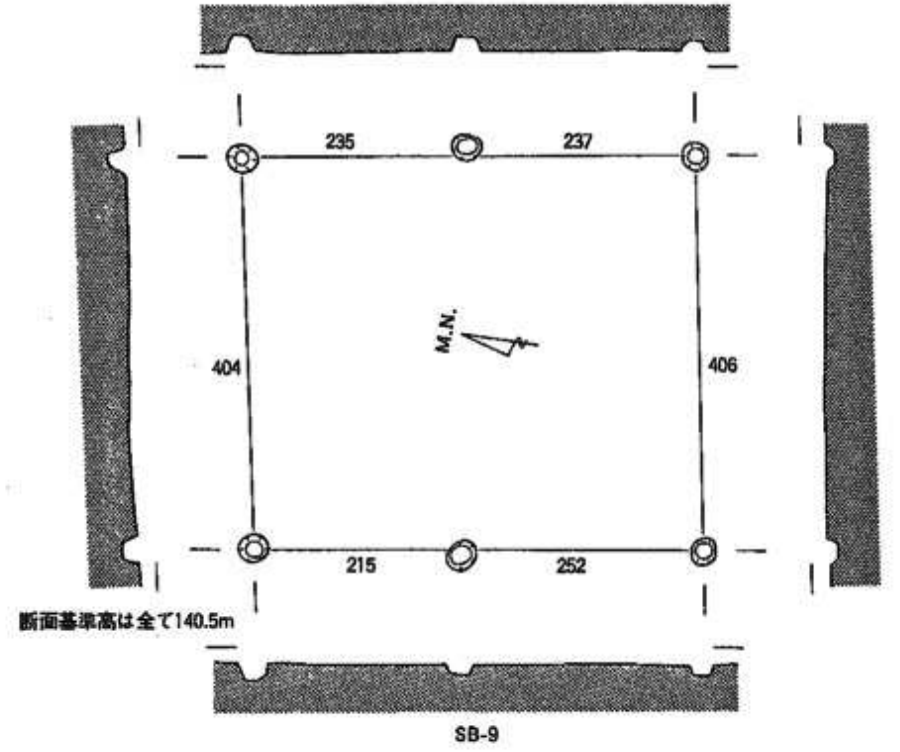
ＳＢ５は、身舎は１×３間、東西棟で東・西・北の３面に庇が付く。柱穴埋土は黒色土で、柱痕は確認できなかった。根固め等は見られない。ＳＢ８は、身舎は１×３間、東西棟で南・北の２面に１間の庇が付く。柱穴平面形は方形である。ＳＢ９は１×２間、南北棟で柱穴埋土は黒色土である。ＳＢ10は２×３間、東西棟である。南西角と東面中央の柱穴は検出面が低いせいか10cm程度の小さなものである。ＳＢ11、12、13は切り合う形で検出された。ＳＢ11、13は１×２間、南北棟である。ＳＢ11の柱穴平面形は方形である。ＳＢ12は２×２間で東西棟である。柱穴埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ14は１×１間で南北棟である。柱穴平面形は方形である。ＳＢ15は１×１間、南北棟である。北梁やや西寄りに柱穴がある。柱穴平面形は方形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ16は１×２間で東西棟である。ＳＢ17は１×３間で東西棟である。柱穴平面形は方形である。ＳＢ18は１×２間で南北棟である。柱穴平面形は方形である。ＳＢ19は１×３間で東西棟である。柱穴平面形は方形で、北面桁側で柱穴が一ヶ所確認できなかった。ＳＢ20は１×３間で南北棟である。柱穴平面形は方形で、西面桁側で柱穴が一ヶ所確認できなかった。館跡入口部と平行して西側に建てられている。ＳＢ21は２×２間の総柱建物で東西棟である。柱穴平面形は方形である。入口部の西側、ＳＥ２のコーナーに沿うように建てられている。ＳＢ22は、身舎は１×２間、南北棟で南北２面の梁側に庇が付く。柱穴平面形は方形である。身舎北西角の柱穴は検出されなかった。ＳＢ23は１×２間で東西棟である。柱穴平面形は方形である。ＳＢ24は、身舎は２×５間、東西棟で南北２面に庇が付く。柱穴平面形は方形で、埋土は灰白色細砂混入黒褐色土である。館入口の正面突き当たりに位置し、規模の面でも桁行５間のものは検出された掘立柱建物群の中で最大のものである。ＳＢ25・26はＳＢ24の東隣に位置し、立替えと思われる状況で検出されている。ともに２×４間で東西棟である。ＳＢ25は西梁中央の柱穴が検出されなかった。ＳＢ26は南面に庇を持

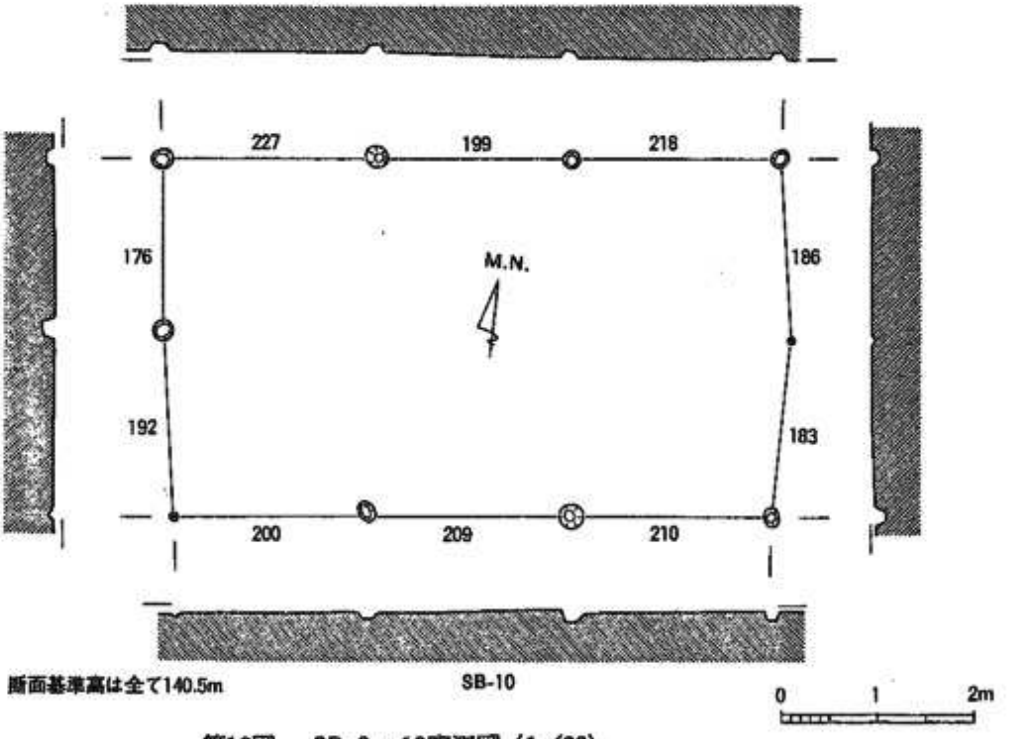


第14図 SB-5 実測図（1／80）

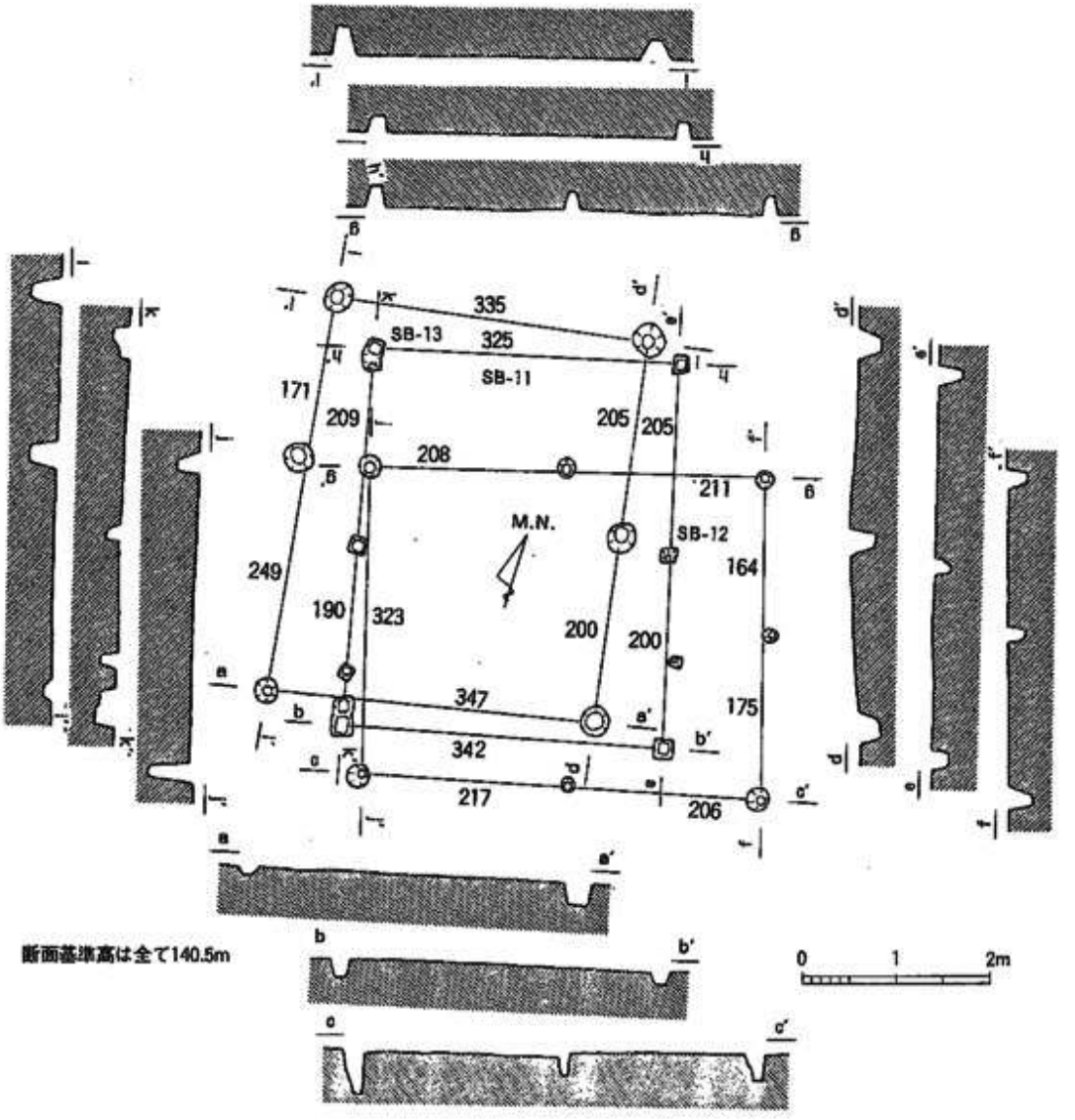


第15図　SB-6・7・8実測図（1／80）



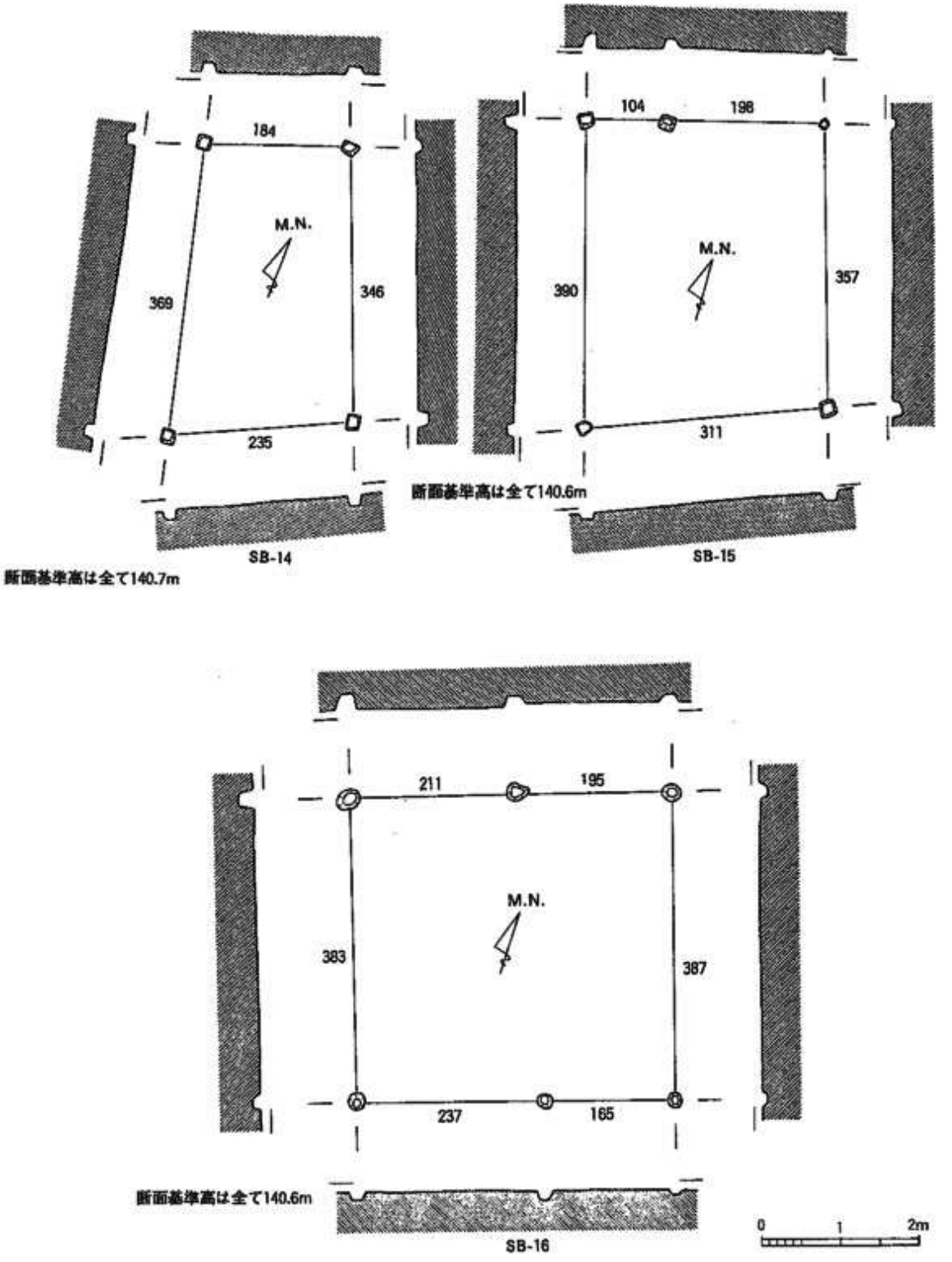


第16図　SB-9・10実測図（1／80）

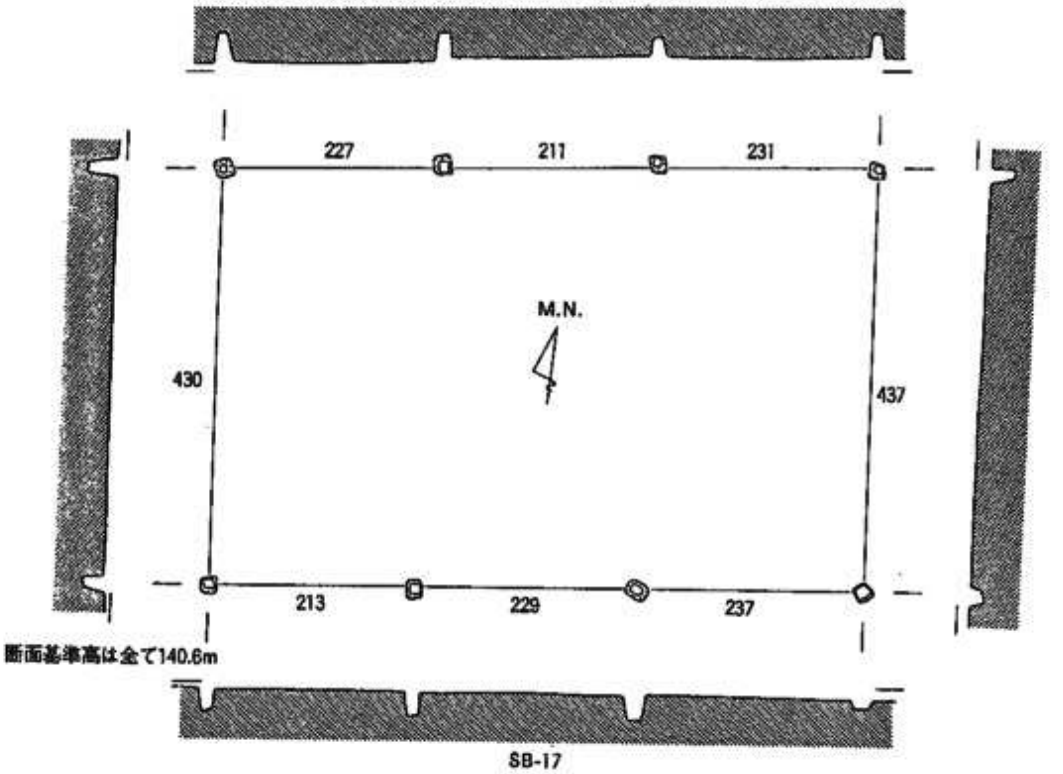


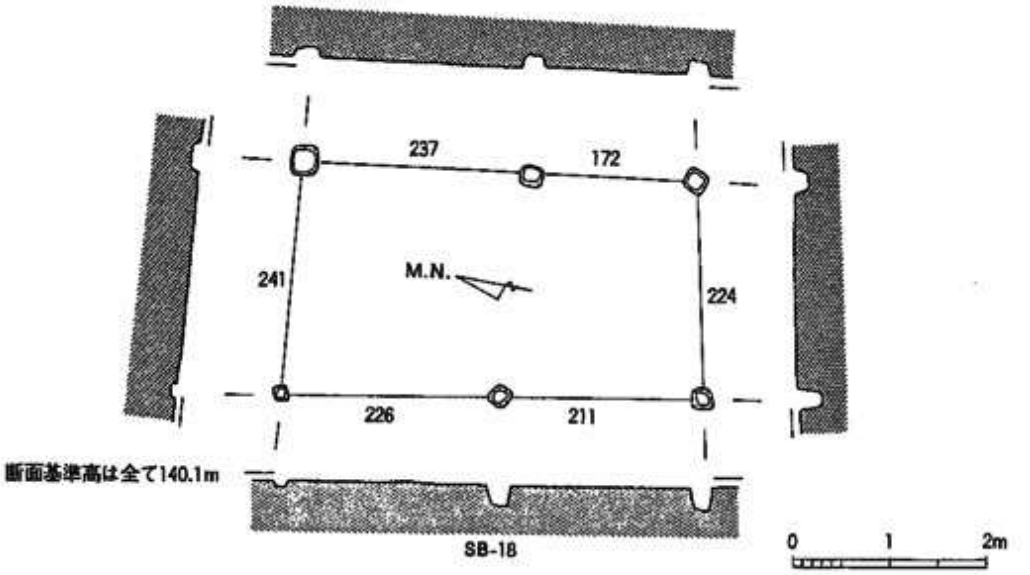
第17図　SB-11・12・13実測図（1／80）

つ。ＳＢ25・26ともに桁行長平均が8.54mとなり、４間ではあるが実際の寸法ではＳＢ24を凌ぐ。柱穴平面形はＳＢ25が円形、ＳＢ26が方形である。両者の柱穴は切り合うものがなく前後関係は不明である。ＳＢ27は１×３間で南北棟である。柱穴がＳＢ25と切り合う部分があり、埋土の観察よりＳＢ27が後出することが確認された。ＳＢ28は１×３間で東西棟である。柱穴平面形は方形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ29は館跡の最も北寄り、段丘縁に検出された。２×３間で南北棟である。柱穴平面形は方形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ30は１×３間で東西棟である。柱穴平面形は方形で、南桁側では６基のピットが列ぶが、北桁より判断し桁行３間とした。

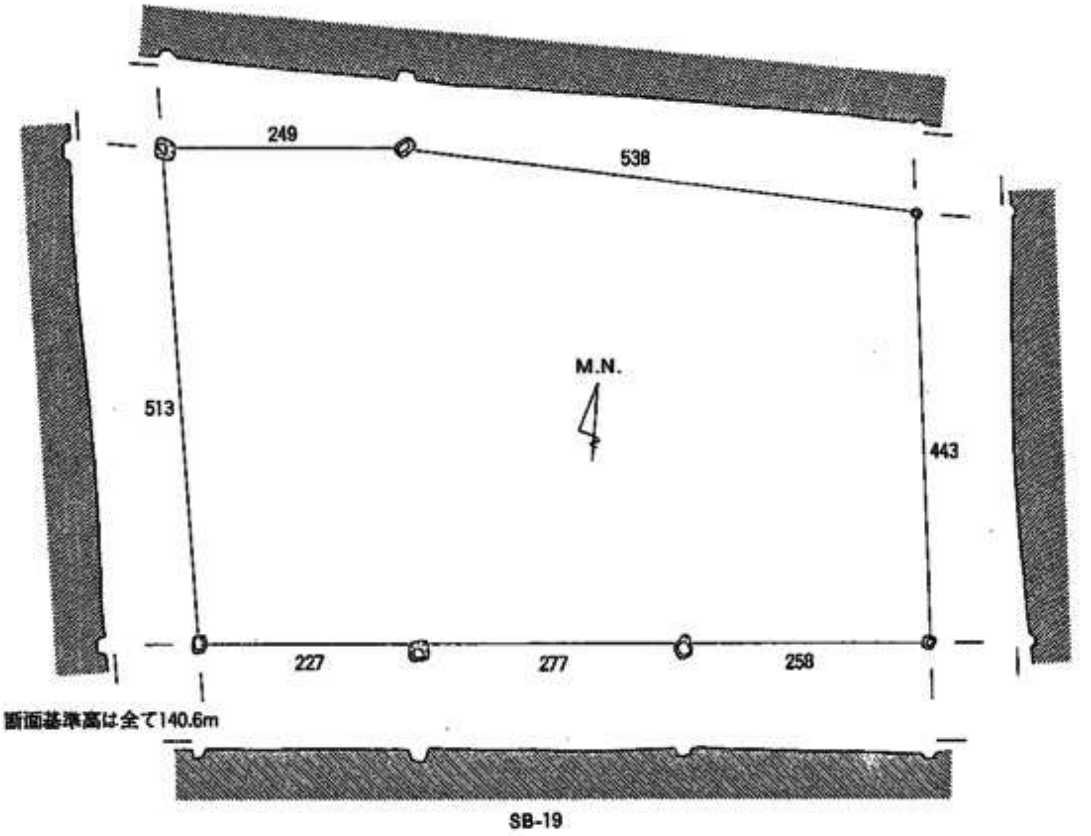


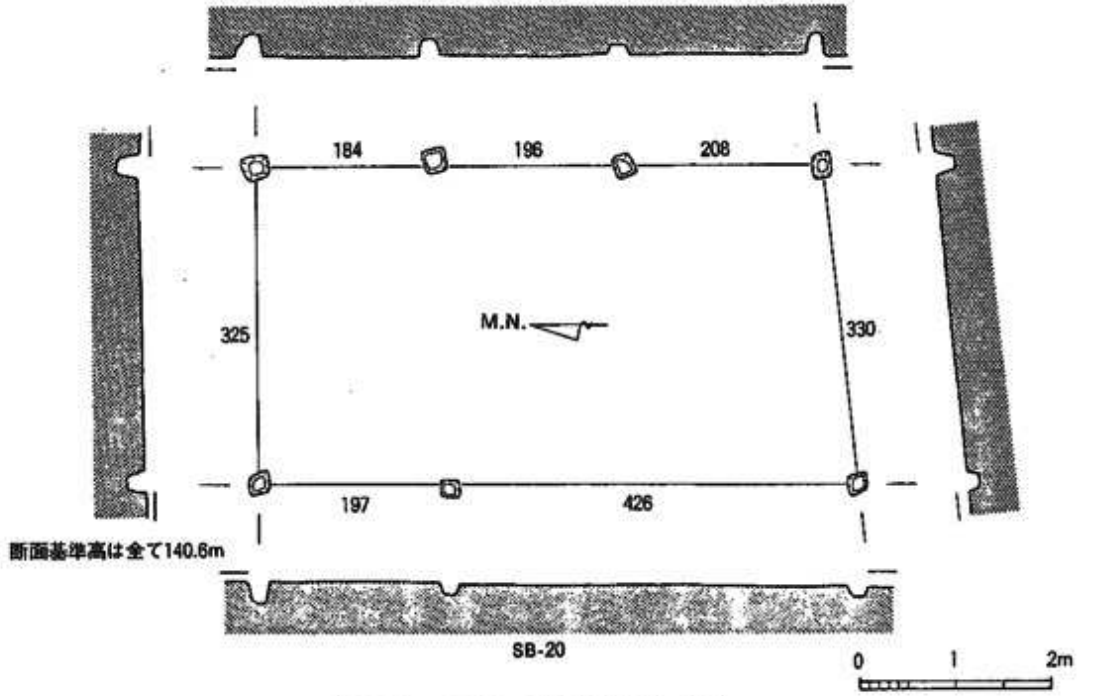
第18図　SB-14・15・16実測図（1／80）



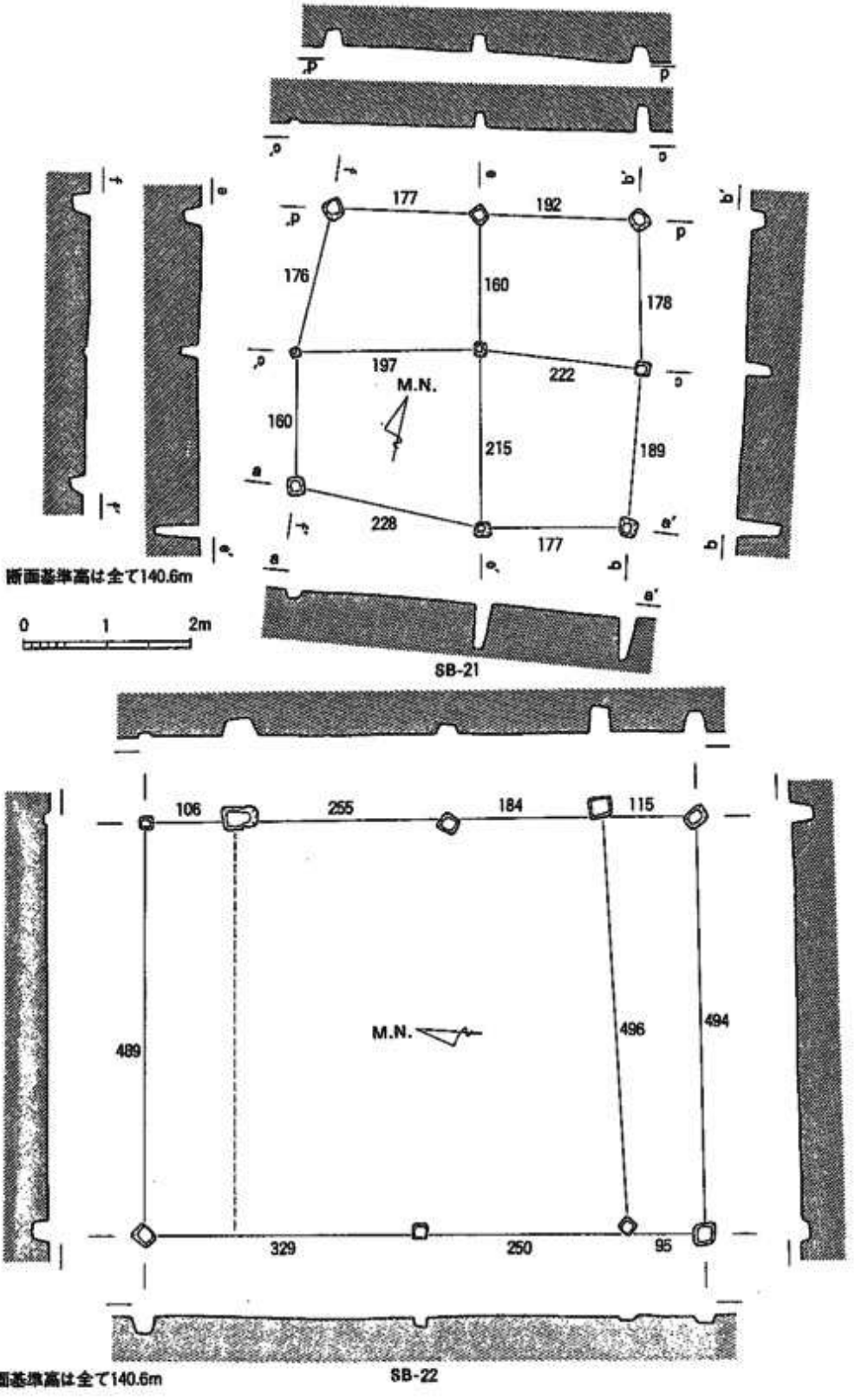


第19図　SB-17・18実測図（1／80）

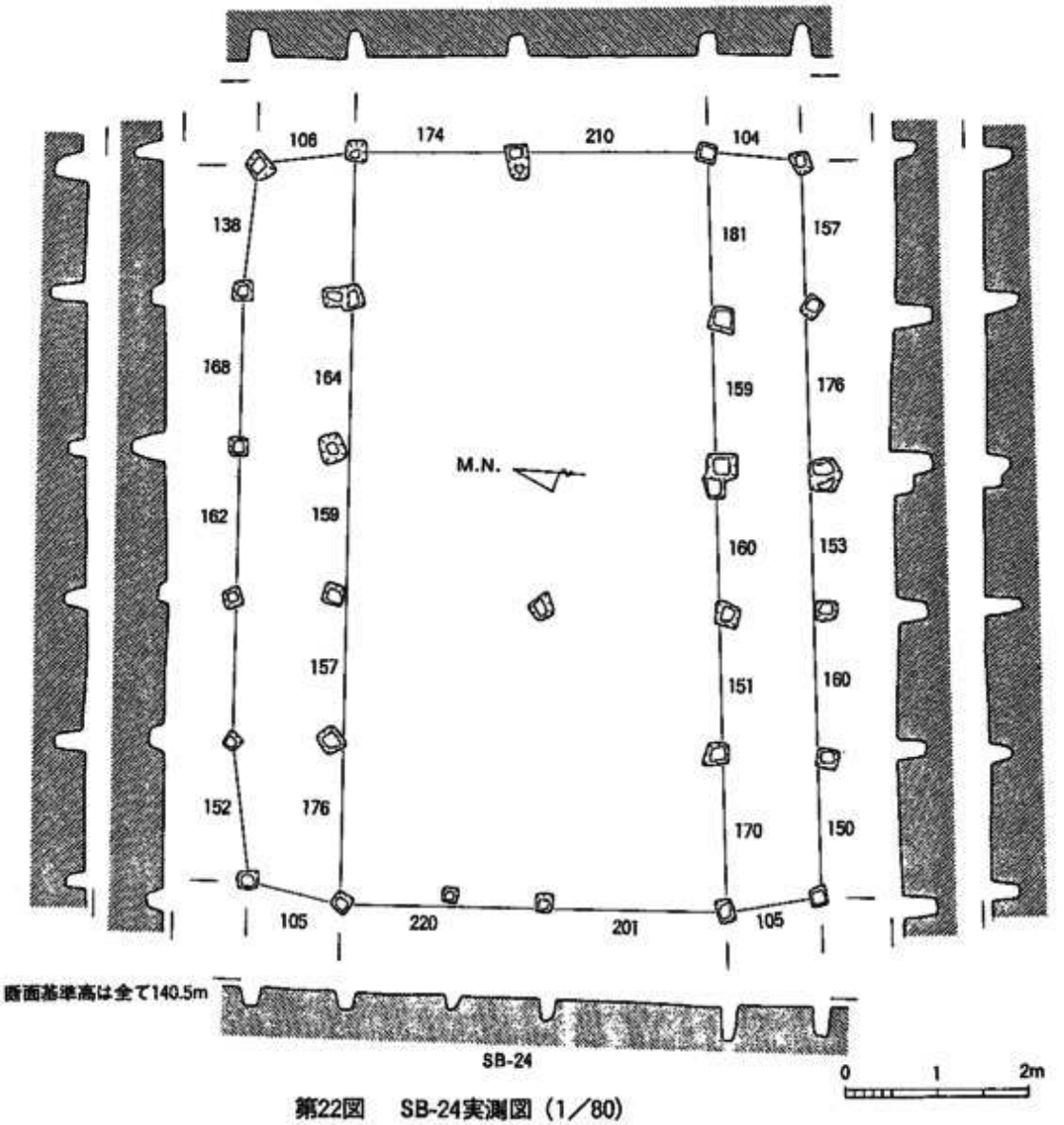




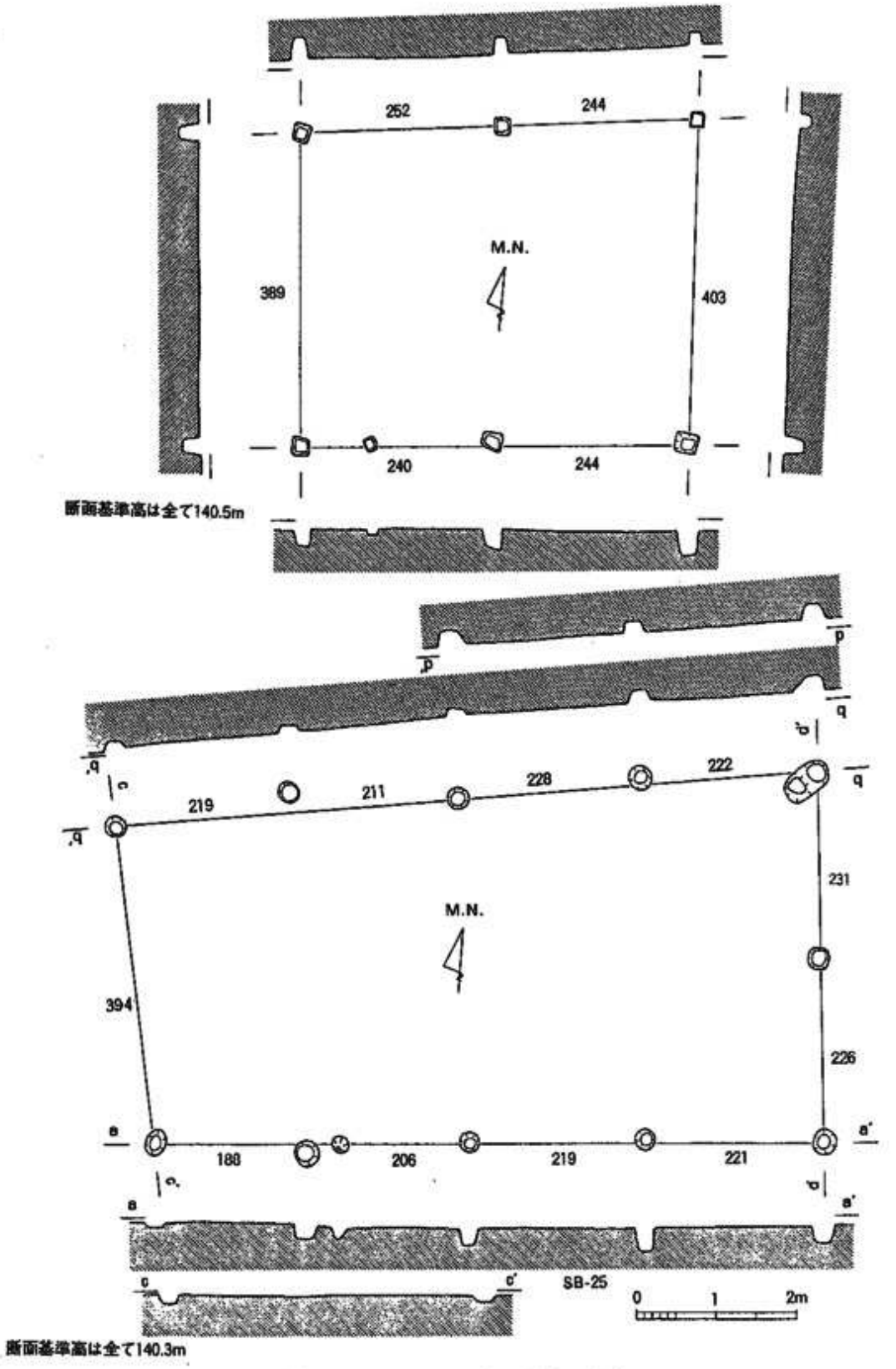
第20図　SB-19・20実測図（1／80）



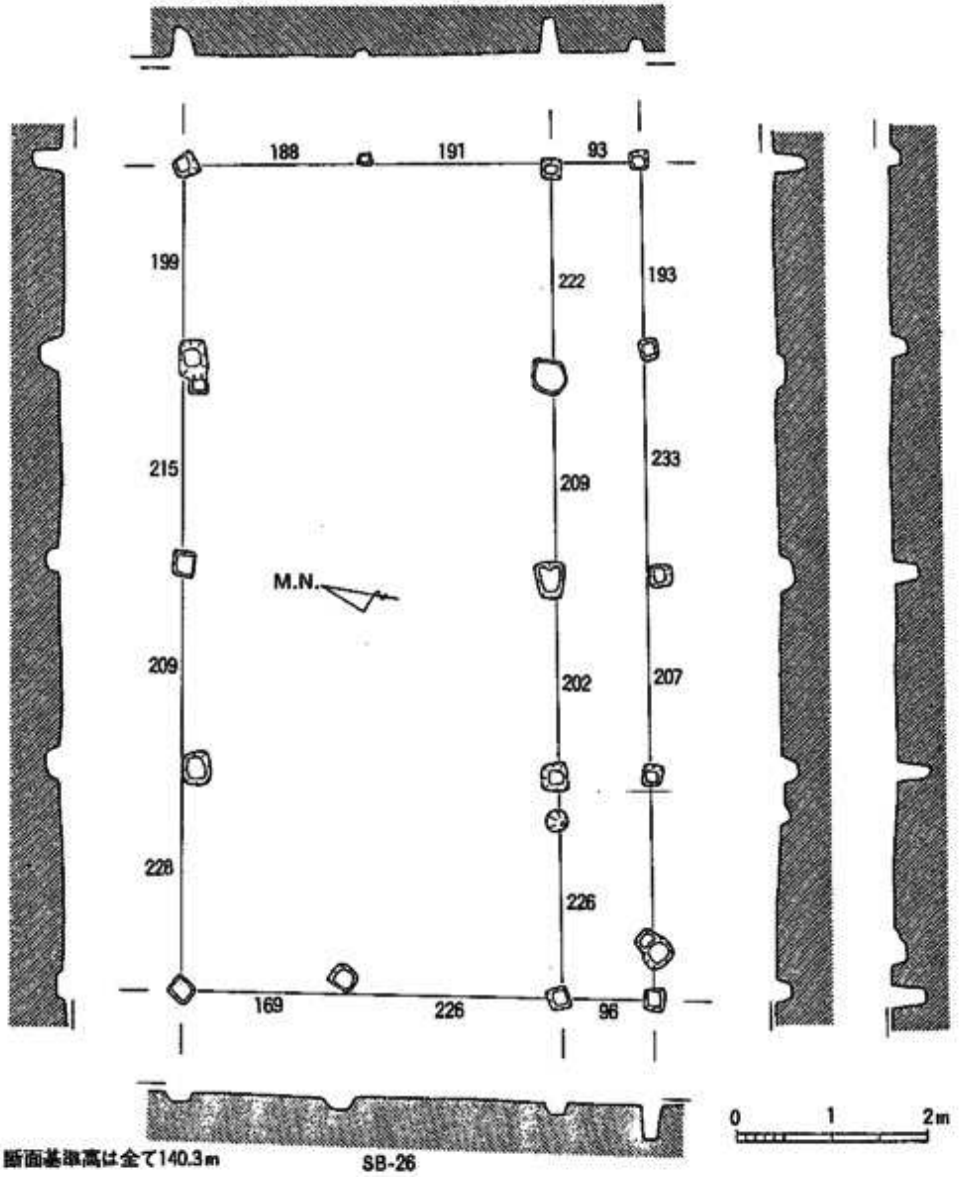
第21図　SB-21・22実測図



第22図　SB-24実測図（1／80）



第23図　SB-23・25実測図（1／80）



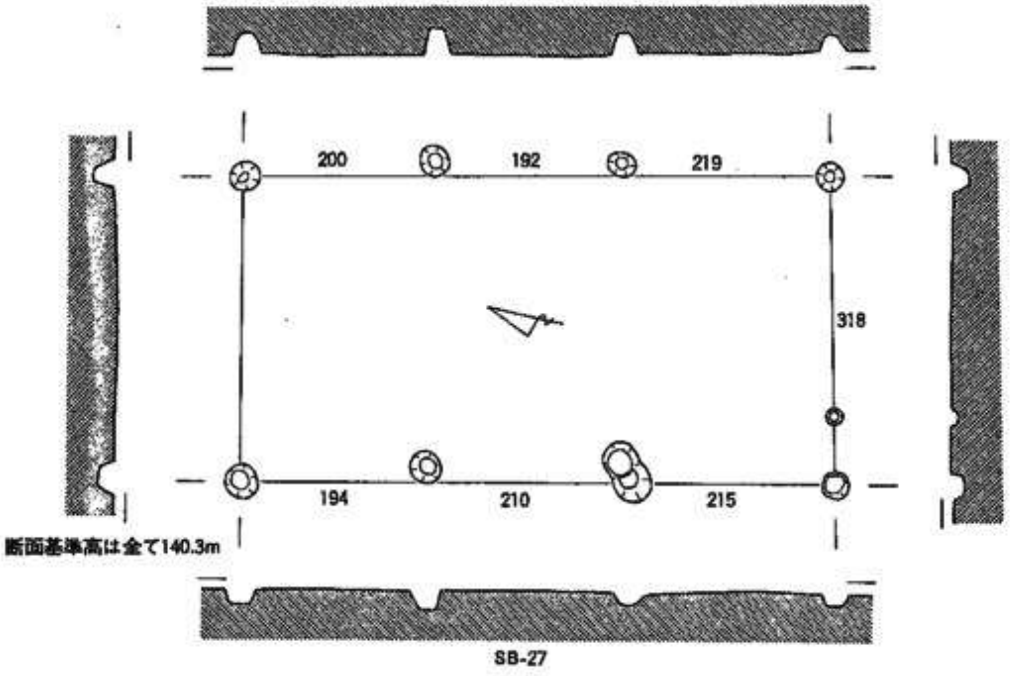
第24図　SB-26 実測図（1／80）

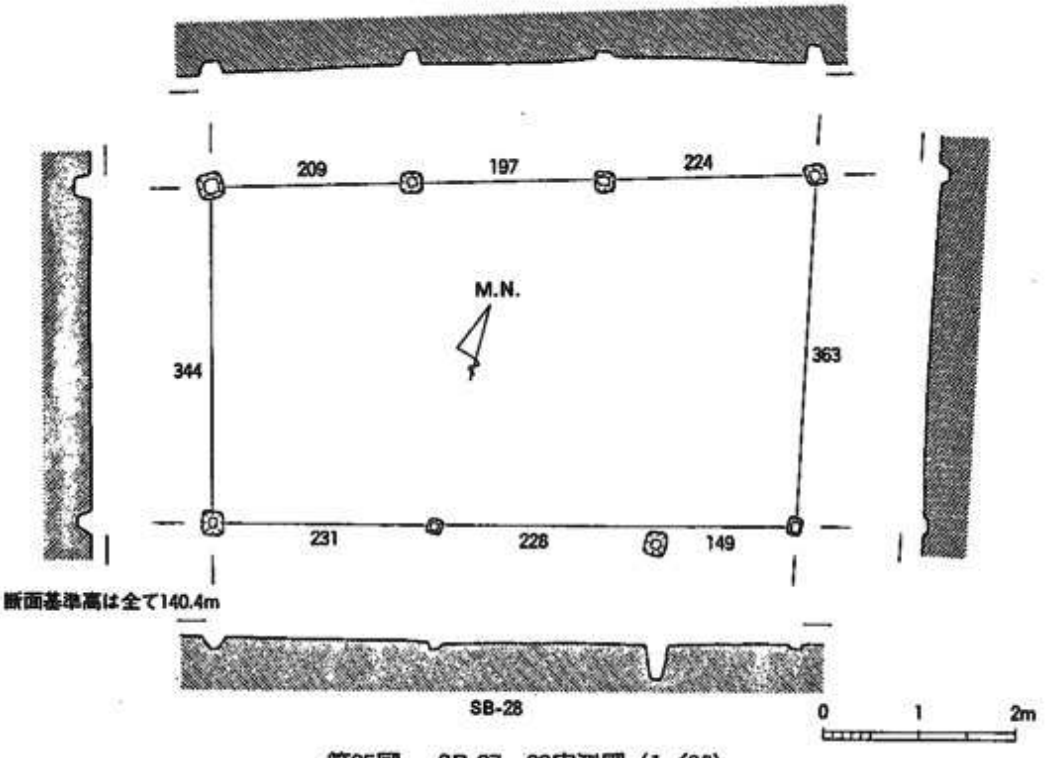
第３節　その他の遺構と遺物

上大五郎遺跡では前節までに記述した以外に、掘立柱建物（ＳＢ１～４、６、７、31～34）、溝状遺構、土坑、ピット群を検出している。

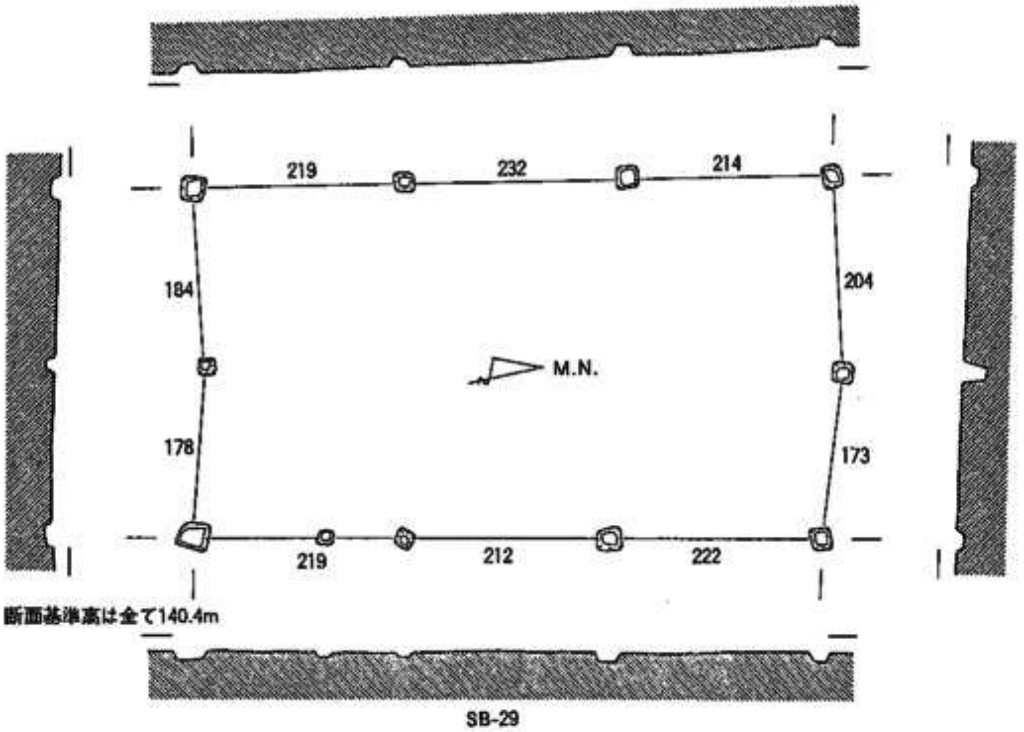
掘立柱建物（第27～29図）

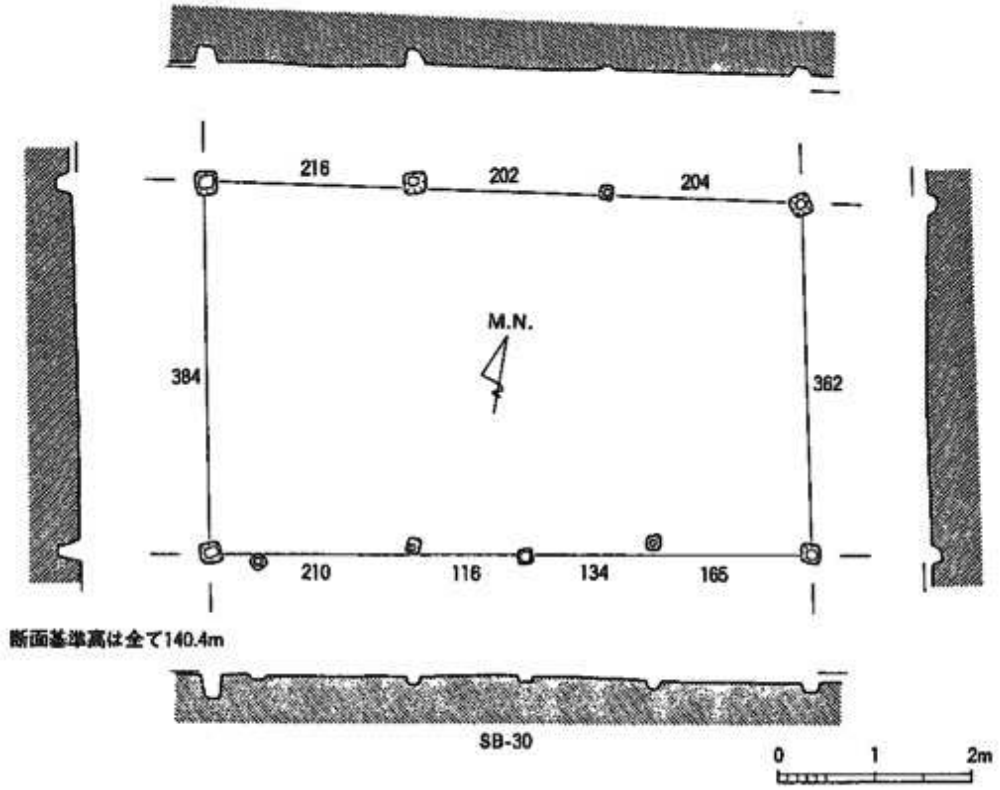
ＳＢ１、２は調査区の西寄り、ＳＡ３の西側で検出した。ともに１×１間で、ＳＢ２は東西棟、ＳＢ１は45°西に振れている。周囲にピットが見られないことから掘立柱建物と認定した。ＳＢ１、２はいずれも柱穴平面形は円形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ３は１×４間で東西棟である。桁行の柱間が平均117cmと短い。東梁側では南東角の柱穴から100cmの所





第25図　SB-27・28実測図（1／80）





第26図　SB-29・30実測図（1／80）

に柱穴を持つ。柱穴平面形は円形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ４は１×１間で棟方位は南北から54°西に振れている。柱穴平面形は円形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。周囲にピットが見られないことから掘立柱建物と認定した。ＳＢ６、７はＳＥ１、２に区画される館跡内に検出したが、棟方向が約47°西に振れており、柱穴状態の観察からも館跡に伴うものとは明らかに異なると判断した。ともに１×１間で、ピット径が10cm程度と小さく、深さも５cm程度である。柱穴平面形は円形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ31はＳＥ１南東コーナーの外側約５ｍの位置で検出された。棟方向は館跡に揃わない。１×２間で略南北棟である。柱穴は比較的大きいが柱痕は確認できず、根固め等も見られなかった。ＳＢ32は１×２間で東西棟である。柱穴平面形は円形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。ＳＢ33は調査区東寄りに検出され東西棟である。調査区内では１×２間となる柱穴配置が確認されたが、区外に延びる可能性もある。ＳＢ34は１×１間で略東西棟である。周囲にピットが見られないことから掘立柱建物と認定した。ＳＢ31～34はいずれも柱穴平面形は円形で、埋土は御池ボラ混入黒色土である。

溝状遺構（ＳＥ３、４）

ＳＥ３は調査区ほぼ中央を、ＳＥ１の西面に平行するように南から北へ延び、途中東寄りに向きを変えＳＥ１に合流するように段丘縁まで続いている。しかし、断面観察によりＳＥ１が完全に埋まった後にＳＥ３が掘られたことが確認されている。幅約70cm、深さ50cmを計る。ＳＥ３の埋土は流水により堆積した状況を示し、灰白色シルト、霧島新燃岳パミス、御池ボラ、黒褐色土等が薄い縞状に幾重にも重なっていた。また、各層に酸化鉄の凝集が見られた。遺物は出土していないが、霧島新燃岳パミスの２次堆積が溝底付近に見られることから、ＳＥ３の掘削年代の上限は1717年以降に求められる。

ＳＥ１、３を追うように調査区を南に拡張した際、ＳＥ３を切る形で約15ｍの長さでＳＥ４を検出した。幅約１ｍ、深さ25cmを計る。埋土は暗褐色土で酸化鉄の凝集等は見られなかった。遺物は出土していない。ＳＥ３が完全に埋まった後に掘削されており、近世以降の年代が与えられる。

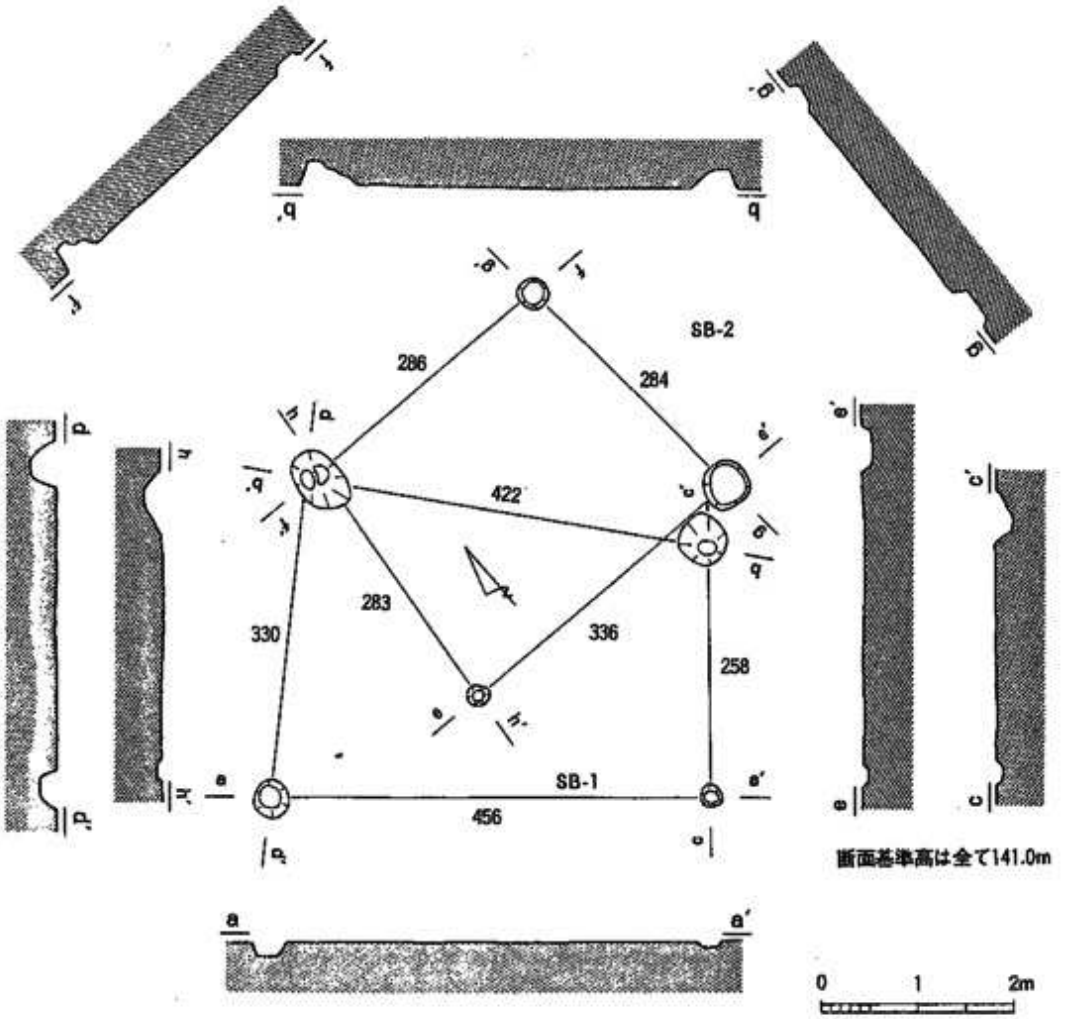
土坑

調査区ほぼ中央でＳＥ１、３を切る形で３基の土坑が検出された。径約１ｍの円形で検出面からの深さは約１ｍである。遺物等の出土は見られなかった。ＳＥ１、３が埋まった後に掘削されており近世以降の所産である。

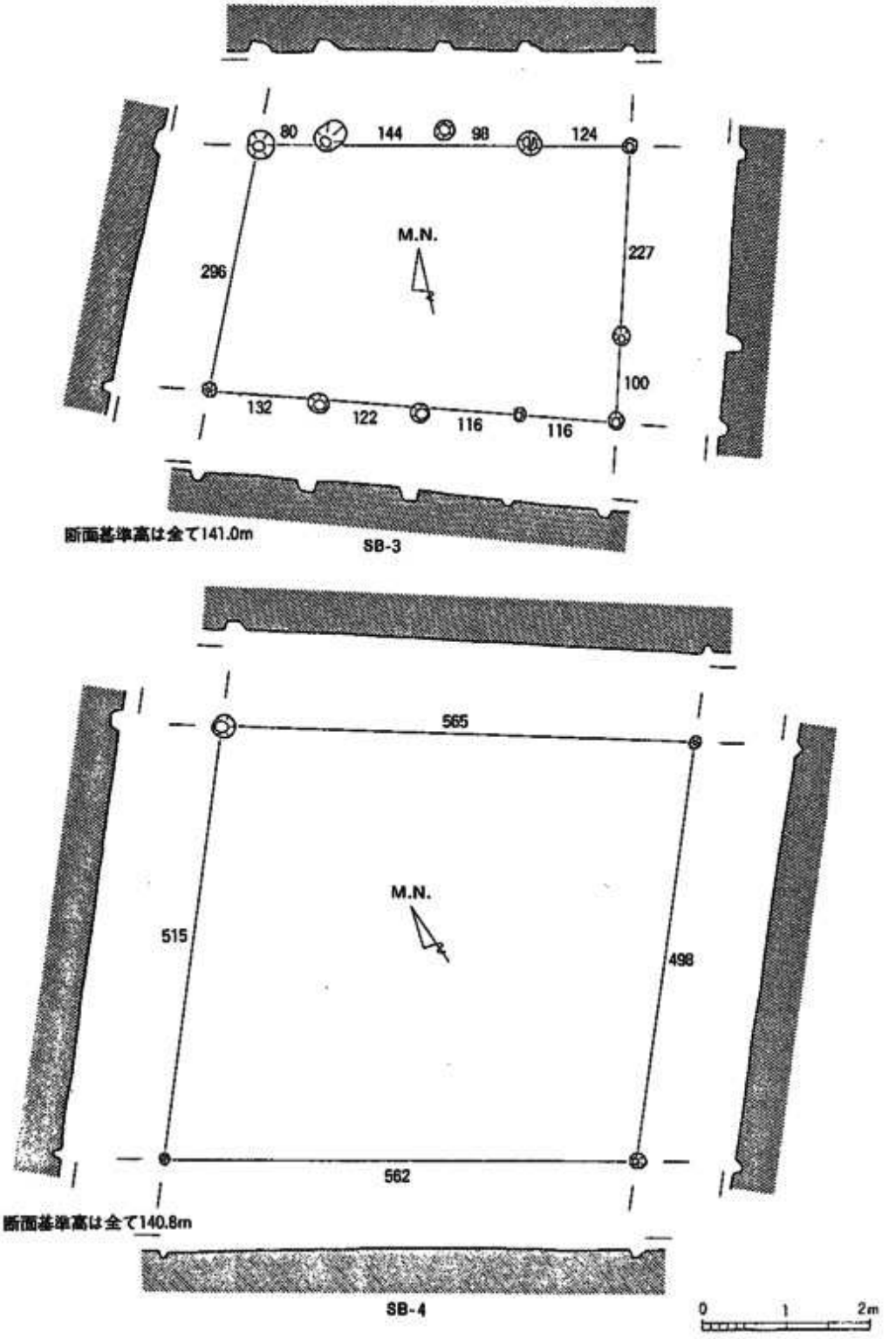
調査区北東部、ＳＢ33の北約５ｍの位置で「洪武通寶」５枚がまとまって出土した。プランが明瞭に把握できなかったが周囲が長方形状に若干窪んでおり、約0.5×１ｍの土壙墓が存在したものと思われる。

ピット群

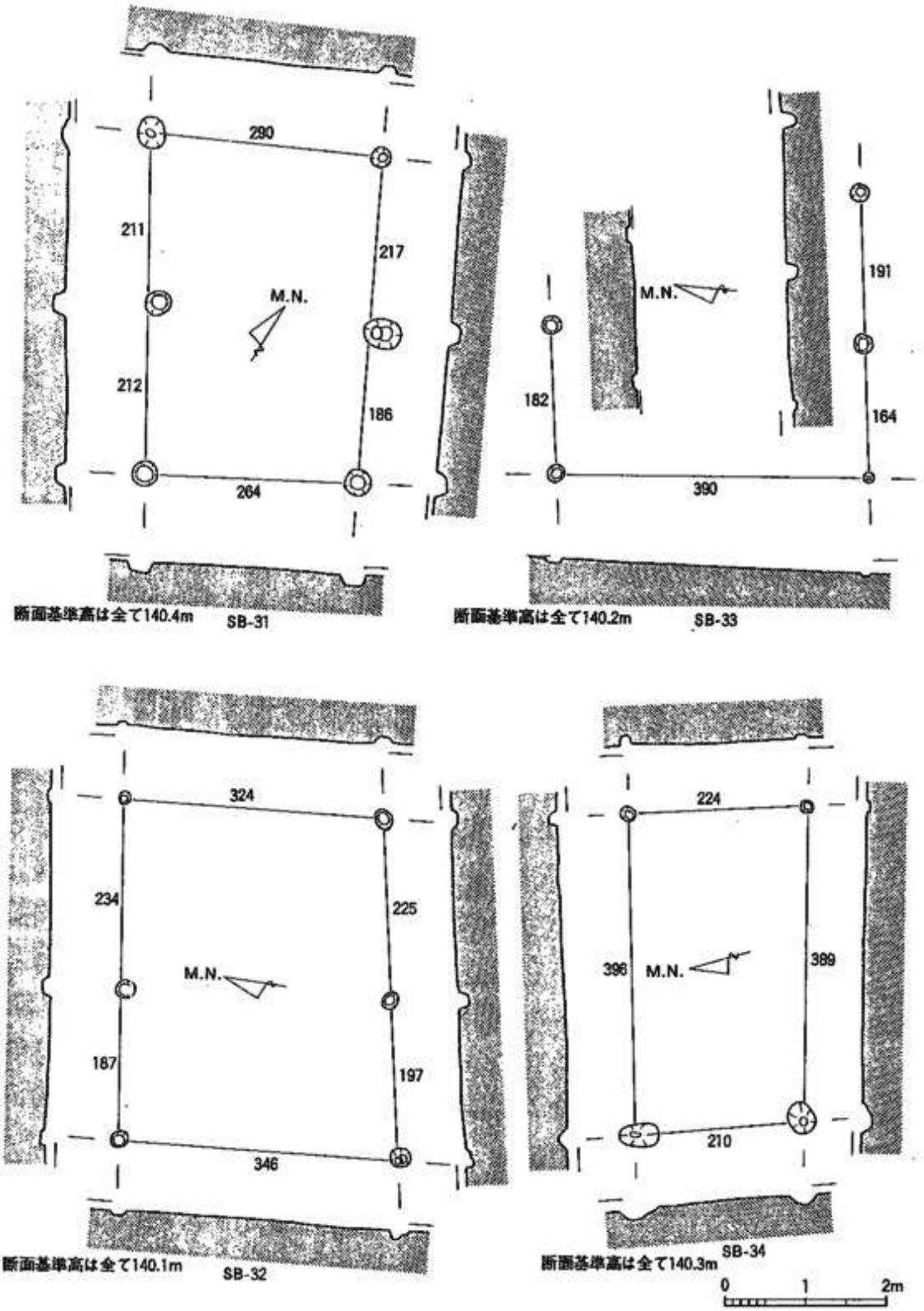
掘立柱建物として認定できたもの以外にも多くのピット群を検出した。多くは径20～30cm程度で検出面からの深さは20cm前後である。掘立柱建物には認定できなかったものの、一直線上に列ぶものがあり柵列等の存在した可能性もある。また、遺構検出面が低いために消滅したピッ



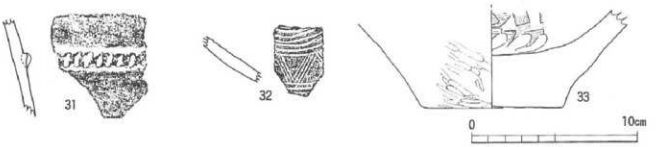
第27図　SB-1・2実測図（1／80）



第28図　SB-3・4実測図（1／80）



第29図　SB-31・32・33・34実測図（1／80）



第30図　ピット出土遺物実測図（1／30）

トも少なからず存在したと思われる。さらに多くの掘立柱建物が存在した可能性も否定できない。

ＳＡ２の南約１ｍの位置に検出されたピットからは弥生土器３点が出土している（第30図）。31は甕形土器で、やや内傾する胴上部に１状の刻目突帯が付く。器面は粗いナデ調整である。32は壺形土器で、内傾する胴上部に浅沈線による複数の平行線文と山形文が見られる。33は壺形土器の底部で、分厚い平底である。外器面の丁寧なミガキ調整は底まで施されている。内器面には指押さえとハケ目が見られる。弥生時代後期初頭に位置付けられる。ピットからの出土状態が明確でなく、本来ＳＡ２に存在したものが流れ込んだ可能性も否定できない。

第1表　上大五郎遺跡掘立柱建物一覧表

(単位：cm)

遺構番号	規模(間)	方向	桁行 実長	桁行 柱間	梁行 実長	梁行 柱間	方位	床面積(㎡)	柱穴状態 柱数	柱穴状態 Pit.径	柱穴状態 Pit.深	柱穴状態 平面形	柱穴状態 埋土	備考
SB1	1×1	NW～SE	439	439	294	294	N45° W	12.7	4	38～47	15～21	○	b	
SB2	1×1	E～W	311	311	284	284	N90° E	8.7	4	36～45	20～25	○	b	
SB3	1×4	E～W	465	117	312	312	N74° W	14.9	11	22～25	10～12	○	b	
SB4	1×1	NW～SE	564	564	507	507	N54° W	28.3	4	17～20	7～8	○	b	
SB5	1×3	E～W	678	226	370	370	N84° E	24.9	18	31～35	14～17	○	a	三面庇, 42.2㎡
SB6	1×1	NW～SE	305	305	272	272	N47° W	8.3	4	12～13	5～6	○	b	
SB7	1×1	NW～SE	299	299	304	304	N47° W	9.1	4	8～9	3～4	○	b	
SB8	1×3	E～W	660	220	369	369	N86° E	24.2	12	17～19	9～10	□	a	二面庇, 28.5㎡
SB9	1×2	S～N	469	235	405	405	N 8° W	19.4	6	27～32	16～19	○	a	
SB10	2×3	E～W	631	211	368	184	N84° E	23.5	10	16～20	9～11	○	a	
SB11	1×2	S～N	402	201	333	333	N11° W	13.4	6	17～18	9～10	□	a	
SB12	2×2	E～W	421	211	331	166	N76° E	14.0	7	19～22	8～10	○	b	
SB13	1×2	S～N	413	206	341	341	N 9° W	14.3	6	27～31	13～16	○	a	
SB14	1×1	S～N	358	358	210	210	N18° W	7.4	4	17～20	12～14	□	a	
SB15	1×1	S～N	374	374	307	307	N16° W	11.4	5	17～18	10～13	□	b	
SB16	1×2	E～W	404	202	385	385	N71° E	15.6	6	20～25	11～14	○	a	
SB17	1×3	E～W	678	226	434	434	N83° E	29.7	8	18～19	9～12	□	a	
SB18	1×2	S～N	423	212	233	233	N 9° W	9.8	6	22～23	14～16	□	a	
SB19	1×3	E～W	773	258	478	478	N89° E	38.1	7	16～18	8～11	□	b	
SB20	1×3	S～N	604	202	328	328	N 0° E	20.0	7	22～24	13～14	□	a	
SB21	2×2	E～W	397	199	358	179	N82° E	14.5	9	19～21	10～12	□	a	総柱
SB22	1×2	S～N	457	228	492	492	N 4° W	22.5	9	20～23	13～16	□	a	二面庇, 32.8㎡
SB23	1×2	E～W	490	245	396	396	N84° E	19.1	6	21～23	14～16	□	a	
SB24	2×5	E～W	816	164	412	206	N86° E	33.7	27	23～25	12～15	□	c	二面庇, 51.2㎡
SB25	2×4	E～W	854	214	426	213	N83° E	37.1	11	26～29	16～18	○	a	
SB26	2×4	E～W	854	214	386	194	N80° E	32.0	17	25～29	16～19	□	a	一面庇, 40.8㎡
SB27	1×3	S～N	614	205	316	316	N12° W	19.6	8	30～34	15～17	○	a	
SB28	1×3	E～W	617	206	354	354	N74° E	22.3	8	22～23	10～11	□	b	
SB29	2×3	S～N	658	220	367	184	N11° E	24.5	11	22～23	12～14	□	b	
SB30	1×3	E～W	622	208	373	373	N81° E	22.9	9	18～20	9～10	□	a	
SB31	1×2	S～N	413	207	277	277	N30° W	11.3	6	31～35	14～17	○	b	
SB32	1×2	E～W	422	211	335	335	N80° E	13.9	6	20～23	11～13	○	b	
SB33	1×(2)	E～W	(355)	179	390	390	N82° E	－	5	20～21	11～12	○	b	
SB34	1×1	E～W	393	393	217	217	N75° W	8.5	4	23～32	8～12	○	b	

方位はEWSNで示す。方位は磁北。桁行、梁行、Pit径、Pit深は平均値。備考欄の面積は庇部を含む。柱穴埋土はaが黒色土、bが御池ボラ混入黒色土、cが灰白色細砂混入黒褐色土である。

第２表　上大五郎遺跡出土土器観察表

（単位：cm）

No.	遺構・区	器種	調整及び文様	胎土（混入物）	色調	備考
1	SA 1	甕	外ハケ目・ナデ 縁指押さえ 内ナデ・ハケ目	茶色、黒くて光る、無色透明で光る砂粒を含む	外灰・淡黄 内淡黄	
2	SA 1	壺	外ミガキ・ナデ・工具の端部痕 底ナデ 内ハケ目・ナデ・粘土の継ぎ目	茶・褐・白色、無色透明で光る砂粒を含む	外淡黄・橙 内橙・淡黄	内炭化物付着
3	SA 1	壺	外ナデ・ミガキ 内ナデ	茶・褐色、無色透明で光る砂粒を含む	外内黒・淡黄・暗赤灰	
4	SA 1	壺	外底ナデ 内粘土の継ぎ目・ナデ	茶・褐色、無色透明で光る砂粒を含む	外浅黄橙 内淡黄	
9	SA 2	甕	外底 内ナデ	褐・黒・灰色の砂粒を含む	外浅黄橙 内黒褐	
10	SA 2	壺	外ハケ目・ミガキ・ナデ 内ナデ・指押さえ・ハケ目	褐・灰・黒色の砂粒を含む	外にぶい褐・にぶい橙 内にぶい橙	外黒斑
11	SA 3	甕	外ナデ・ハケ目 内ナデ・指押さえ・ハケ目	褐・灰色・柱状で黒く光る砂粒を含む	外にぶい黄橙・にぶい黄褐 内黒褐・灰白	スス付着・炭化物付着
12	SA 3	壺	外内ナデ・縁凹線	褐・乳白色、金色に光る砂粒を含む	外にぶい黄橙 内黒褐	
13	SA 3	甕	外ナデ 縁凹線 内ナデ・ミガキ	赤褐・褐・黒・乳白色の砂粒を含む	外浅黄橙 内にぶい橙	
14	SA 3	甕	外ナデ・（貼付突帯）刻目 内ナデ	茶褐色、無色透明で光る、黒くて光る砂粒を含む	外にぶい橙 内灰褐	未貫通穿孔・スス付着 外黒斑
15	SA 3	甕	外ハケ目 内ナデ	白灰色・黒くて光る砂粒を含む	外褐灰 内黒褐	スス付着・炭化物付着
16	SA 3	壺	外内ナデ 縁凹線	黒・灰・褐色・無色透明で光る砂粒を含む	外浅黄橙・にぶい黄橙 内灰黄褐・にぶい黄橙	
17	SA 3	壺	外ナデ・ミガキ・（貼付突帯）刻目 内ナデ	白灰色・無色透明で光る砂粒を含む	外黒褐・明赤褐 内黒褐	
22	SE 1	碗	底ナデ・指押さえ 外内ナデ	褐・灰・黒色・柱状で黒く光る砂粒を含む	外内橙	土師器
23	SE 1	こね鉢	外内ナデ 縁一部自然釉	白・黒・淡黄色の砂粒を含む	外内黄灰	須恵器
24	SE 1	こね鉢	外内ナデ	灰・乳白色の砂粒を含む	外内灰	須恵器
25	SE 1	碗	外内釉		釉明緑灰 底灰白	青磁
26	SE 1	碗	外内釉・貫入		釉灰オリーブ 底灰白	青磁
27	SE 1	碗	（見込み）蛇の目釉はぎ（高台内）露胎 外釉・露胎		釉明緑灰 底灰白	白磁
28	SE 1	皿	外内釉・一部貫入（高台内）露胎		釉 底白色	内ハマ痕・白磁
29	SE 1	皿	外内釉・露胎		釉明オリーブ灰 底灰白	白磁
30	SE 1	碗	外釉・露胎・一部貫入 内露胎		釉灰白・にぶい黄 底黄灰・にぶい橙	陶器
31	P290	甕	外荒いナデ・（貼付突帯）刻目 内ナデ	褐・灰・黒褐色・黒くて光る砂粒を含む	外にぶい褐 内にぶい黄褐	炭化物付着
32	P290	壺	外浅沈線 内ナデ	褐・黒褐・灰色、黒くて光る砂粒を含む	外浅黄橙 内浅黄橙・明褐灰	
33	P290	壺	外底ミガキ・ナデ 内ハケ目・ナデ	灰白・白色・金色に光る砂粒を含む	外にぶい赤褐・黒 内にぶい赤褐・灰褐	炭化物付着

第３表　上大五郎遺跡出土石器計測表

No.	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材
5	砥石	(7.3)	4.8	0.4	(24.1)	砂岩
6	砥石	(11.9)	3.7	0.8	(65.2)	砂岩
7	砥石	(9.1)	5.05	1.35	(130)	砂岩
8	砥石	17.1	3.4	4.05	400	砂岩
18	石皿	(13.8)	(15.6)	6.6	(2130)	砂岩
19	磨製石鏃	2.45	1.85	0.2	1.1	緑色凝灰岩
20	磨製石鏃	2.8	2.0	0.2	1.5	緑色凝灰岩
21	磨製石鏃	(2.1)	2.2	0.2	1.4	頁岩

第Ⅴ章　自然科学分析(火山灰分析)

丸谷地区遺跡群上大五郎遺跡の火山灰分析

㈱古環境研究所

1．はじめに

丸谷地区遺跡群上大五郎遺跡の発掘調査では、溝をはじめとする遺構が多く検出された。そこでおもに溝や柱穴などの遺構の覆土を対象として、地質調査により土層の記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラの層位を求め、遺構の構築年代に関する資料を収集することになった。記載分析の対象とした地点は、第1地点、第2地点、風倒木根部、西壁、柱穴（パターンⅠ,Ⅱ,Ⅲ）である。

2．土層層序

(1) 第1地点

第1地点では、発掘調査の結果、中世と近世に各々構築されたと推定されている2本の溝の覆土の断面を観察することができた。前者の覆土は、下位より黄色軽石に富む黒灰色土（層厚24cm,軽石の最大径21mm）、黄色軽石に富む黒色土（層厚18cm,軽石の最大径24mm）、比較的細粒の白色軽石層（層厚4cm,軽石の最大径5mm）、下位の軽石層に由来する白色軽石に富む黒色土（層厚26cm,軽石の最大径3mm）、黄色軽石混じり黒色土（層厚30cm,軽石の最大径14mm）、黄色軽石混じり黒色土（層厚6cm,軽石の最大径3mm）、黄色軽石混じり黒灰色土（層厚8cm,軽石の最大径9mm）から構成されている（第31図）。

また後者の溝の覆土は、下位より暗灰色砂層（層厚5cm）、黄色軽石混じり黒色土（層厚7cm,軽石の最大径5mm）、灰白色砂層（層厚3cm）、黒色土（層厚3cm）、暗褐色砂層（層厚6cm）、黒色土（層厚4cm）、暗灰色砂質土（層厚7cm）、白色砂層（層厚0.4cm）、暗灰色土（層厚2cm）、黒灰色砂質土（層厚4cm）から構成されている（第32図）。

(2) 第2地点

ここでは成層した降下テフラ層が認められた。このテフラ層は、下部の比較的細粒の黄白色軽石層（層厚5cm,軽石の最大径5mm）と、上部の灰白色細粒火山灰層（層厚1cm）から構成されている。

(3) 風倒木根部

本地点で検出された風倒木痕の根に相当する部分には、褐色の軽石粒子が多く認められた。

(4) 西　壁

本地点では、上大五郎遺跡の標準的な土層の断面が認められた。ここでは、下位より黄色軽石に富む黒色土（層厚22cm,軽石の最大径29mm）、黄色軽石混じり黒色土（層厚23cm,軽石の最

大径3㎜）、黒色土（層厚15㎝）、白色軽石混じり黒灰色土（層厚6㎝，最大径3㎜）、褐色土（層厚2㎝）、暗灰色土（層厚12㎝）の連続を観察することができた。

(5) 柱穴（パターンⅠ）

上大五郎遺跡で検出された平地式建物の柱穴は、覆土の状況から3パターンに区分される。パターンⅠは、柱穴が細粒の黄色軽石を混じえる黒色土で充填されているものである。第33図に示した柱穴は、最大径9㎜の軽石を混じえる層厚18㎝の黒色土で覆われている。

(6) 柱穴（パターンⅡ）

パターンⅡは、柱穴が黒色土で充填されているもので、軽石粒子はほとんど認められない。第34図に示した柱穴では、層厚14㎝の黒色土がみとめられる。軽石は非常に少なく、最大径2㎜の黄色軽石がごく少量認められるのみである。

(7) 柱穴（パターンⅢ）

パターンⅢは、柱穴覆土（黒色土）中に紫色の火山灰様を呈する細砂層が認められるものである。

3．テフラ検出分析結果

(1) 分析方法

テフラ層と示標テフラ層の同定と、遺構覆土および自然堆積の土層中のテフラ粒子の有無を確かめるために、テフラ検出分析を行うことにした。分析の対象とした試料は、9地点で採取した19点である。分析は次の手順で行われた。

1）試料10gを秤量。

2）超音波洗浄装置により、泥分を除去。

3）80°Cで恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

① 第1地点

テフラ検出分析の結果を表4に示す。ここでは、中世に構築されたと推定される覆土中の軽石層（試料番号8）に白色軽石がとくに多く認められた。軽石の最大径は10.8㎜で、スポンジ状によく発泡している。ところどころに繊維束状に発泡した部分も認められる。軽石は斑晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石層は、その層相と軽石の岩相などから1471（文明3）年に桜島火山から噴出した桜島－文明軽石（桜島3テフラ，Sz-3，町田・新井，1992）に同定されると考えられる。

近世の溝を埋めた堆積物の最下部付近に層位のある試料番号5および試料番号4には、発泡

のあまりよくない灰褐色の軽石が少量ずつ含まれている。軽石の最大径は5㎜である。この軽石は、その岩相から1717（享保2）年に霧島火山から噴出した霧島－新燃岳軽石（霧島新燃享保テフラ, Kr-Smk, 町田・新井, 1992）に由来する可能性が大きい。

② 第2地点

ここで認められた成層したテフラのうち、下部の軽石層には白色軽石がとくに多く認められた。軽石の最大径は8.8㎜で、スポンジ状によく発泡している。ところどころに繊維束状に発泡した部分も認められる。軽石の斑晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石層も、その層相と軽石の岩相などからSz-3に同定されると考えられる。

③ 風倒木根部

この試料からは最大径9.7㎜の発泡のあまりよくない灰褐色軽石が認められた。この軽石は、その岩相からKr-Smkに由来する可能性が大きいと考えられる。

④ 西 壁

白色の軽石が野外で認められた試料番号1には、最大径4.3㎜の白色軽石が認められた。軽石はスポンジ状によく発泡しており、ところどころに繊維束状に発泡した部分が認められる。軽石の斑晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石相は、その層相と軽石の岩相などからSz-3に同定されると考えられる。

⑤ 柱穴（パターンⅠ）

ここでは、分析の対象とした試料番号2と4のいずれの試料にも、水流によって円磨された白色軽石が比較的多く認められる。軽石はスポンジ状に発泡しており、最大径は6.3㎜である。この軽石はその岩相から約3,000年前に霧島御池火口から噴出したとされている霧島－御池軽石（霧島御池テフラ, Kr-M, 町田・新井, 1984）に由来するものと考えられる。

⑥ 柱穴（パターンⅡ）

本地点において分析の対象とした試料番号1と3のいずれの試料にも、水流によって円磨された白色軽石がごく少量認められる。軽石はスポンジ状に発泡しており、最大径は5.7㎜である。この軽石もその岩相からKr-Mに由来するものと考えられる。

⑦ 柱穴（パターンⅢ）

北の柱穴試料番号1には灰色の軽石（最大径4.2㎜）がごく少量認められる。また火山ガラスが比較的多く含まれており、バブル型ガラスや軽石型の火山ガラスが認められる。色調は透明で、ごくわずかに褐色を呈するものも認められる。バブル型を呈する火山ガラスが比較的多く認められることは、この試料が霧島火山や桜島火山に起源をもつ一次堆積のテフラではないこ

とを示唆している。

一方西の柱穴試料番号1には円磨された白色の軽石（最大径3.1mm）が少量認められる。この試料にも火山ガラスが比較的多く含まれており、バブル型ガラスや軽石型の火山ガラスが認められる。色調は透明で、ごくわずかに褐色を呈するものも認められる。バブル型を呈する火山ガラスが比較的多く認められることは、北の柱穴試料番号1と同様に、この試料も霧島火山や桜島火山に起源をもつ一次堆積のテフラではないことを示唆している。

4．考察ー遺構の構築年代について

第1地点において検出された中世に構築された溝の覆土中には、1471（文明3）年に桜島火山から噴出したSz-3が認められた。このことは、この溝の構築年代が1471（文明3）年を遡ることを示している。また第1地点において検出された近世に構築された溝の覆土中には、一次堆積ではないものの、その岩相から1717（享保2）年に霧島火山から噴出したKr-SmKに由来する可能性が大きい軽石が検出された。したがって近世と推定されたその構築年代については、1717（享保2）年ころ、あるいはそれ以降の可能性が考えられる。

なお3パターンの覆土が認められた柱穴については、パターンⅠとⅡで、含まれるKr-Mの量や大きさに明かな違いが認められた。しかしテフラの可能性が考えられたパターンⅢの紫色の細砂層については、ほかのテフラとくに火砕流に由来する可能性の大きな火山ガラスが比較的多く認められ、一次堆積のテフラの可能性は小さいと考えられた。

5．まとめ

丸谷地区遺跡群上大五郎遺跡において地質調査とテフラ検出分析を行った結果、約3,000年前に霧島御池火口から噴出したと推定されている霧島ー御池軽石（霧島御池テフラ, Kr-M）、1471（文明3）年に桜島火山から噴出した桜島ー文明軽石（桜島3テフラ, Sz-3）、1717（享保2）年に霧島火山から噴出した霧島ー新燃岳軽石（霧島新燃享保テフラ、Kr-Sm）に由来するものと考えられる軽石、さらにこれらより噴出年代の古い大規模火砕流に由来すると考えられる火山ガラスなどが検出された。これらテフラとの層位関係から、発掘調査により中世に構築されたと推定された溝の構築年代は1471（文明3）年以前と推定された。また近世に構築されたと推定された溝の構築年代については、1717（享保2）年頃あるいはそれ以降の可能性が考えられた。

【文　献】

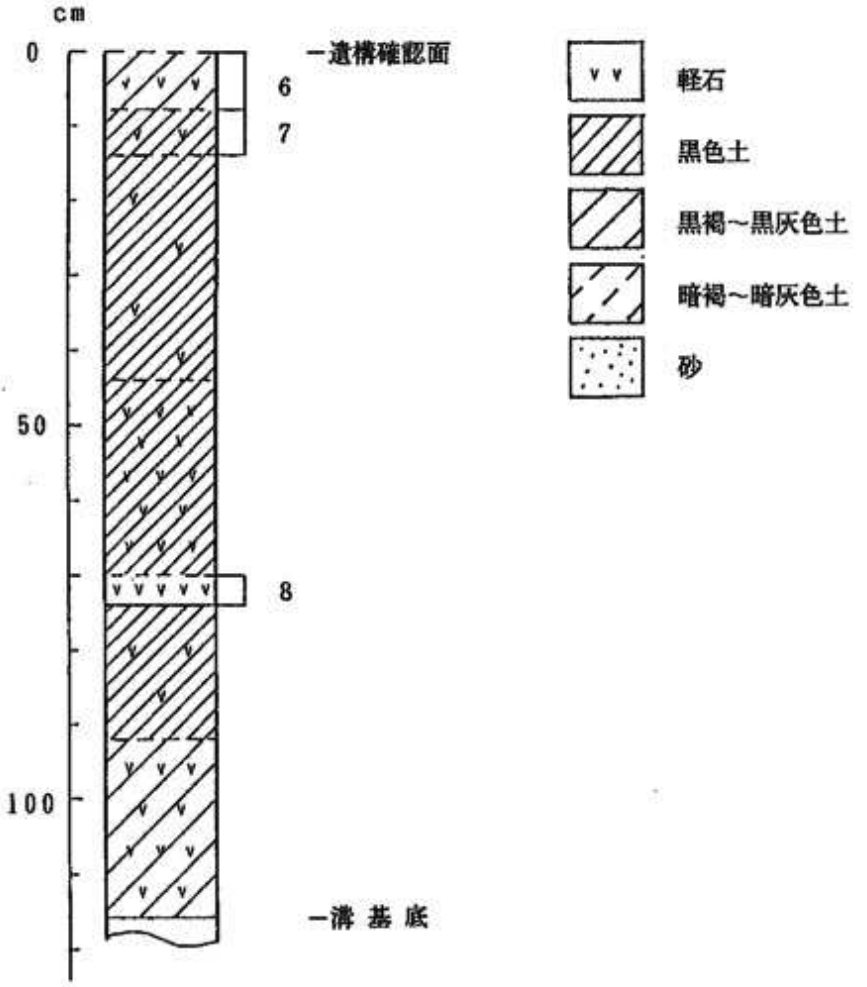
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学ー考古学研究と関係するテフラのカタログー. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.

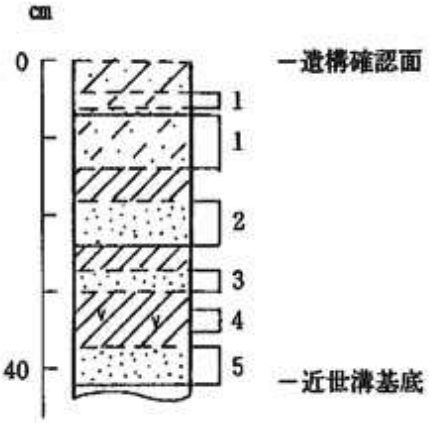
第4表　上大五郎遺跡のテフラ検出分析結果

地　点	試料	軽　石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形　態	色調
第1地点	1	+	白	1.0	+++	bw>pm	透明
	2	+	黄白	2.8	+	bw>pm	透明
	3	+	黄白	2.7	+++	bw>pm	透明
	4	+	黄白, 褐	5.6,2.9	++	bw>pm	透明
	5	+	黄白, 褐	5.8,5.0	+	bw>pm	透明
	6	+	黄白	3.1	++	bw>pm	透明
	7	+	白	2.7	++	bw>pm	透明
	8	++++	白	10.8	+	pm	透明
第2地点	1	++	白	2.0	+	pm	透明
	2	++++	白	8.8	++	pm	透明
風倒木根部	1	+++	灰褐	9.7	++	bw>pm	透明
西　壁	1	+++	白	4.3	++	bw>pm	透明
柱穴Ⅰ	2	++	黄白	6.3	++	bw>pm	透明
	4	++	黄白	5.3	++	bw>pm	透明
柱穴Ⅱ	1	+	黄白	3.0	++	bw>pm	透明
	3	+	黄白	5.7	++	bw>pm	透明
柱穴Ⅲ北	1	+	灰	4.2	++	bw>pm	透明
柱穴Ⅲ西	1	+	白	3.1	++	bw>pm	透明

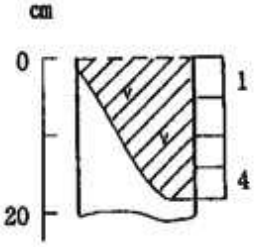
++++：とくに多い, +++：多い, ++：中程度, +：少ない, −：認められない．最大径の単位は, mm. bw：バブル型, pm：軽石型.



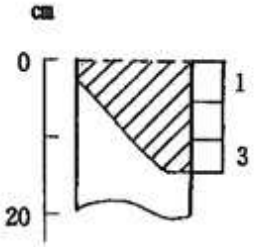
第31図　上大五郎遺跡第１地点中世溝の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第32図　上大五郎遺跡第１地点近世溝覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第33図　上大五郎遺跡柱穴（パターンⅠ）覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第34図　上大五郎遺跡柱穴（パターンⅡ）覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第Ⅵ章　おわりに

上大五郎遺跡では、前章までに述べてきたように、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡３軒、中世の館跡１区画（溝状遺構２条、掘立柱建物24棟等）、近世の溝２条、掘立柱建物群10棟他を検出し、遺物の出土をみた。おわりにこれらの遺構・遺物に関し、若干の私見を交えながら解釈を加えまとめにかえたい。なお、丸谷地区遺跡群の全体像については平成７年度刊行予定の『丸谷地区遺跡群　中大五郎第１・第２遺跡、本池遺跡、前畑遺跡』において明らかにしていきたい。

弥生時代から古墳時代について

３軒の竪穴住居が検出された。出土遺物よりＳＡ１は古墳時代初頭、ＳＡ２、３は弥生時代中期末から後期初頭に比定される。ＳＡ１のプランには若干の疑問が残る。古墳時代初頭の時期、主柱穴の位置、南壁の壁帯溝等を考慮すると、主軸が北から約45°西に振られた方形プランの住居であった可能性が高い。あるいは、間仕切り住居であった可能性も否定のできない。都城市祝吉第２遺跡７号住居は隅丸方形を基調とし突出壁を持つ間仕切り住居であるが、小型丸底壺等を有し古墳時代初頭に比定されている[1]。平野部においては弥生時代後期末までに姿を消す間仕切り住居が、内陸部の都城地域では古墳時代初頭まで残るようである。このＳＡ１もそのように想定すれば方形基調の間仕切り住居で、不整形のプランは張り出し部として捉えられようか。ＳＡ２、３はほぼ同時期のものであるが、両者は約35m離れており、周囲には同時期の顕著な遺構等は見られない。第Ⅱ章で述べたように、丸谷川を望む低位段丘上には弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が数多く点在する。その中で前畑遺跡[2]のみ密集し切り合う住居群（竪穴住居26軒）が見られたが、他の集落（下大五郎遺跡　竪穴住居12軒・掘立柱建物２棟、中大五郎第１遺跡　竪穴住居７軒・掘立柱建物２棟、中大五郎第２遺跡　竪穴住居６軒・掘立柱建物１棟）では遺構間のスペースが充分に保たれ、切り合いを見せる住居はほとんど見られない[3]。集落の存続期間の問題であろうが、上大五郎遺跡付近においても継続的な集落は営まれなかったと考えられる。また、下大五郎遺跡や中大五郎第１、第２遺跡では、竪穴住居とともに検出された掘立柱建物の中に同時期（弥生時代後期）のものも含まれることが指摘されている。今回、上大五郎遺跡で検出された掘立柱建物群のうち、時期を明確に指摘し得なかったものの中にもＳＡ２、３と同時期のものが含まれる可能性もある。ＳＡ３の北西約20mに検出されたＳＢ３は、１×４間で桁行柱間の平均値が117cmと他の掘立柱建物群とは大きく異なる。遺物の出土が無いために断定できないが、弥生時代の掘立柱建物である可能性が高い。

中世館跡について

ＳＥ１、ＳＥ２の２重の溝（堀）によって区画される館跡の面積は5,000㎡および、ＳＥ２内部だけでも約3,500㎡となる。ＳＥ１は区画の機能を有するとともに、通路としても機能している。溝底の硬化面は、東面では北の段丘縁まで続き、南面ではＴ字状に岐れて入口部へと延

びる。入口部には門が設けてあり、硬化面はその間を通り館内に続く。ＳＥ１は南西角で南北に岐れ、硬化面も二手に岐れる。一方は南に延び、他方は約５ｍの地点で西方溝外へ出る。その後北に延びるＳＥ１西面は断面Ｖ字状になり段丘縁に消える。硬化面は見られない。区画と排水を意識しているものと思われる。館に向かう経路としては、①ＳＥ１の南に延びる部分から南西角を経由し入口へ向かうもの②西側溝外からＳＥ１に入り、南西角を経由し入口へ向かうもの③段丘下からＳＥ１東面を通り入口へ向かうものの３通りが想定される。この③については、段丘下は現状で約100ｍで丸谷川に至る（遺跡付近は川が蛇行し、流路を頻繁に変えていたことが予想される。現状よりも近接していた時期も想定できよう。）ことから、丸谷川を利用した水上交通も十分に考えられる。

ＳＥ１とＳＥ２の間はほとんど無遺構地帯であり、館の防御上のことを考慮するならば（ＳＥ１が通路として利用されており、防御的な色彩は薄いことから）土塁の存在を想定しても良いであろう。ＳＥ２はＳＥ１に比べ掘削が浅く、部分的に検出できない場所も見られた。土塁の内側に巡らされた雨水処理的な排水溝と考えられる。ＳＥ２に伴う土坑の存在は、集めた雨水を御池ボラ層に浸透させて処理する集水桝的なものと捉えられよう。

ＳＥ１、ＳＥ２への文明ボラの入り方は、館の変遷を示唆している。ＳＥ１の溝底に硬化面が見られる場所は、文明ボラが比較的低位に入っている。ＳＥ１西面の硬化面が見られず区画および排水をその機能として持つ部分については、埋土の堆積速度が速く、文明ボラが溝の中位から上位に入っている。また、溝を掘削し直した形跡は見られない。ＳＥ２は当初から掘削が浅く、文明ボラの堆積によって多くの部分が埋没し、その後暫くして溝を掘削し直すことなく放棄されている。ＳＥ１では、入口部を含め文明ボラの上位に硬化面が見られる部分があり、文明ボラの降下後も機能し、館は存続していると見てよい。

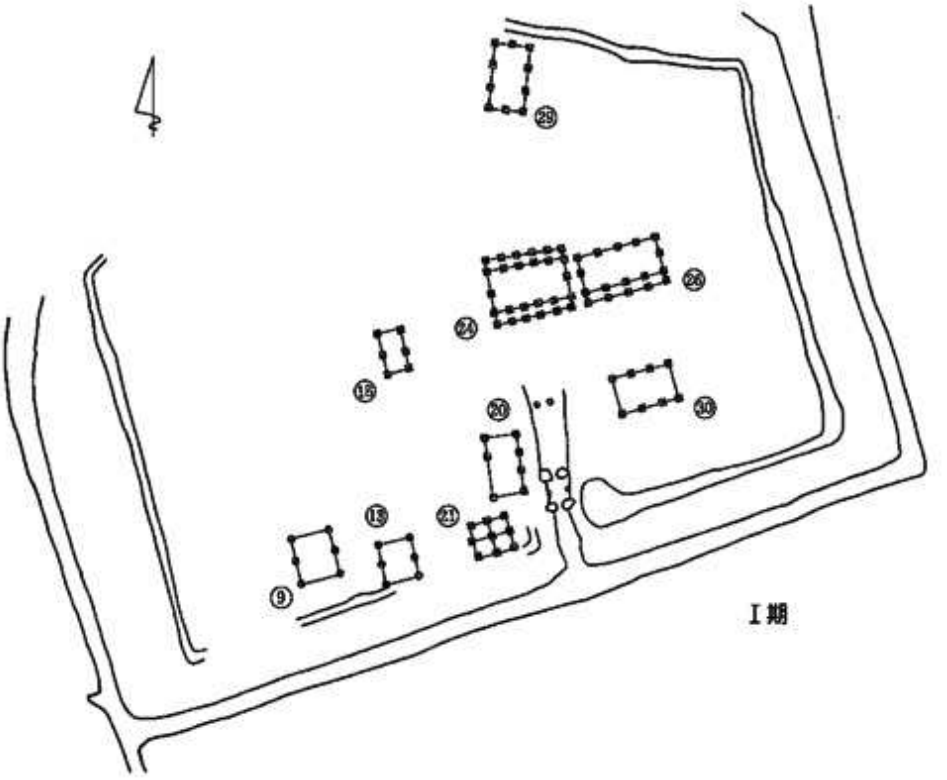
遺物は量的に非常に少なく、出土状況も明確でない。23、24の東播系の捏鉢や25のヘラ描蓮弁文の青磁碗、端反りの青磁碗や白磁皿等14世紀から15世紀の中でやや時期幅を持つ遺物群であるが、30の陶器碗や図示はしなかったが備前焼のすり鉢や大甕はやや時期が下がり16世紀以降に位置付けられようか。

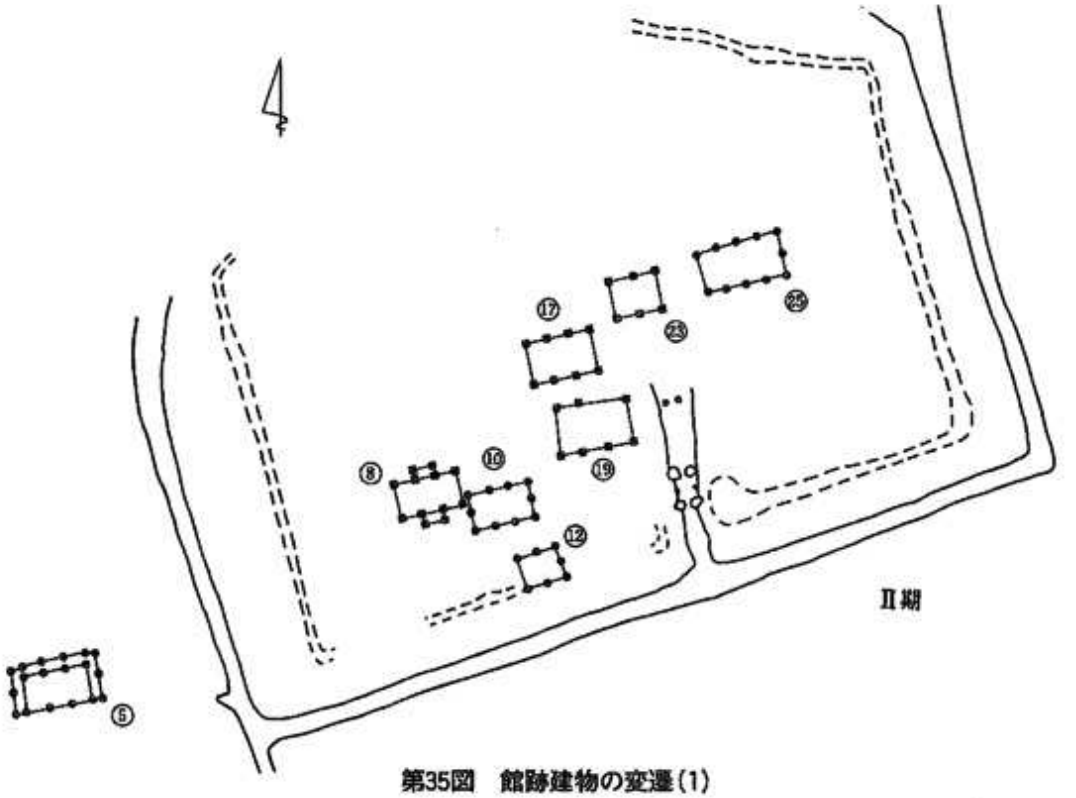
掘立柱建物群のグルーピング

館跡に伴うとした24棟の掘立柱建物群の中で重複が見られるのは、11号・12号・13号の３棟、17号・18号の２棟、19号・20号の２棟、22号・23号・24号の３棟、25号・26号・27号の３棟の５カ所であり最大で３棟の重複となる。よって少なくとも３時期に分類可能と思われる。基本的には棟方向を重視し、溝との関係、掘立柱建物の分布状況等も考慮して３期にグルーピングした（第35、36図）。各期とも７～９棟の掘立柱建物群が見られるが、これらの全てを同時存在と捉えるか否かについては判断の材料を持ち合わせていない。細かな時期差を含む可能性のあることを理解しておきたい。

Ｉ期（館構築期・文明ボラ以前）

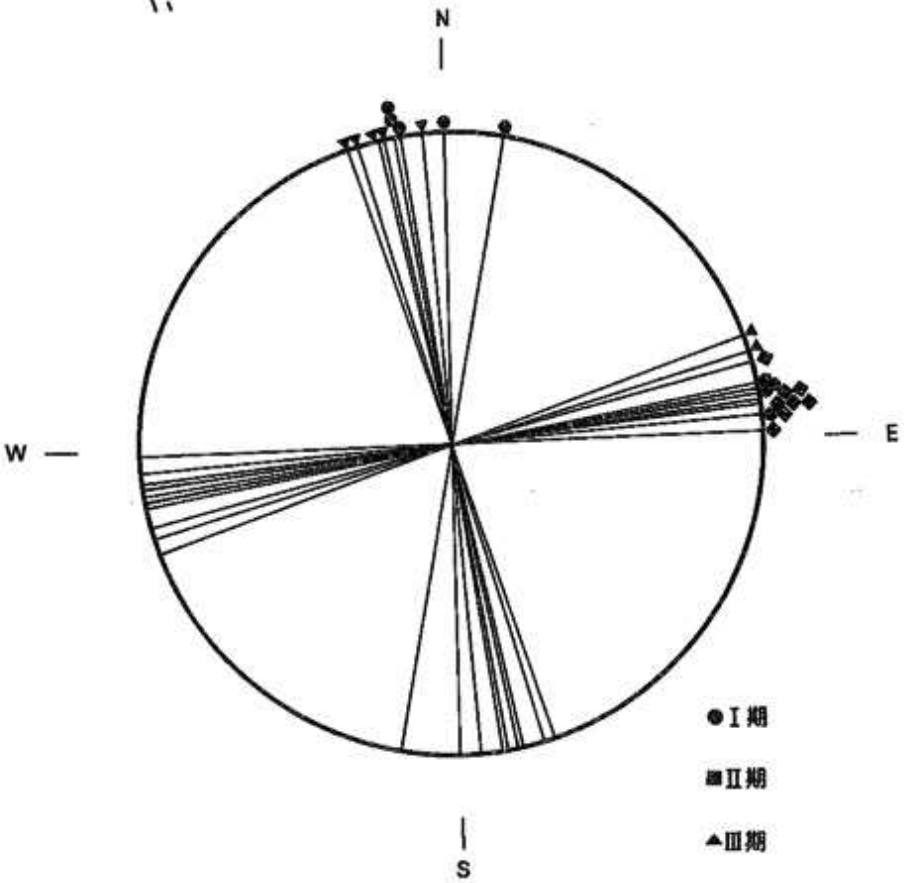
９号、13号、18号、20号、21号、24号、26号、29号、30号





第35図　館跡建物の変遷(1)

第36図　館跡建物の変遷(2)



第37図　建物棟方位分布図

館跡が構築された時期で、中央部に主殿的建物（24号、26号）を持つ。棟方向は東西、南北の両者が見られる。20号、29号は棟方位が他と若干異なるが、ＳＥ１、ＳＥ２の存在を十分に意識して方向を合わせていることから館構築期のＩ期とした。

Ⅱ期（文明ボラ降下以降）

５号、８号、10号、12号、17号、19号、23号、25号

主殿的建物は存在する（25号）。ＳＥ２は、文明ボラの降下後暫くして埋没し放棄されており、12号はＳＥ２の存在した地点を越えて建てられる。全て東西棟の建物は館正面を意識していると思われ、また文明ボラ上位にも硬化面が見られることからＳＥ１は機能し館は存続していると考えられる。しかし、ＳＥ１の西面やＳＥ２を掘削し直した形跡が見られないことから、館としては衰退の傾向が窺えよう。ＳＥ１の外側にまで建物が建てられる（５号）ことも、そういった流れの中に理解されよう。

Ⅲ期（館解体期）

11号、14号、15号、16号、22号、27号、28号

主殿的建物が消える。棟方向もまちまちでＳＥ１、ＳＥ２の方向は意識していない。ＳＥ１が埋没しきる時期を示す積極的な材料はないが、この時期に機能を失うと考えておきたい。建物の多くは北の段丘縁寄りに集中する。グルーピングからは除外しているがＳＢ32～34も段丘縁寄りに分布しており、この時期に含まれる可能性も否定はできない。

ここで再度、館の全体的な流れと時代背景をイメージしてみたい。館の出現は、15世紀前葉～中葉（1471年の文明ボラ降下以前）に求められよう。大きな溝（ＳＥ１）に画された面積は5,000㎡にもおよぶ。土塁を備え、内側にもう１重の溝（ＳＥ２）を巡らす。中央部には庇を有する大きな建物が２棟（ＳＢ24・26）見られる。周囲に配される建物は溝や入口に方位を合わせている（ＳＢ13・20・21・29）。館北西部は建物が見られず空白部となっているが、遺跡全体からみてもその付近はピット等の分布が希薄であり、旧微地形が高まっていた部分を水平に削平したために遺構が損なわれた可能性もある。館出現の契機としては、15世紀初頭から断続的に続く島津氏、伊東氏の抗争という社会的（政治的）緊張の中に求められよう。なお、隣接する本池遺跡[4] Ａ地区では10世紀前後の掘立柱建物７棟が検出されている。調査区南東部に分布し、さらに南に広がりをもつと思われる。墨書土器や越州窯系青磁、大量の須恵器、布痕土器が出土している。館跡との距離は約150mである。また、両者の間には中世と思われる掘立柱建物７棟も検出されている。館跡の掘立柱建物群とは棟方位がやや異なり、館跡よりも時期的に遡る可能性が高い。このように遺跡付近では、古代末から中世にかけて断続的な集落変遷が見られる。

文明ボラの降下が見られる15世紀後葉頃から館の衰退傾向は見られる。建物群は棟方位を揃え、主殿的建物（ＳＢ25）も見られるが、ＳＢ12はＳＥ２の放棄を示している。館は存続しているもののＳＥ１、ＳＥ２の埋没に対して再掘削等手を加えることは行われていない。Ⅲ期とした建物群の内ＳＢ11・22は棟方位や分布位置等からⅡ期に通じる傾向が認められる。ＳＢ14・15・16・27・28は棟方位を揃えているものの、それらはＳＥ１を意識していない。主殿的建物も

見られない。Ⅲ期はＳＥ１が機能を失い、館が解体していく時期として捉えられる。16世紀中頃、北郷氏により都城盆地の政治的統一が達成され、１世紀半にもおよぶ社会的不安定は、地元領主層の居館や山城の再編成とともに解消される。このような社会の動きの中で、館の役割を終えていくと理解しておきたい。

都城市松原第１遺跡[5]では、上大五郎遺跡で見られたと同様の溝に区画された方形の館跡の一部が調査されている。出土遺物の検討より13世紀後半、14世紀後半から15世紀前半の２時期の館とされている。後者の時期、溝に区画される面積は約5,000㎡と上大五郎遺跡と近似している。田野町天神河内第１遺跡[6]、宮崎市宮崎学園都市遺跡群前原北遺跡[7]、熊野原遺跡Ｃ地区[8]でも同時期の集落が見られ、溝で区画された建物群が確認されている。天神河内第１遺跡は、宮崎平野と都城盆地を繋ぐ交通の要所であり、宮崎学園都市遺跡群も島津氏、伊東氏の抗争の舞台として知られる。上大五郎遺跡を取り巻く歴史的背景と同様の流れの中に位置付けられよう。

〈註〉

(1) 都城市教育委員会 『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第２集 1982

(2) 都城市教育委員会 『上大五郎遺跡・前畑遺跡』都城市文化財調査報告書第26集 1994

(3) 都城市教育委員会 『中大五郎第１遺跡・中大五郎第２遺跡』
都城市文化財調査報告書第20集 1992

・下大五郎遺跡については、平成２年度に丸谷川河川改修事業に伴い宮崎県教育委員会により調査された。調査担当の山田洋一郎氏より御教示を受けた。

(4) 都城市教育委員会 『丸谷地区遺跡群・上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第22集 1993

(5) 都城市教育委員会 『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』都城市文化財調査報告書第７集 1989

(6) 宮崎県教育委員会 『天神河内第１遺跡』 1991

(7) 宮崎県教育委員会 「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第４集 1988

(8) 宮崎県教育委員会 「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集 1985

〈附記〉

脱稿後に得た２、３の知見について記す。江戸時代末期に編纂された『荘内地理志』巻八十八に「丸谷某屋敷跡」という古絵図が見られる。丸谷川左岸の低位段丘縁に、三方を堀にて区画した屋敷（館）が存在している。三間幅の堀に囲まれた面積は三反とあり、南方段丘下から館に入る入口が見られる。上大五郎遺跡においても、段丘下からＳＥ１を経由し館内に入る経路が推定され、両者の共通点として指摘し得る。この「丸谷屋敷」は、上大五郎遺跡の対岸やや東方に推定されるが、近接した時期に近接した場所で営まれたと考えられる。一方は記録に残され、また他方は記録に残らないことは何らかの要因があるのであろうか。また、都城市早鈴町上ノ園第２遺跡でも、古記録に残されていない同時期の館跡が調査された。防御性の高いＶ字の堀に囲まれた館内には掘立柱建物群や庭園遺構、門状遺構が検出されている。

重永卓爾 「日向国庄内に於ける中世城郭について」『南九州文化』第29号 南九州文化研究会 1986
都城市教育委員会 『上ノ園第２遺跡』都城市文化財調査報告書第27集 1994

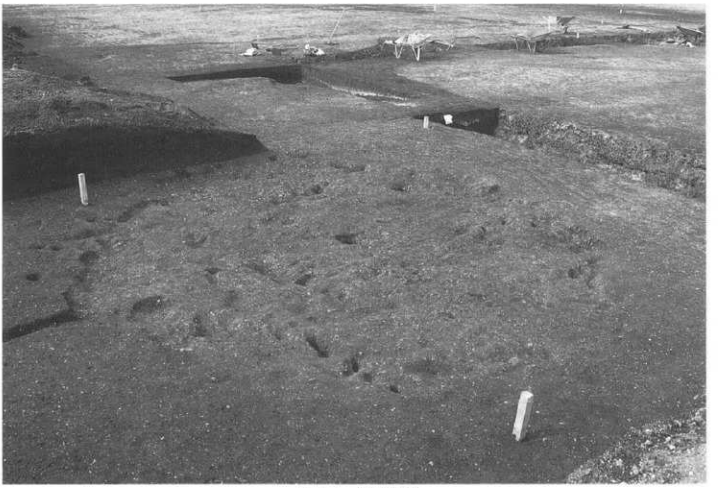
図　版

上大五郎遺跡館跡全景（西から）

遺跡全景（検出時）

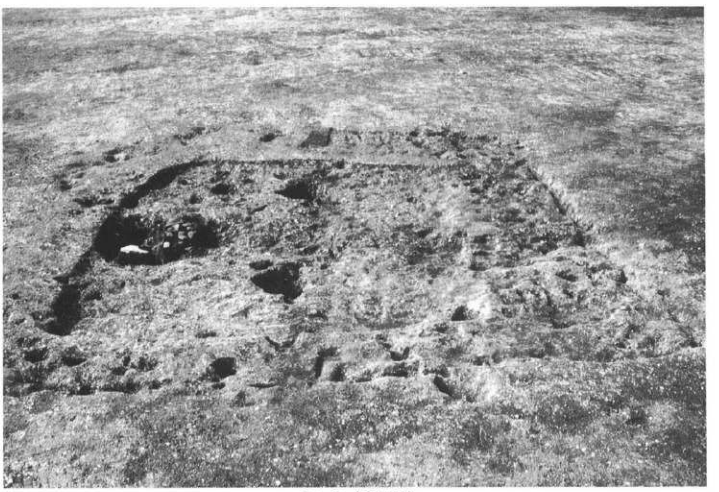
遺跡全景（完堀時）

ＳＡ１（検出時）



ＳＡ１（完堀時）

ＳＡ２（検出時）



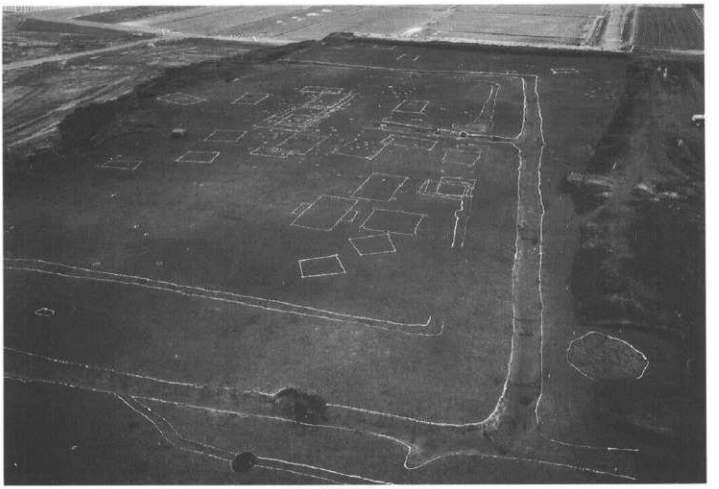
ＳＡ２（完堀時）

ＳＡ３（検出時）

ＳＡ３（完堀時）

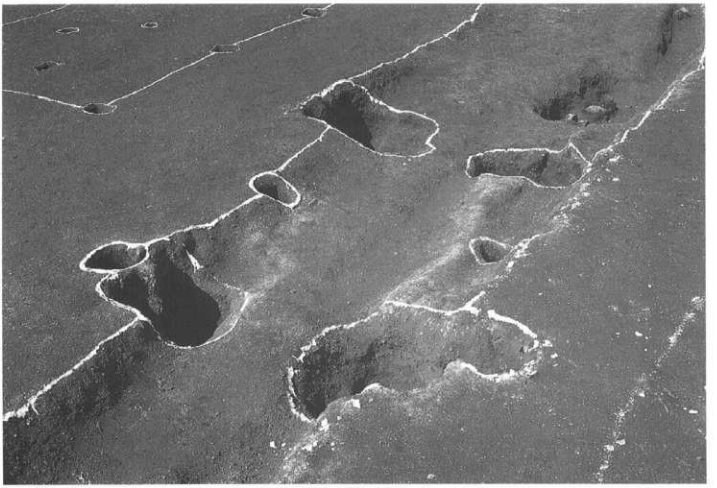
館跡（完堀時・垂直）

館跡（完堀時・北斜）



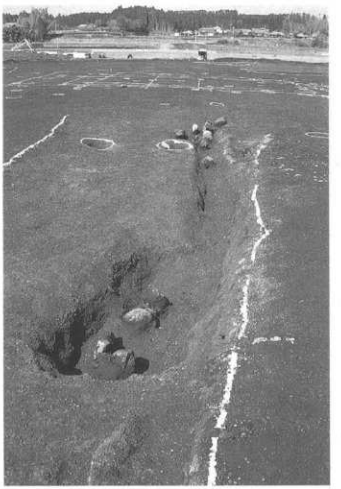
館跡（完堀時・西斜）

館跡（完堀時・南斜）

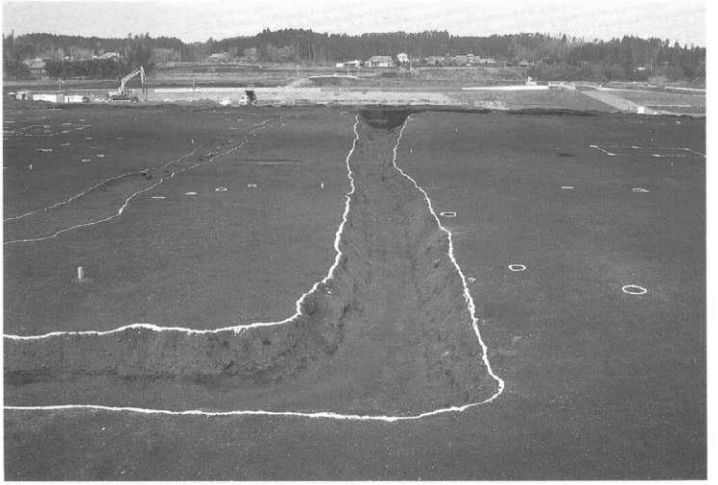


門跡柱穴群（南から）

門跡柱穴群（北から）



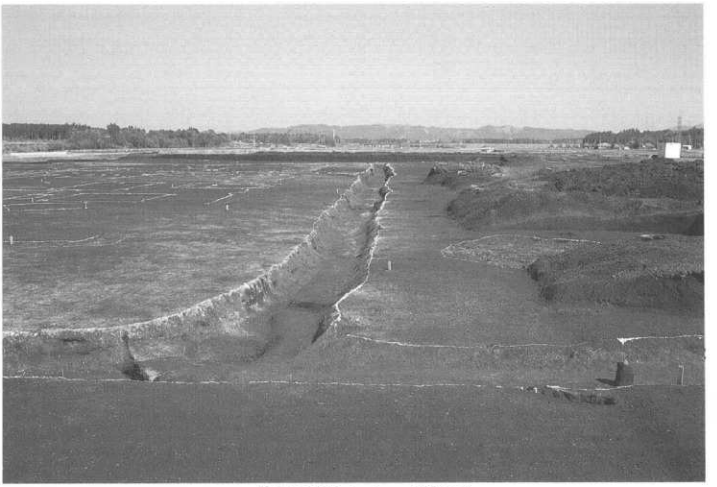
入口部・ピットと排水遺構



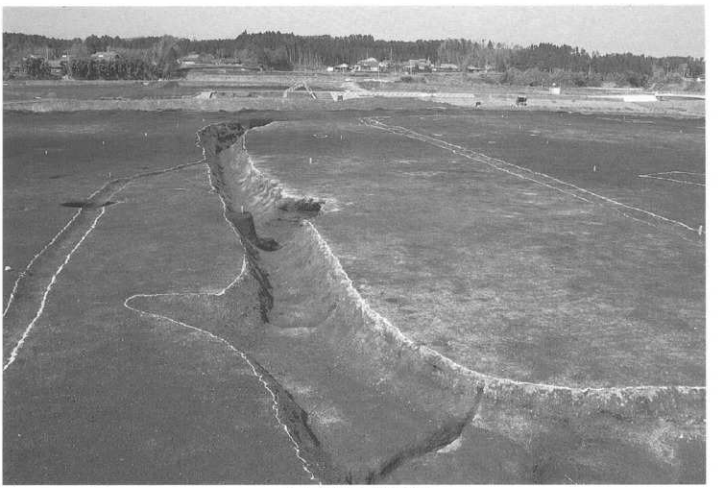
ＳＥ１南東コーナー（南から）

ＳＥ１南東コーナー（東から）

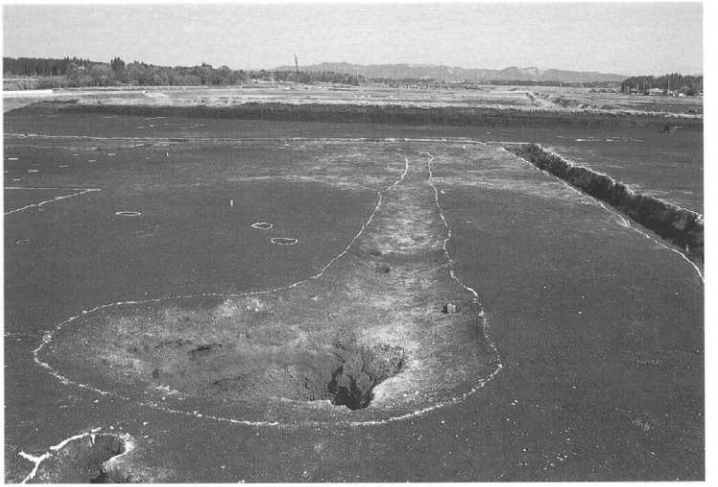
ＳＥ１入口部硬化面



ＳＥ１南西コーナー（西から）

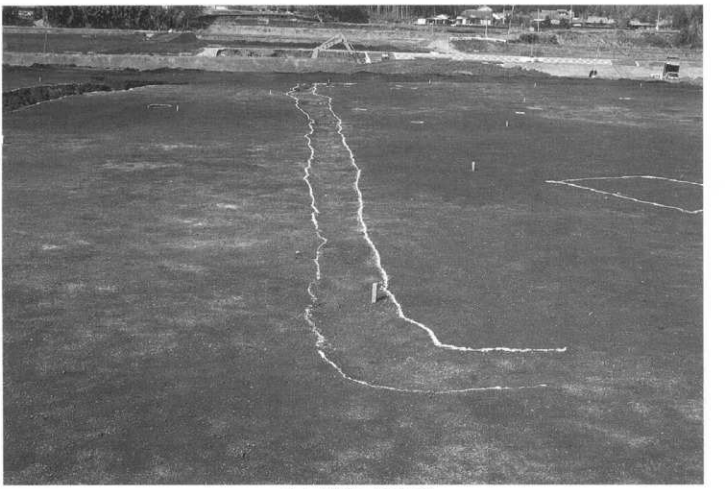


ＳＥ１西面（南から）

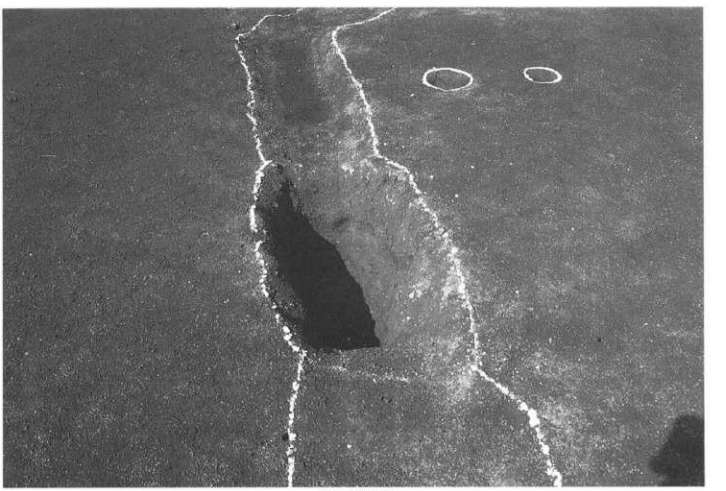


ＳＥ２南面（西から）

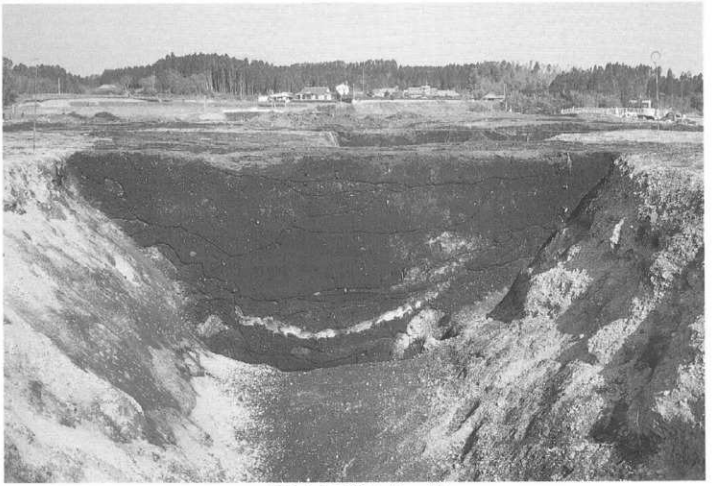
ＳＥ２北東部（東から）



ＳＥ２西面（南から）

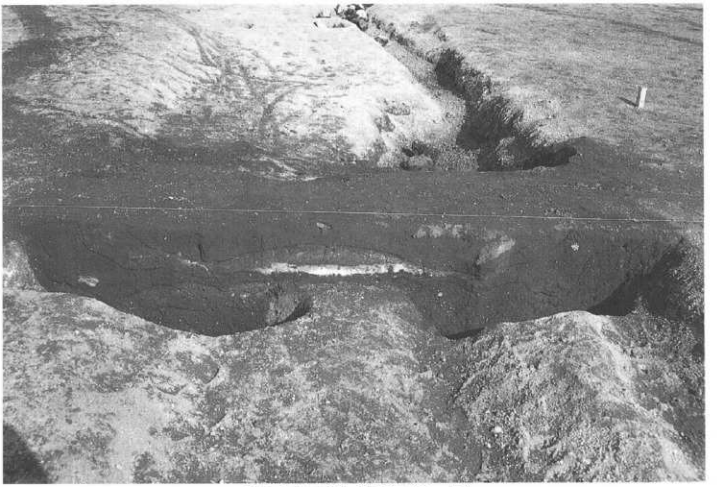


ＳＥ２土坑

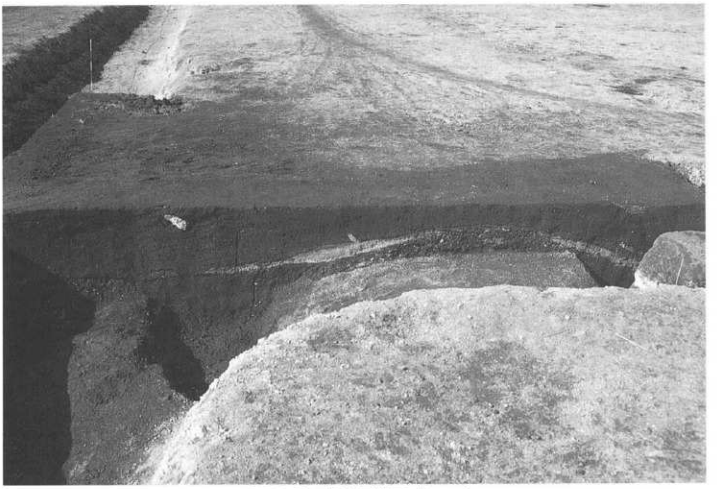


ＳＥ１土層断面（Sec.１）

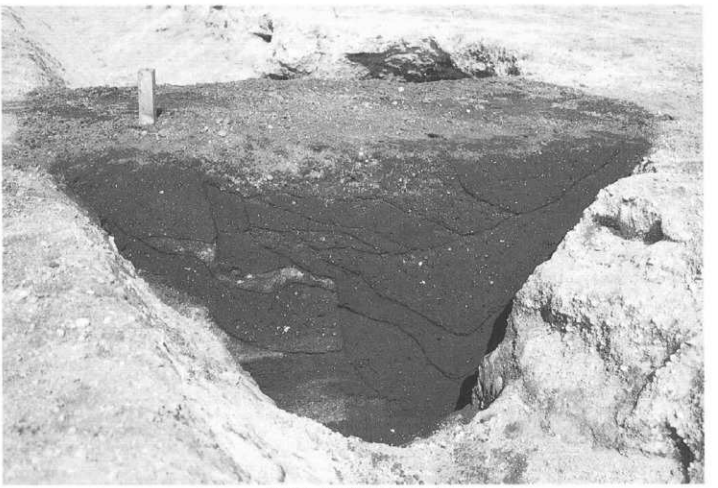
ＳＥ１土層断面（Sec.９）



ＳＥ１入口部土層断面（Sec. 5）



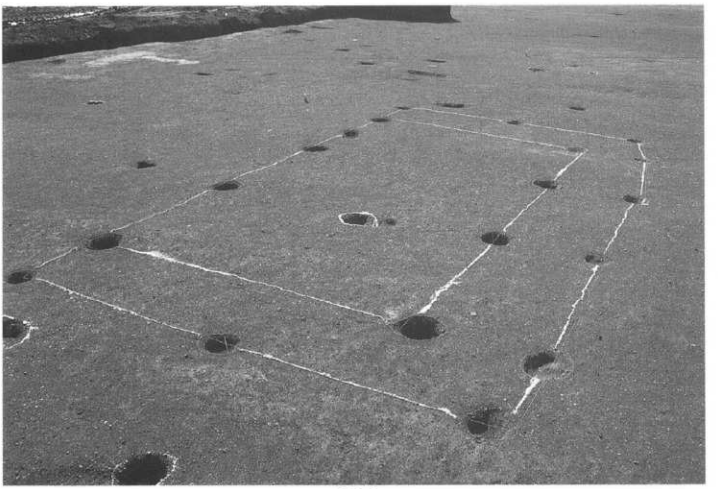
ＳＥ１入口部土層断面（Sec. 4）



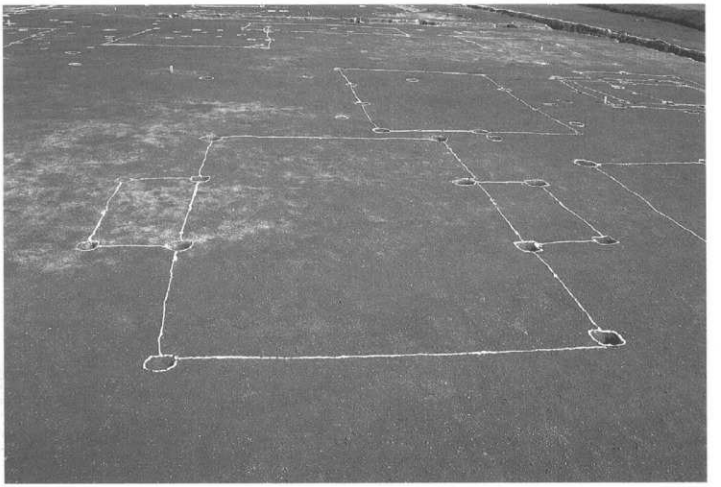
ＳＥ１土層断面（Sec.７）

ＳＥ２土層断面（Sec.11）

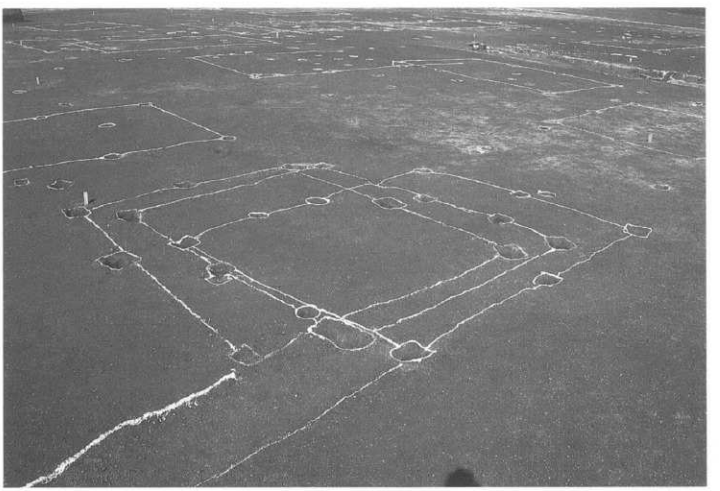
館跡・掘立柱建物群



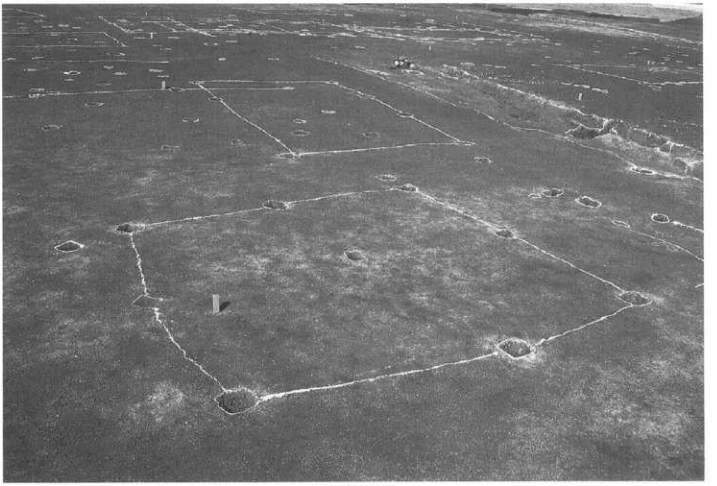
ＳＢ５



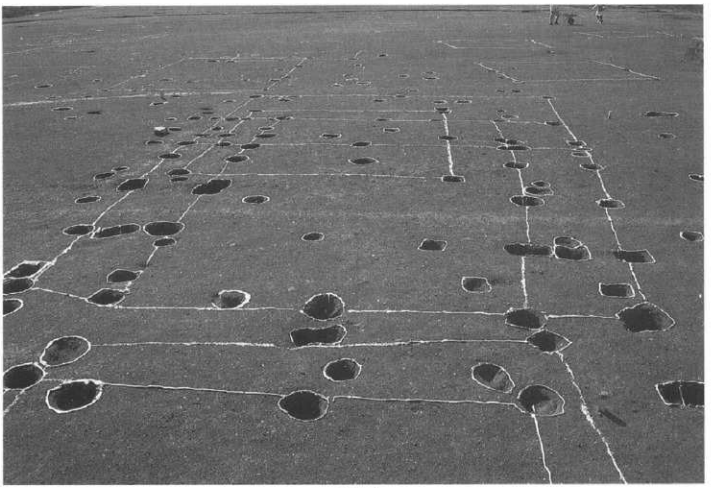
SB 8



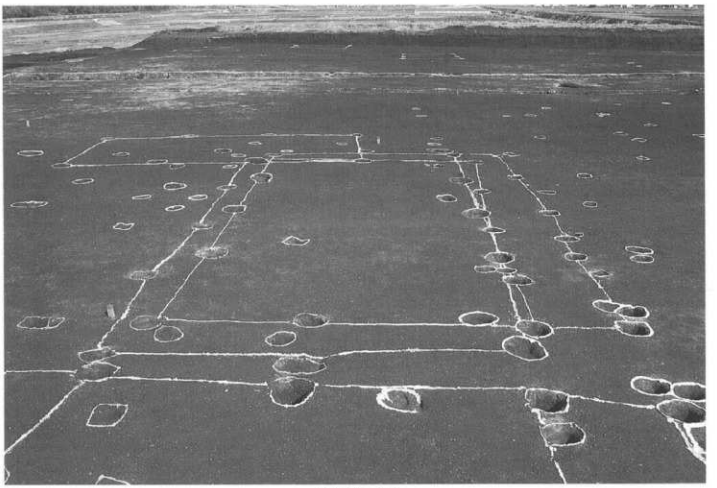
SB11・12・13



S B20・21

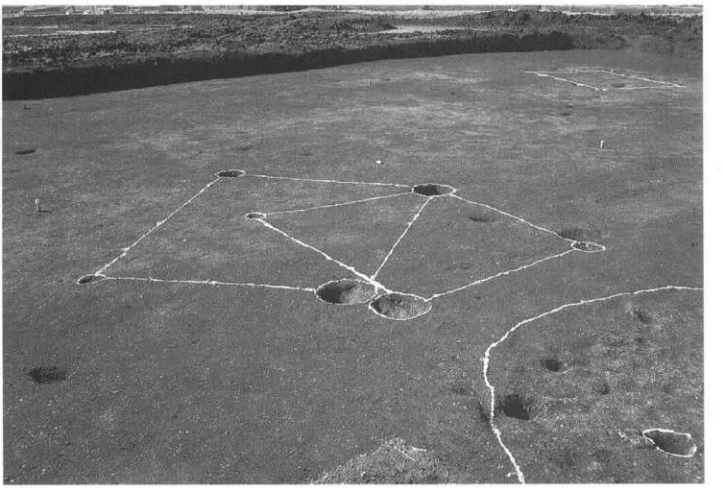


S B24

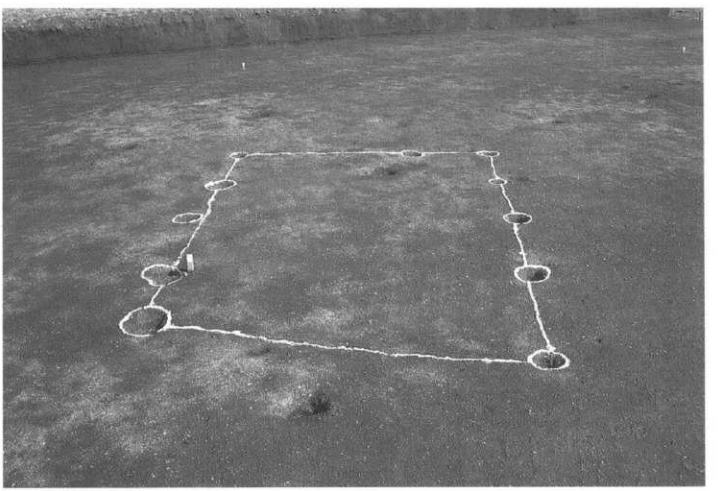


S B 25・26

S B 28・29



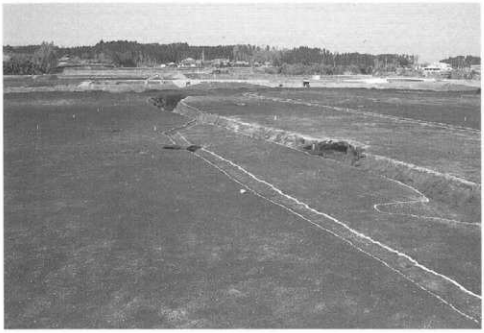
SB1・2



SB3

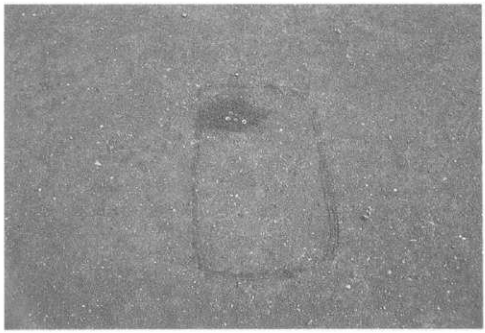
SB4

SB6・7

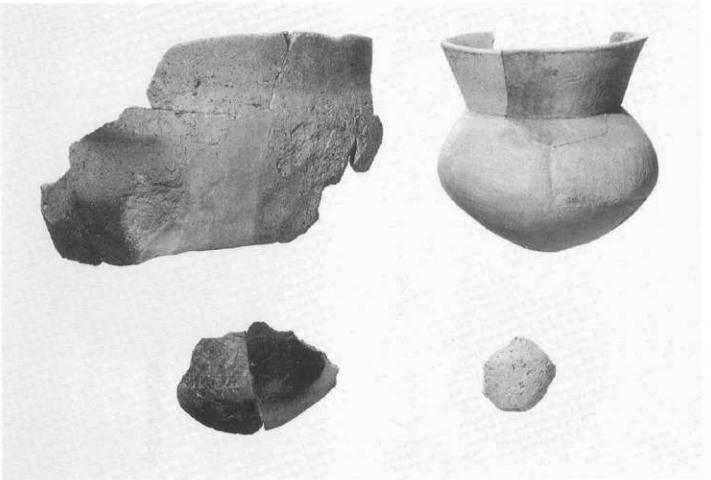


SE3

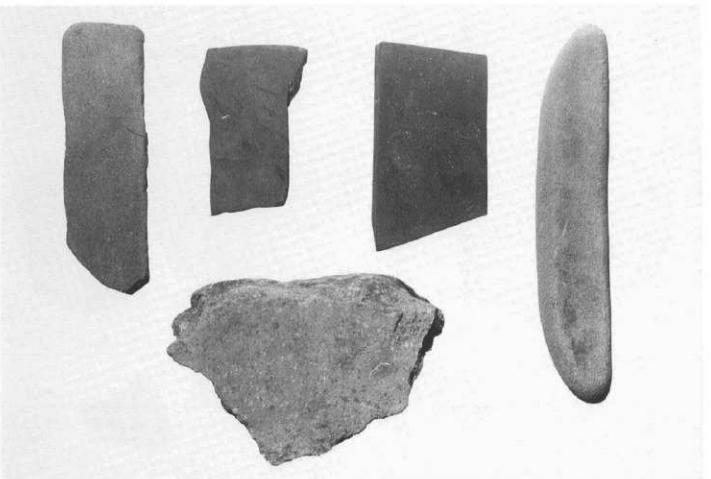
SE1・3・4



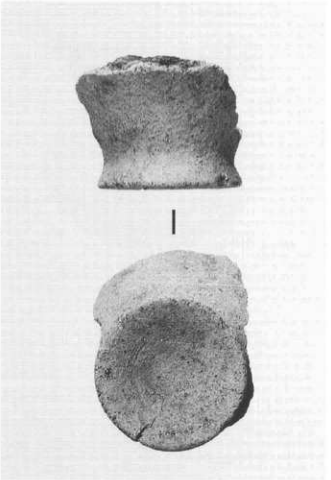
SD1



ＳＡ１出土土器

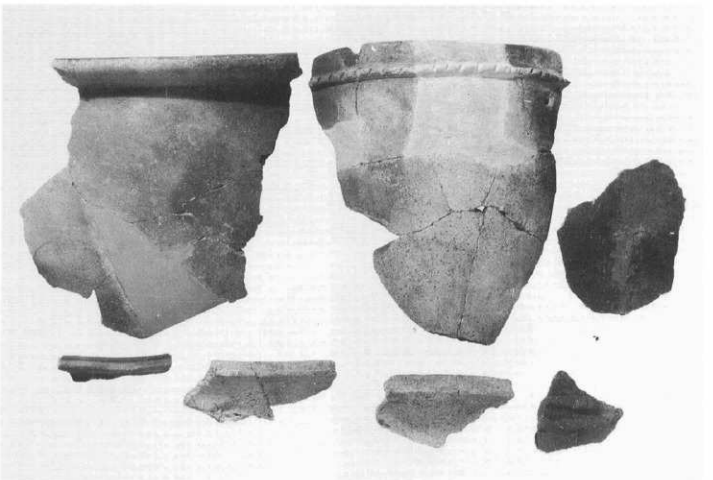


ＳＡ１出土石器

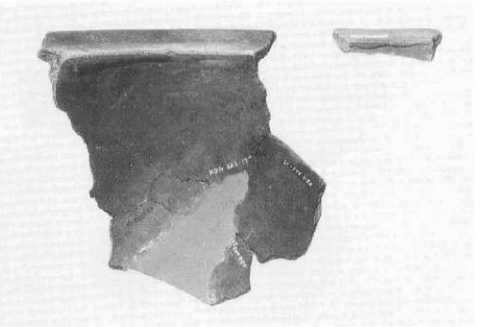


ＳＡ２出土土器(1)

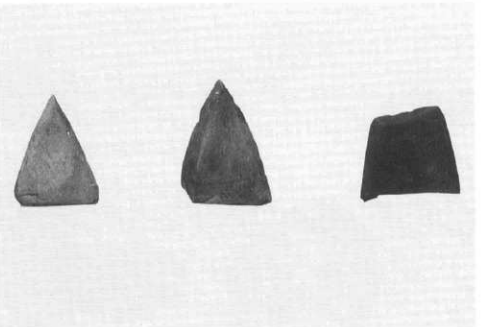
ＳＡ２出土土器(2)



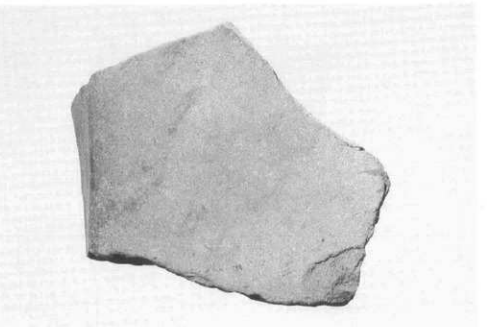
ＳＡ３出土土器



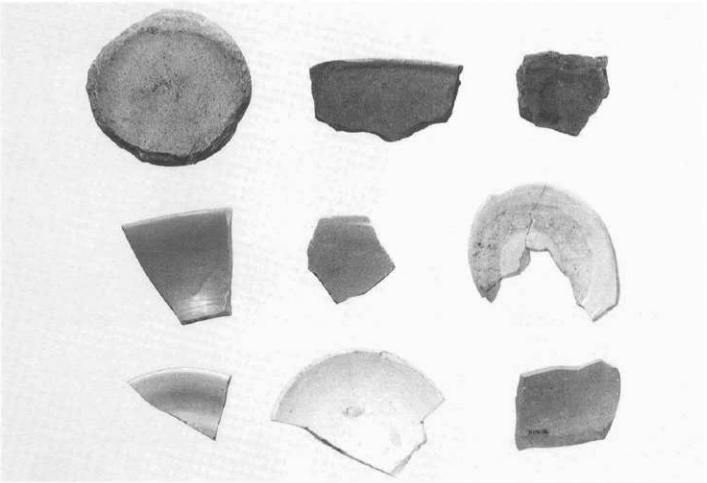
ＳＡ３出土甕形土器内面



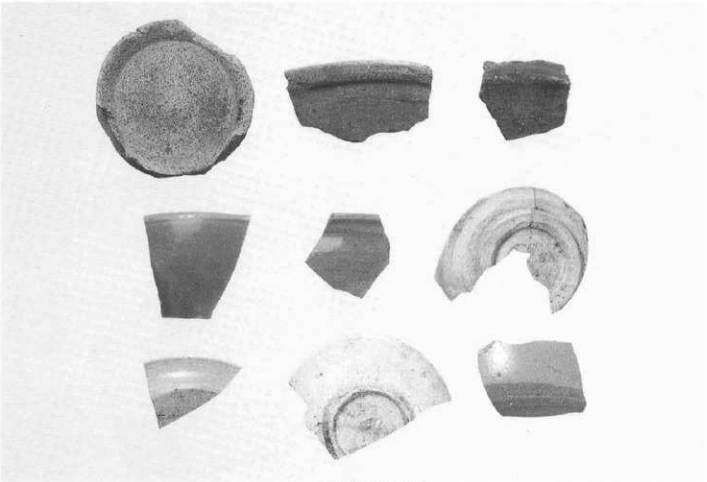
ＳＡ３出土磨製石鏃



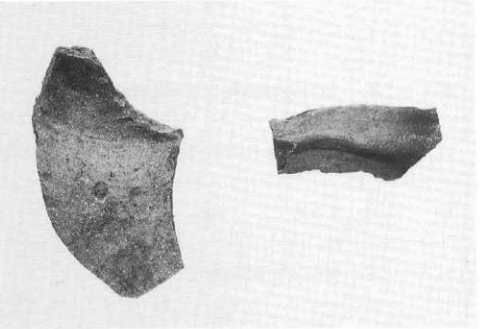
ＳＡ３出土石皿



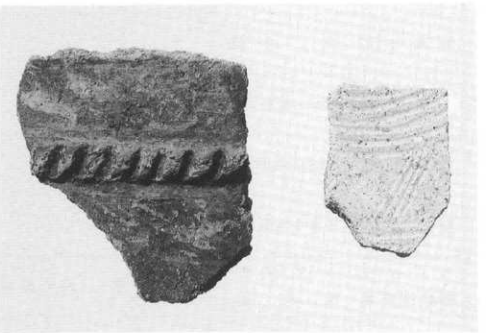
ＳＥ１出土土器（内）



ＳＥ１出土土器（外）



ＳＥ１出土備前焼



ピット出土土器(1)

ピット出土土器(2)

フリガナ	マルタニチクイセキグン　カミダイゴロウイセキ
書名	丸谷地区遺跡群　上大五郎遺跡
副書名	丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第31集
編集者名	東　憲章
発行機関	都城市教育委員会
所在地	都城市姫城町6街区21号
発行年月日	1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
上大五郎遺跡	都城市丸谷町 大字上大五郎	31°48′02″ 付近	131°04′05″ 付近	1993,11,23 ～ 1994,02,16	12,500	農業関連

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落 館跡	弥生・古墳 中世 近世	竪穴住居　3 掘立柱建物群　34 溝　4 土坑	弥生土器 土師器 陶磁器 石器	中世館跡の全体像を調査

都城市文化財調査報告書第31集

丸谷地区遺跡群
上大五郎遺跡

丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

平成7年3月

発行　都城市教育委員会
都城市姫城町6街区21号

印刷　㈱みやこ印刷
都城市大王町51-22